
仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか 孤独<いま>を変えるは龍の騎士

ボロット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか 孤独くいまを变える
は龍の騎士

【Nコード】

N1209S

【作者名】

ボロット

【あらすじ】

戦いの果てに己の願いを見つけ、それに準じて命を落とした仮面ライダー龍騎、『城戸 真司』

仮面ライダーとしての彼の存在は消滅したはずだった

しかし、それをよしとしなかった仮面ライダーオーデインにより彼は別の次元世界で新たな生を歩むこととなる
その世界は……

前書き

（注意）

1・この作品は簡単にいえば、『仮面ライダー龍騎』本編（つてか49話）終了後の主人公『城戸 真司』を『魔法少女まどか マギカ』の世界観にぶち込んだ、いわゆる『本編再構成モノ』というやつです
苦手な方はご注意下さい

2・この作品では別作品の登場人物同士によるカップリング要素が存在します
苦手な方はご注意下さい

3・この作品のコンセプトは『ハッピーエンドを返しにもらいにきた！』です

それゆえに『仮面ライダー龍騎』、『魔法少女まどか マギカ』の両作品に関して多くの独自設定、独自解釈、ご都合主義な展開、そして（多分）若干のキャラ崩壊を含みます
苦手な方はご注意下さい

4・確かにこの作品がもはや何番煎じなのか分からないモノのはわたしの責任だ、だがわたしは謝らな……ごめんなさい

5・どうでもいい話ですが龍騎が『戦わなければ生き残れない！』なら、

まどマギは『戦ってしまえば生き残れない！』ですよ

ブローグ 死んだら終わりだぞ

男がいた、ひたすらに駆け続け、ひたすらに迷い続けた男が

男は知った、世界の裏で行われる狂った戦いを
ゆえに駆けた

人々を守るために、戦いを止めるために

男は知った、その戦いの参加者には狂うに値する利用が、『願い』
があることを

ゆえに迷った

その『願い』を『願い』を持たない自分が踏みにじってよいのかと

男は迷い、駆けぬけ、そして見つけた、否、気付いた

自分の叶えたい『願い』に

「はあ…、はあ……、はあ……………」

人々を食いつくさんとしていた青いモンスターを殲滅し、必死の
思いでミラーワールドを這い出した。

歪んでいく視界に移ったのは、彼が先程助けた少女が母親にしっかりと抱きしめられている姿。

- - -よかった

そう思ったと同時に、彼は膝から崩れ落ち、鏡が砕け散るような音と共に鎧が離散した。

それに気付きこちらを向いた戦友、『秋山 蓮』

彼を安心させようとゆっくり立ち上がる。

しかし、

「……………やっと……答えらしいものが……………見つかったかもしれない」

「でも……、なんか俺……」

……ダメ、かもしれない

足があるようにすら思えず、バランスを崩し後ろの車へと倒れ込んでしまった。

車の白いボディがそこだけドロリとした朱に染まる。

「っ！？城戸！おい！」

蓮が慌て駆けより、その身体を支える。

触れた瞬間、両手が血にまみれた。

傷を見るまでもなく分かる、致命傷だ。

「おい……どうした……………？」

蓮から彼のものとは思えない声が震え出る。

彼はその問いには答えず、己の気付いた『願い』のことを、残り少ない命を動かして語り始めた。

「俺…昨日からずっと考えてて……それでも…わかんなくて……」

「でも…さっき思ってたんだ………」

『さっき』、異形から守った少女が母と再会できたのを見たあの時、

戦いに赴いた際にも頭に響いた言葉が、もう一度聞こえた。

――『お前の信じるもの』だよ

彼の尊敬する人物の言ってくれた言葉、

彼は今まで迷い続けながらも人を守るために戦い続けた。

そうと決意したのは、奇しくも今日見たものと同じ少女の涙からだつた。

そして気付いた、『自分の信じるもの』に
そしてそれこそが――

「…やっぱり…ミラーワールドなんか閉じたい…戦いを…止めたい…って…」

…『自分の願い』だったということに

「きつと…スゲーつらい思いしたり…させたりすると思うけど…それでも…止めたい」

「それは…正しいかどうかじゃなくて…俺の…ライダーの一人として…叶えたい『願い』が…それなんだ…」

「だったら…!」

蓮が叫んだ、地を揺るがすかと思えるほどの絶叫
それさえも、彼には遥か遠くから響いてきたもののように思える程、
遠い。

「だったら、生きてその願いを叶えろよ!死んだら…終わりだぞ!」

「そう…なんだよな…」

彼が視線を蓮へと向ける。
その瞳はただ眩しく、何も見えない。

「だから…蓮…お前はなるべく………」
ゆつくりと、しかししっかりと、自分を支えてくれている暖かな
手を握った。

「……生きる」

「っ！…お前こそ生きる！！城戸！死ぬな！死ぬな………！」

「…は、はは、まさか、お前が俺に、そんな風に言ってくれるな
んてな」

彼は笑った。

彼がいつも他愛のないことで見せていた、懐かしい、優しい笑み。
笑顔のままでもぶたが閉じていく。
力が抜け、蓮の握る力だけが一方的に強くなる。
そして…

「………」

「城戸……？おい城戸っ！！城戸おおおおおおおっつ！
！」

友を亡くした騎士の叫びが、辺りに虚しく、哀しく響き渡った。

この日、彼、『城戸 真司』のライダーバトルは終わりを告げた。

そして、永遠に続けられていた一人の少女を救うためだけの宴も、彼の兄が全てに気づき、全てをあきらめたことにより終了。戦いの記憶は修正され、一つの物語が大団円を迎えた。

……もう一度言う、城戸 真司の『ライダーバトル』はこの日終わりを告げた。

これから語るのは終わりの『その先』、
仮面ライダー龍騎の、城戸 真司の『物語』の続きである。

「ん、うん……………」

「目覚める、仮面ライダー龍騎、城戸 真司」

「おれたちは…かめんらいだーだあ……………」

「…目覚める」

「あいつた!?!」

真司は突如襲った脇腹の激痛に無理矢理覚醒させられた。
寝ぼけ眼を擦りながらなんとか状況を確認して……

状況 1

辺り一面が真っ白け

状況 2

何故か『十三人目』、仮面ライダーオーデインが自分を見下ろし

ている

状況1、2から確認できること
まさにエターナルカオス

この状況下で推奨される打開策

「…じゃあお休み」

現実逃避

「目覚めろ」

「痛っ！痛い！起きてる！起きてるからもう踏むなって！」

彼の脳内コンピュータで弾き出された打開策は強烈なストンピングであっさり無効化された。

このまま踏まれたら確実に肋骨が二三本は逝く、
そうなつては堪らないと真司は急いで飛び起きた。

「目覚めたか、城戸真司」

「いや目覚めたっていうか目覚めさせられたっていうか……、
ってそんなことより！

なんだよここ！なんでお前がいるんだよ！それに俺は……」

掴みかからん勢いでオーディンへと詰問する真司だったが、はたとその口が止まり、自身の手を見つめた。

正しくは、その手に流れている血潮を。

普通ならばなんでもないことだ、だが、今の真司にとってそれは異常に他ならない。

なぜなら彼は、

「俺は…、死んだはずだ」

確かに覚えている。

薄れていく意識の中蓮に見守られながら自分の見つけた『願い』を語り、

蓮がそれに酷い声で返した。

一体どんな顔をしているのか気になったがもはやそれすらも見えず、その事実で、自分はもう終わりなのだと理解して、

だからせめてなんとか最後の言葉を、思いを搾り出した。

それが真司の覚えている最後の記憶、

それが勘違いだったとはとても思えなかった。

「そうだ、お前は死んだ」

オーディンの文字通りの鉄面皮がほんの少し歪んだように思えた。それが同情なのか、なんの感情からなのか真司にはわからなかったが、少なくとも真司自身の気持ちは暗くなかった。

確かに色々と思うところはある、
それでも最後には自分の願いを見つけられたし、蓮に伝えたいことは伝えたのだ。

そもそも後悔があればあんな笑顔で死ぬことは出来なかっただろう。

「…てことは、もしかしてここって天国？」

「違う、言っておくが地獄でもないぞ」

「じゃ、じゃあなんなんだよここ？」

「それを説明するためには、まずは戦いの結末を話さねばならない」

オーディンは話し始めた。

秋山 蓮、仮面ライダーナイトと自分の決着のこと。

蓮が最後の勝者となって獲得した『新しい命』により、彼の恋人

「小川 恵里」は蘇生したこと。

だが蓮自身は自分との戦いで致命傷をおい息を引き取ったこと。

神崎 士郎は妹「神崎 優衣」の説得により戦いの完全終了を決断。

世界はライダーバトルの存在がなかったように修正されたこと。

その話を真司は黙って聞いていた、蓮の死については唇を噛み締めて、少ししてやめた。

話が終わると、一言「そっか」と呟いた。

「つて、あれ？」

と、いきなり何かに気づき、首を傾げた。

「修正がどうとかって言うけど、だったらおかしくないか？」

「わたしとお前の存在か？」

「そう、そうだよ、それになんで俺まだライダーたちのこと覚えてるんだよ」

真司は一度オーデインの『タイムベント』による時間の巻き戻しを受けている。

その度に記憶も同じように巻き戻されてきた。

今回の時間再生もそれと同じでライダーの戦いの前まで巻き戻されたというのなら、自分の記憶も巻き戻されているはずだし、オーデインにいたっては存在そのものが消えているはずなのだ。

「そうだな、順に説明して行こう、まずわたしが未だ存在出来ている理由だが……」

「あ、ああ」

「気合いだ」

「はあ!？」

「冗談ではないぞ、事実少しでも気を抜けばすぐにわたしは消滅してしまうだろう」

思わぬ発言に思わず啞然と口を半開きにしてしまう真司、まさかオーディンから気合いなどという言葉を聞くとは思わなかった。

「二つ目、お前の存在についてだ」

「また気合いとか言うんじゃないだろうな？」

「違う、こっちは少し複雑だな」

「ふうん…」

真司のなかで自分のイメージが崩れているのに気付いているのかいないのか、オーディンは変わらぬ調子で話し続ける。

「先に分かっているほしいが、士郎と優衣が使ったのはタイムベントではない」

「え、違うのか？じゃあなんなんだよ？」

そこから先の話はオーディンの言う通り少々難解なため要点をまとめると、

一、神崎士郎が優衣の蘇生を諦めたことで時間の流れが『神崎兄妹が死亡した、ライダーバトルのない時間』に修正された。

二、それにより『ライダーバトルのあった時間』は実質消滅した。

三、ライダーや人々は『修正された時間』に存在する自分と、わかりやすく言えば『融合』し、その世界の人生を歩んでいる。

四、だが『ライダーになった時間の真司』と『本来の時間の真司』だけは、あまりにその存在が掛け離れてしまっていたため『融合』がなされなかった。

「そしてそれにより消滅するはずだったお前の存在自体をわたしが拾った、ということだ」

「…………、とりあえず俺が生きてる理由はよくわからないけどわかった。

それで、俺はどうなるんだよ？」

「そうだ、それが本題だ」

いいながらバックルのデッキから一枚のカードを引き抜く、なにやら渦のようなものの描かれた真司の見覚えのないカード、真司がそれに声をあげるより早くオーデインが言葉を紡いだ。

「城戸 真司、お前はもうこの世界にも留まることはもちろん、再生された世界に行くことも出来ない」

「…その世界にも俺がいるからか？」

「そうだ、だから……」

次にオーデインの発した言葉は、再生された世界のことより、まさかの気合い発言よりも、真司を驚かせるものだった。

「お前は『別の世界』へと飛び、そこで新たな生を歩むといい」

「……………へ？」

驚く真司に目も暮れず呼び出したゴールドバイザーにカードを装填したオーデイン、それを読み込もうとした直前に慌てて腕に飛びついて止めた。

「ま、待て待て待てっ！なんなんだよ急に別世界とか！意味がわからないんだってホントに……！」

「意味も何もそのままだ、安心しろ、向こうへ赴いた時点でお前は向こうでの『役割』を得る
それに従えば問題なく暮らせるだろう」

「いやいや！そんなことよりも！」

「嫌ならば、ここでわたしと共に消えることになるが？」

「うつ……」

その言葉に腕を押さえていた力が緩み、オーディンはそれを振り払いゴールドバイザーを閉じた。

< CROSS VENT >

聞き慣れない電子音声と共に、真司の周りの空間がぐにやりと歪む。

真司の視界もぐるぐると歪み、あまりの気持ち悪さに意識が刈り取られていく。

「ま、待てよ！なんでお前はこんなに俺に……」

言い切る前に、真司の視界は暗転した。

「…何故、か」

当然の反応か、そう思い、オーディンは身体を粒子へと化しながら真司の消えた空間を見つめていた。

無限に続く戦い、何度勝利者になろうとも、決して受け取られない『新しい命』。

虚しさはなかった。

オーデインは神崎士郎の分身で、願っても彼と共有していたから。

だが、何度も何度も続けるうちにオーデインのなかである疑問が生まれた。

『本当にこれが優衣の、二人のためなのか？』

彼女に『新しい命』を差し出す時、彼女はいつも泣いていた。

何故、どうしてと、そうオーデインに訴えかけながら、涙と共に消滅していった。

それを見た士郎も決して涙は見せなかったが、その表情に次のループへの希望とそれ以上の絶望を浮かべていた。

確かにオーデインは士郎の分身だ。

されどただの傀儡ではない、ただの傀儡では最強にならないからだ。その偽りの心には『神崎兄妹への親愛』が宿っている。

その親愛が、優衣の涙をみるたびに、士郎の苦悩を見るたびに、オーデインの心をキリキリと痛めつけた。

だから戦いが終決した時、彼はどこか安心したのだ。

『これである二人は本当の意味で救われる』と。

そして、当の本人に自覚はないだろうが、ライダーたちの心を動かし、そして士郎に優衣の思いを改めて認識させ、戦いを終わらせることのキーとなったのは他ならない真司だった。

だからこそオーデインは一枚しかないタイムベントを変質させた『クロスベント』を彼に使用し、

「……………」ありがとう

その言葉と共に、自身の存在の完全消滅を受け入れたのだった。

さて、ここで終わらせていればやはり大団円で終わっていたのだろう。

だが、一つ疑問が残る。

何故オーディンは別世界の存在を知っていたのか？

それを説明するにはある一つの偶然……、いや、『奇跡』とでも呼ぶべきであろう出会いに答えがあるのだが、それを語るのは随分と先の話になる。

とにかく今言えることは二つ。

真司がこれより赴く世界は決して『平穏』と言えるものではないということ。

そしてオーディンには真司を休ませる気があまりなかったということだ。

～次回予告～

「あの～、すみません、ここって一体どこ……」

「はあ！？なんですかそれは！？本気で言ってるんですかそれは

!?
」

「はい！マジです！ごめんなさい！！」

第一話『新しい用務員さん、ですか？』

プロローグ 死んだら終わりだぞ（後書き）

はい、というわけで始まりました、龍騎&まどか

……ええ、言いたいことはわかりますよ、初っ端から突っ込み所多過ぎますよね

自覚ありのモノを箇条書きにして並べると

- 1・最終回の修正された世界の解釈
- 2・オーデインの性格、及び設定
- 3・『クロスベント』？

といったところでしょうか、いやでも異世界介入モノの初めってこんなもんですよね？そうですよ！？

1番については諸説ある中で自分なりに考えたものと、真司の転移のための理由を混ぜ合わせたモノ

本編ではちゃんと真司も修正されたんだと思います、でなければ最終回の蓮とのやり取りがおかしくなりますし

2番も1番と同じで真司の転移の理由付け

もつと言えばオーデインが真司を助ける理由付けのためです

公式で量産品って言ってるのにな…、まあ戦闘力維持のために常に記憶のバックアップとってたとかそんな感じで

3番は……、うん、ごめんなさい

タイムベントでもよかったかな、とか思ってたんですけど、

もうここまで来たら行けると今まで、と言った感じで

はい、要するに勢いです、マジごめん

ブログから後書きが長くなりましたが、今後はおかしなところとか少なくて、もうちょい削れるように頑張ります
ご意見、感想心よりお待ちしております
では、次回も見てくださいね！

第一話 新しい用務員さん、ですか？

おはようございます！

わたしの名前は『鹿目 まどか』、見滝原中学校の二年生！
今日も友達の『美樹 さやか』ちゃん、『志筑 仁美』ちゃんと
一緒に元気に登校です！

「…どったのまどか？いきなり黙りこくって」

「ウエ！？う、ううん！なんでもないよ！？」

モノローグしているまどかにさやかが訝しげな、仁美が心配そうな視線を向けた。

隣を歩いていた友達がいきなり黙ったら誰だろうと不思議に思うだろう。

それというのも筆者の描写力不足のせいである、本当に申し訳ない。

「……今なにかやけに卑屈な言い訳が聞こえた気がしますわ」

「なに？仁美もそういうキャラ目指してんの？そういうメルヘン系はまどかだけで十分なんだけどなあ」

「わ、わたしは別にメルヘン系なんかじゃないよ！」

中学生らしい楽しい会話を繰り広げながら校舎内で教室へと歩みを進めていく、と、

「ほら！しっかりしてくださいな！」

「す、すみません」

聞き慣れた女性の声と、初めて聞く男性の声が聞こえてきた。何かと思いそちらを見やると、彼女らの担任である『早乙女 和子』がなにやら不機嫌な様子で歩いている。

「ありや、あの様子じゃ早乙女先生またフラれたね」

「ははは…、そうみたいだね」

「ですと後ろの殿方は……」

早乙女の後ろ、おそらく早乙女のものと思われる大量の荷物を持たされた、
教職にしてはラフな格好をした茶髪の青年。

「……とばかり、というやつでしょうか」

「というか、誰だろうねあの人」

「かつー！フラれて即日男侍らせてるなんて早乙女ちゃんもやるねえ！」

「聞こえていますよさやかさん！！」

ニヤニヤとした笑みで言うさやかに早乙女の激怒の声が飛んだ。

「ていうかフラれてません！こっちからフってやったんですよあんな男！！」

「さ、早乙女さん落ちついて！」

「あなたは黙ってそれ運んで下さい！！」

「はいいつ！」

青年は早乙女を嗜めようとしたが、その烈火のような勢いに畏縮してしまい敬礼でもしそうな勢いで逆に謝った。
それを見たさやかはケラケラと声をあげて笑い、
早乙女の眉間のしわが一層深くなったことに気付いたまどかが慌てて話題を変えた。

「と、ところで先生！そっちの人は？」

「まどかさん！今はそんなことよりも……」

「まあそうおっしゃらずに、私も気になりますわ」

「…そうですね、紹介しておきましょうか」

仁美の援護射撃もあって、一つの咳ばらいを挟んで早乙女はいつもの調子に戻った。

まどかは仁美に感謝を視線で送ったが、どうやら当人には援護のもりなどまるでない天然のものだったようで、ただ首を傾げるだけだった。

「えつとですね、こちらの方は新しくうちで用務員をしていただくことになりました…えつと、名前は……なんでしたっけ？」

「ちよつ、なんで忘れてんですか！」

「し、仕方がないでしょう！？あなたの名前覚えにくいんですよ！」

「そんなことはないでしょ！？」

青年の反論には耳を貸さず、早乙女はなにやらぶつくさと自分の世界に入りだしてしまった。

まどかが何度か呼びかけたのだがあまりに反応がなく、ついには本人曰くフツてやったらしい彼氏への恨み言を垂れ流し始めたので、彼女は仕方なく青年へと視線を変えた。

「新しい用務員さん、ですか？」

「え、ああ、多分……」

「は？多分？」

「あ！いや！そ、そうだよ！用務員だよ！？」

どこか歯切れ悪く自身なさ気な青年だったが、さやか of 怪訝そうな様子に気付くと慌て言い直した。
それでも語尾が少し疑問形になっているが。

「俺、城戸真司！よろしく！」

につ、と人懐っこそうな笑顔を浮かべて青年、城戸真司はそう言
った

何故真司がそんなことになっているのか、それを説明するには少し時間を遡らなければならない。

オーデインの『クロスベント』を受けて意識を失ってしまった真
司、

しばらくの間不思議な浮遊感に包まれて、そして、

「・・・さい！・・・き・・・い！」

「・・・編集長・・・黄金の蟹は・・・実在して・・・」

「起きなさー！ーい！ー！」

「はい！？」

耳元で炸裂した絶叫に急速に浮遊感から引き離される。
顔を上げると突然飛び込んできた光に目が眩んだ。

「まったく！初出勤で少し待たされたぐらいで眠ってしまっ
て、あなたホントに社会人ですか！？」

「あ、あれ・・・ええ？」

光に目が慣れないうちにまくし立てられ、ただでさえ深い混乱がよ
りいっそう深くなる。

声の主・・・声色からおそらく女性らしい・・・は状況を把握する
間も与えるつもりはないらしく、変わらず息巻き続ける。

「というか！なんだって校長先生も今朝になって言っんですか！
？今日はただでさえ忙しいっていうのにいい！！！」

「そ、そんなこと俺に言われても……」

って、校長？」

女性の声に少し疑問を感じてようやく慣れてきた目で辺りを見回し、眩しさの原因らしい光の差し込んでいる大きな窓に気付いた。

何気なしにその窓から外を見遣ると、

自分のいる建物に向かって皆一様に同じ服装の子供達が歩いてきているのが見える。

女性の先程の物言い、そして外の子供たち、

この二つから考えると……

「あの～すいません」

「はい？何ですかあ？」

あからさまに不機嫌な女性に少しばかり怯みながらも、真司は半ば確かめるように問いを口にする。

「あの、ここって一体どこ「はあ！？」」

言い切る前に女性の信じられないというふうに上がった声に掻き消された。

「何ですかそれは！？本気で言ってるんですかそれはっ！？」

「はい！マジです！ごめんなさい！！」

まさしく平謝りの真司に女性がかけている眼鏡の奥からそれはそれは冷たい視線を向ける。

真司はその視線に覚えがあった。

モンスターとの戦いやらなにやらで仕事を抜け出して、帰ってきた時に向けられる呆れと疑いの入り混じった視線、

今向けられているのもそれとまるきり同じものだった。

慣れているから平気と言うものでもなく、表情は苦笑いでごまかしているが、

心はその視線に貫かれて涙をちよちよ切らせていた。

「……はあ、確かに最近の子は何かとたるんって言われていますけれど、さすがにこれはマズインじゃありませんか？

うちのクラスの子たちのほうがまだしつかりしてますよ？」

「はい、すいません……」

またしても平謝りの真司、今の女性の言葉には先の問いの答えとも取れるものが含まれていたのだが、

全く気付くことなくひたすらに謝り続ける。

「それで、結局ここどこなんですか……？」

「はあ……、仕方ありませんね」

くどくどと続く女性の説教事におそろおそろながら口を挟むと、
以外とあっさりと中断してくれた。
本人も不毛だと気付いたのかもしれない、真司からしたら悲しい話
だが。

「良いですか？一度しか言いませんからね！？」

人差し指を突き付けながらの女性の台詞に、真司は激しく縦に首
を振る。

すると女性は眼鏡を指でかけ直した。

光の当たる角度が変わり、眼鏡がやけに不敵に光る。

その迫力に思わず真司は音をたてて唾を飲み込み、彼女の言葉を待
った。

「ここは『見滝沢中学校』、あなたはここに新しく勤めることに
なった『用務員さん』です」

さて、こうして女性・・・この後に真司は自己紹介しあって彼女が
『早乙女 和子』ということこの教師であることを知った・・・に状況
を説明してもらったわけだが、この真司とのやり取りでかなりの時
間を食ってしまったらしく、

その帳尻を合わせるため、ということで早乙女の謎の大荷物を運ば
されている最中に冒頭のやり取りというわけだ。

「城戸さんですね、

私は志筑仁美と申します

こちらの早乙女先生が担任をして下さっているクラスの生徒をやらせていただいております
よろしく願いしますね」

「あ、いえいえこちらこそよろしくお願いします」

「え、えっと、わたしは鹿目まどかでありますで……」

「まどか、別に仁美に対抗しなくても大丈夫だから」

「うう…、だって年上の男の人なんてパパぐらいしか話すことないし……」

つまり慣れない相手に緊張してしまっているのだろう、その微笑ましい正直な態度に真司はむしろ好感を覚えた。

「仁美ちゃんにまどかちゃんか、それで君は？」

「わたしは美樹さやか、よろしくね真司」

「さやかちゃんか……ん？」

今明らかにおかしなところがあつた、先の二人の紹介とは違つお

かしなところが、

「っておい！なんでさやかちゃんだけそんなタメ口なんだよ！？
年上だぞ俺！！」

「えー、だつてさつき仁美に流されて敬語使ってたし、なんか馬鹿っぽいから良いかなーって」

「ば、馬鹿あつ！？」

「ぷっ」

「だ、ダメだよさやかちゃん、年上の人に、ふふ、そんなこと言っちゃ、ふふふふふ」

「だつたら笑うなよ！」

年上だと主張しているわりにはさながら同い年ぐらいの少年のような反応なのはさすがだと言ったところか。

結局子供の喧嘩じみた喧騒が続き、その騒ぎにようやく早乙女が自分の世界から帰還して、

「いつまで遊んでるんですか！時間がないって行ってるでしょう
！！」

「ちよつと待ってください早乙女さん！この娘に上下関係つてものを教え込ま、ちよつ！待って、アッー！？」

真司の尻を蹴り飛ばしながら（比喻）退場し、その場はお開きとなった。

「……行っちゃった」

「いやあ、なかなか面白い新人だったねえ」

「でも、なんでいまさら用務員さんなんて雇ったのでしょうか？」

仁美が頬に指をあてながら言う。

「言われて見れば確かにそうだね、なんでだろ」

「うん、今まではそんなのいなくてもやってけてたし」

「……謎ですわね」

三人共が頭を捻ったがまるで分からず、最終的に『どうでもいいや』という考えに至って教室へと歩きだした。

早乙女を送り終えた――持たされていた荷物は必要でもなんでもなかったらしく、持ち帰らされたので本当に送っただけ――真司は、とりあえずは流れに身を任せようと仕事に取り組むことにしたといっても、

「なんで掃除ばっかなんだ……？」

これまでにこなした仕事は庭掃除、トイレ掃除など用務員というよりかは掃除夫といった方が良さそうなラインナップだった。それぞれの場所は目立った汚れもなくかなり楽だったが、料理はともかくどちらかと言えば手先が不器用な真司にはかなりの手間であるようで、

普通なら昼前にでも終わっているはずのことでも昼飯時を過ぎ、生徒らは五限目の授業の後の休み時間になっても終わらないでいる。

「……にしてもなあ」

空腹を少しでもごまかすため、雑巾を持つ手は止めずに周りを見回した。

ちなみに今は教室練の廊下の窓拭き、見ない顔だからか通りかかる生徒らの大半が横目で見ながら通り過ぎる。

それを大して気にすることもなく、一つの教室へ目をやった。

その教室は全面がガラス張りで、その向こうに見える机もやけに近未来的なもの。

真司は自身の記憶にある教室とのあまりに違いに、
ここが自分のいた世界とは別の世界であると再認識させられる。

自分の知らない世界、
当然自分と関わりのある物も人もまるで存在しない世界、

「編集長や玲子さんたち心配してないかなあ
あつ、確か俺じゃない俺が居るんだっけ、

……………くそ、なんか鬱になってきた」

これじゃいけない、そう強く思い直して力を入れて強く窓を拭う。
生きているんだから良いじゃないか、今はとにかくそう思うことに
した。

「聞いた？二年の転校生の話」

「ああ、あの黒髪の不思議な雰囲気の娘ね
そりゃあ、今学校でその話知らない奴なんていないんじゃないかな
？」

そんな真司の手が、耳に飛びこんできた女の子達の声に止まった。
今はもう記者ではないとはいえ、真司の心には生来の強い好奇心、
言いかえれば『ジャーナリスト魂』とでも呼べるものが宿っている。
なので、当然なにやら面白そうな話を聞き逃す理由はない、と彼
女らの会話に耳をそばだてた。

「成績優秀、運動神経抜群、さらに容姿端麗ときてる
わたし達とは大違いね」

「しかもなんか高跳びの県記録塗り替えたって聞いたよ」

「はっ！そりゃすごいわね、どうせわたしなんか……」

「大丈夫！あんなのより姉貴の方が百倍カッコイイって！」

「何を言ってるの相棒？わたし達は所詮闇の世界の住人、かつこよさなんて光を求めたら手痛いしっぺ返しを喰らうわ」

「そ、そうだよな、ごめんなさい姉貴……」

「……でも、一応礼は言っておくわ、ありがとう」

「あ、姉貴！わたし、一生姉貴に着いていくよ！！」

「……ずいぶん変わった子たちだな」

それはともかく、今の話はなかなか興味深かった。

見出しを付けるなら『転校生はスーパーガール！その正体は果たして！？』といったところか。

「出来れば一度話を聞いてみたいな」

呟き、まだ見ぬ転校生のことを色々想像しながら手を動かし始める。

結局のところ、真司はどこの世界でも真司だった。

午後3時過ぎ、生徒たちは授業も終わり放課後の予定などを談笑しながら帰路についていく。

真司もようやく掃除を終わらせ、次にどうするかをとりあえず廊下で偶然会った教頭に尋ねたのだが、

「あれ、お前まだいたの？じゃあもう帰っていいよ」

「……………はい？」

とんでもない言葉を聞かされてしまった。

「いやいやいや、だけどまだ3時ちょっと……………」

「と言われても、正直別にもうお前に頼むような仕事はないんだよねえ」

言いながら教頭は高価そうなスーツを見せびらかすように、大袈裟な素振りで腕を組んだ。

「にしても、なんで校長もこんなやつ雇ったかね

俺に黙って勝手なことしてほしくないんだけどな、まったく」

「こ、こんなやつって……」

「ま、とにかくもう帰ってくれないかな？」

邪魔だからさ、と言わんばかりに手をしっしっ、と振られ、呆然としたまま置いて行かれた真司は、

「や、やり甲斐のない仕事だなあオイ……………」

思わずそう言葉を漏らしてしまったのだった。

「役割だかなんか知らないけど、もう少し良いのなかったのかよ

……
記者とまでは言わないけどさ」

ぶつくさと文句を言いながら校門へと歩いて行く。

今の真司には青い空すらも憎らしげに思えて、つい石ころを蹴飛ばしてしまった。

石ころはあまり地面を跳ねることなく転がっていき、一人立ち尽くしている少女の足元に当たって止まる。

「あ、ゴメンゴメン」

軽く謝りながら少女を見ると、妙な既視感を覚えた。

いや、はつきりと見たことはないと言えるのだが、

黒い長髪と纏ったどこか不思議な雰囲気にかかしの覚えがあるような……

……ああ、あの黒髪の不思議な雰囲気の子ね

「あつ！もしかして噂の転校生！？」

不躰にも指を指してくる真司にも眉一つ動かさない少女、

教頭のショッキングな帰れ発言に気を取られすっかり忘れていたが、彼女の特徴はあの女子生徒らが話していたものと一致していた。

真司はこれは話を聞く良いチャンスだと思い、彼女へと歩み寄った。

「ゴメン、ちょっと今時間……」

「あなたは……」

しかし、真司の言葉は凜とした響きの

「あなたは、何者？」

あまりに意味不明な問いに遮られた。

「え、何者って、一応用務員、だけど……」

質問をするはずがその前に質問され、いきなりのこと若干混乱しながらそう答える。

「……………そう、なら、それでいいわ」

少女は真司の答えに満足したのかも分からない呟きを返し、さっと踵を返して校門から出て行ってしまった。

「あ、ちよつ、話を……………」

名前を聞くことすら出来なかった黒髪の少女は呼びかけても振り返ることはなく、真司はあまりの自分に対する無関心さに追いつける気力も起きなかった。

今はまだ、彼も、彼女も、誰一人として知ることはない
この日から全てが始まったことを

狂った予定調和にゆつくりと、だが確かに突き立てられた龍の牙
かみ砕くか、へし折られるか

『物語』は今始まった

次回予告

「なんだよこれ…、なにやってんだよオイっ!!」

「あなたには関係のないことよ、このことは忘れて、早く消えな
さい」

「そんなこと出来るわけないだろ!!」

第二話『なんか北岡さんみたいだな』

第一話 新しい用務員さん、ですか？（後書き）

プロローグの時点で7人の方にお気に入りにしていただき、さらに感想、評価をくださった方までいらっしやって、かなり調子にノッております

これは真司くん効果でしょうか？

ともあれ皆様本当にありがとうございます

今回は『真司くん転職するの巻』でしたが、

あくまで世界の移動に伴い『役割』として『用務員』という立場を与えられたただなので学校側としては特に与える仕事がありません言うならば『仮面ライダーディケイド』の『アギトの世界』にて土が『配達員』という役割を与えられたにも関わらず、

まったく郵便局が接触してこなかったのと似たような感じです

…あれ？全然違う？

とまあ、こんな感じの意味不明なご都合設定が今後もじゃんじゃん出てきたり、早乙女先生のキャラがぶっ飛んだりしますが、テキストに流しながら読んでやって下さい

ホントお願いします

それでは、次回も見えてね！

第二話　なんか北岡さんみたいだな

色々と疲れ果てて校門をくぐった真司。

しばらくの間はただ早く家に帰りたいとだけ思っただけ思っただけ何も考えずに歩き続けた。

だが、ふくらはぎに引きつる痛みを覚え始めた頃、ある重大な事に思い至った。

それは、

「…あれ？俺、どこに帰ればいいんだ？」

…そんな疑問もつと早く気づけと言いたくなるかも知れないが、いきなり異世界に飛ばされて見知らぬ女性に説教をくらい年下の女の子に舐めた態度を取られ、空腹での慣れない仕事のあげくに何故か邪魔者呼ばわりされた。そして最後には妙に電波な質問をくらいダメだしのようなリアクション。

ペースは乱れっぱなしストレスは溜まりっぱなしで、ぱなしは無しという話にしてもraithたい程なのだ。

まあ仕方ないことかと暖かい目で見てやるのが優しさというものだろう。

そういう訳で真司は考えた。

以前アパートを追い出された時のように仕事場に住み込みで、と初めは思った、だがあの教頭がそれを認めるとは到底思えなかった。冷たくあしらわれるのが目に見えている。

では果たしてどうするかとさらに考え出た答えは、

「まさか、こんな浅倉みたいな生活することになるなんて……」

HOME LESS LIFE!!

真司が座っているのは公園のベンチ、

平日の昼過ぎに成人男性が絶望しきった表情で座り込んでいても、子供たちは無邪気なものでまるで気にかけず遊んでいる。

でも一人女の子があめちゃんと応援の言葉をくれた、ちよつと泣きかけた。

いやはや、世の中まだまだ捨てたものでもない。

わざわざ見知らぬ男にいつか食べようとポケットに入れていたであろう飴をくれるような子がいるなんて……

「……そうだポケット!」

完全に忘れていたが、真司の来ている服は元の世界で着ていたものとは別のものになっていたのだ。

おそらくは与えられた『役割』とやらのものなのだろうが、とすればもしかしたらそこにこの世界での自分を知る手がかりがあるかもしれない。

たとえばジャケットについているポケットの中身とか。

そうと決まればと真司は手始めに右ポケットに手をつ突っ込んで感触も確かめずに中身を取り出した。

出てきたの財布、それも自分のものではない皮製のもの。

「っじゃあビンゴ！」

一目をはばからずにに叫びをあげ、興奮気味に中身を確認める。

「おおっ！？こ、これ全部一万円！？スッゲー！」

入っていたのはぎっしりと詰まった諭吉氏がちょうど10人、それ以外には身分を示すものどころか小銭もレシートも入っていない。

だというのに真司は当初の目的も忘れて喜びほうけていた。そしてウキウキ気分のまま、左のポケットの中身をひんづかみ、

「……………え？」

自分を木っ端みじんにしかねない地雷を掴みとったことを理解し、顔面からあつという間に色が消えた

掴んだものは薄い長方形で固い感触をしている。

その中央に付いているレリーフに触れた瞬間、

キーンという耳鳴りにも似た幻聴が聞こえた気がした。

間違いない、『アレ』だ。

「なんで、これがここに……ん？」

強い疑問と困惑に包まれるなか、

ふと辺りを見回すと、公園にいる人間が一人の例外もなく真司に刺すような視線を向けていた。

あれだけ一人で騒いでいれば、不審に思われて当然である。

視線に耐え切れなくなった真司は公園から逃げるように、いや、実際逃げ出した。

「この世界に来てからろくな目にあってないな……」

今まで以上にトボトボという擬音が似合う、足を引きずりながらにして当てもなく町を徘徊する。

コンディションは下の下以下、もはや何か考えることすら億劫な頭だったが、

そこに嗅覚からの刺激が入った。

一体どこからと鼻を鳴らすと、疲労のあまり今まで気づかなかったが真司の目の前には大きなショッピングモール、臭いはそこから流れてくるようだ。

気づいた途端、龍の咆哮のような爆音が真司の腹から響いた。

「と、とにかくなんか食つところ」

何事かと辺りを見回す通行人にばれないように腹を押さえ身を小

さくしながら、ショッピングモールの門をくぐっていった。

「いやあ久しぶりに腹一杯食ったな！」

思いつく限りの贅沢を詰め込み大きくなった腹をさすりながら、真司は某有名牛丼チェーン店より出てきた。

さっきまでとは打って変わって表情からは幸せが溢れでている。

思いつく限りの贅沢が

『牛丼特盛卵のせ（みそ汁付き）』というのはいささかおかしいかもしれないが、

普段金を持たない者がいきなり大金を得ても大した使い道は思い付かないものだ。

「腹は膨れたけど、これからどうするかな……ん？」

満腹による一種のトリップ状態から脱して、改めて現状をどうするか考えようとした真司の視界の端に見覚えのある『桃色』の人影が走った。

とっさに向き直るも、人影は奥の通路へと入りこんでしまった。

「今のって、確かまだかちゃん？」

今朝会ったばかりの女の子の名前を思いだし、首を傾げる。

初めに見た案内板では確か向こうは改装中で何もなかったはずだ。

当然部外者は立入禁止、

そんなところに女子中学生が何の用があるというのか。

やけに急いでいる様子だったのも気になる。

「何か事件の臭いがするな……、よし！」

前述もしたが、真司は『余計なことにも首を突っ込まなきゃ気が済まない性格』だと自分も自覚している程だ。

故に迷うことなく足を動かす、

その行く先でようやく得た平穏が崩れさることも知らずに。

ただ一つだけ言うならば、もしその運命を知っていたとして、いや、知っていたならより強い意思を持って、真司は必ずその道を選んだということだ。

彼の信じる『仮面ライダー』として。

薄暗く、少し埃深い空間を小走りで進んでいく。

「あつれ？いないな……」

時折ある小さな通路も除きこみながらまどかを探すが、未だあの特徴的な桃色のツインテールを見つけることが出来ずにいた。

まさか見間違いだったのかと疑い始めた頃、
ガチャン、という不穏な金属音が真司の耳を貫いた。

「っ！何だ今の！？」

小走りだった脚をさらに素早く動かし、音の聞こえた方角へと向かう。

「まどかちゃんっ！！」

たどり着いたのは両開きの大きな扉、すでに開け放たれていたその空間にまどかの名前を叫びながら躊躇することなく飛び込む。
そこにいたのは、

「え！？し、真司さん！？」

ひどく狼狽した様子の探し人、まどか、

「……………」

淡い紫のセーラー服のような衣装を纏い、右腕にはどこか物騒な見た目の盾を装着した、名も知らない転校生、
そして、

「ふう…、ふう……」

へたりこんでいるまどかの腕に息も絶え絶えにして抱かれた、猫のような姿をして、その耳にさらに小さな手を擦りこんだような、見たこともない謎の生物。

「何だよこれ…、何してんだよおい!!」

一瞬訳が分からなかったが、まどかの怯えた表情と白い生き物が血濡れである事に気づくと、

相手が女の子であることも忘れて黒髪の少女へと声を荒げた。

しかし、少女はそれを受けても少しも怯むことなく、むしろ真司に対して威圧的に睨み返ししながら淡々と呟く。

「あなたには関係ないわ、このことは忘れて、早く消えなさい」

「そんなこと出来るわけないだろ!!」

得たいのしれない何かを秘めた瞳に走ってしまった怖じけが見えないように再度吠えながら、まどかを庇うように前に出た。

流れる沈黙、

誰も動かない中、垂れ下がった鎖のみが右へ、左へと揺れ、軋んだ音をあげる。

「……そう、だったら」

「っ！」

少女が動き、真司が身構える。

それと同時にだつた。

激しい噴射音、瞬く間に辺りが白い煙で覆い尽くされた。

「まどか！真司！こっち！！」

何も見えない視界のどこから聞き覚えのある声が届いたと思うと、

「真司さん！」

「え、うわっ！」

自分の手を小さな手に掴まれ、引っ張られた。

その手に追従する形で走り煙を抜けると、

消化器を構えていたさやかがそれを投げ捨て、自分たちに並んで一気に駆け抜けた。

すぐに追いかけてくるかと思われた少女は何やら思い止まったように動きを止める。

少女の舌打ちが聞こえた気がして、真司はさらに足を急がせた。

「ああもう！転校生はコスプレ通り魔！用務員はストーカー！！
なんなのうちの学校どうなってんのよ頭おかしいんじゃないの！？」

「ちよつと待て！なんでさりげなく俺がストーカーになってんだ
よ！？」

「じゃあなんでまどかといっしょに居んのよ！絶対に付けてたんでしょ！？」

わたしの勘に間違いはない！」

「勘かよ！とにかく違うから！！」

「そ、それよりっ！この子どうしたら！」

まどかの叫びに二人が彼女が腕に抱く生き物に目を向ける目をやる。

真司の知る異形、『ミラーモンスター』とは随分と違い可愛い異形であるその生き物は尚も苦しそうに表情を歪ませている。

「ってかなにそれぬいぐるみとかじゃないのよね？生き物！？」

「この子がわたしを呼んだの！助けて、助けてって！！」

きゅっ、と、守るように力強く抱きしめる。

「助けって、この動物が？」

「ホントなんです！だから、なんとかしてあげなきゃ！」

明らかに異常な状況、大抵の者は気味悪がり、恐れをなして逃げ出すだろう。

だと言うのに、まどかは迷いなくその生き物を助け、守ろうとしている。

優しい子だ、こんな状況ながら真司はそう思い、つい頬を緩ませた。

「おいこらストーカー！真司！わたしのまどかにいやらしい視線を向けるんじゃない！！」

「え、真司さん、そんな……」

「だからストーカーじゃないって！っていうか、俺達今どこ走って……っ！！」

不意に真司の足が止まった。

それに釣られてまどかとさやかも立ち止まる。

いきなりのことに当然二人が声をかけてくるが、真司は何も返さない。

真司はひどく奇妙な感覚に囚われていた。

何も変わっていないはずなのに、大きく何かがズレてしまったような。

そして、すぐに思い出した、

これは、この感じは……

――初めて『ミラーワールド』に落ちた時と、同じ感覚だ。

扉が開いたようにガラリと世界が変わる。

通路が突如としてひらけ、薄暗い闇は夜空へと変わり、巨大な建物が立ち並ぶ。

ただそこにいるだけで皮膚の内側を蛇がはいずり回る感覚が走り、精神が犯されていく。

「な、何よこれ！非常口は！？」

「変だよこれ、どんどん景色が変わってく………！」

「……大丈夫、二人とも絶対に俺から離れないで」

飛び交う不気味な蝶と毒々しい薔薇の香りが恐怖を煽る。

それでも真司は何とか冷静になろうと努めた。

彼一人だったなら間違いなく狼狽し、混乱したことだろう。

だが、今彼は二人の女の子を連れているのだ。

今混乱すればそれは間違いなく彼女らにも伝染してしまう。

少しでもまどか達を安心させようと、真司は何とか理性を踏ん張らせた。

やがて景色の移り変わりが止まり、真司らは殺風景な広場に立っていた。

「なんなのよさつきから……、訳分かんないっての」

「……二人とも、鏡かなんか持ってたない？」

「は？わたしは持ってたないけど」

「わ、わたし持ってます！」

「本当！？悪いけどちょっと貸してくれる？」

「どうぞ、でもこれで何を？」

「まあ、ちよつとね」

まどかがポケットから取り出した手鏡を受け取り、真司は内心でガツポーズしていた。

こんな状況だからどんな異常が起こるか分からない。

だから先にポケットに入っている『アレ』が使える条件を満たして起きたかった。

そしてそれを満たした今、並大抵の異常は恐るるに足りえない。

だが、その希望を讃えた瞳に飛び込んできたのは、

「何、だよ……アレは！？」

その希望を絶望へと塗り潰す、狂った『異常』

これまで多くのモンスターたちと戦ってきた真司でも、その異形、いや、もはや完全なバケモノと言っても差し支えのない何か達に果てしない恐怖を覚えた。

まどかとさやかもその存在に気づいたようで、互いに抱き合い喉から引き攣った音を漏らす。

バケモノ、胴体として蝶を無理矢理接続して、場違いにコミカルなヒゲと虫のように細い腕を与えられた綿ぼこり。

それは声なのかも分からない不快な音を撒き散らしながら、耳障りに大きな足音をあげて真司らを取り囲んだ。

「そ、そうだ、夢なんだ、きつと悪い夢なんだよねこれ！そうだよねまどかぁ！？」

「…大丈夫、下がってて！！」

錯乱するさやかと、声も出せずにただ胸の生き物を抱きしめるまどかに、真司が優しく声をかける。

手鏡を地面へと軽く放り、唯一この絶望をひっくり返せる『アレ』へと手を伸ばし、

その手が届く前に、地面から湧き出た茨が鏡を貫き、砕いた。

「なっ・・・！？」

砕け、舞い散る鏡のカケラが真司や、まどか達の表情を映し返し、表情が映し出すのは、どす黒い絶望。まどか達がそれを理解する間もなく、茨は真司の全身へと絡み付き、容赦なく締め上げた。

「あ……がつ……！」

「真司……！」

化け物たちの包囲網が徐々に狭まり、どこからか現れたハサミがひとりでに刃を噛み鳴らす。

「……に……げ……！」

茨の締め付けが肺から空気を絞りだし、酸欠で意識が揺らぎ始める。

それでも真司はなんとかまどか達を助けようと、で手足を足掻かすよう必死で試みる。

しかし、茨の拘束にそれを動かすことは叶わない。

せめて自分を置いてでも逃げてほしいかったが、

いきなりの平穏から恐怖への転換が、まどか達にただ震えることしか許さない。

足掻くことすら出来ない絶望が、力ない少女を蹂躪する、

「……………っ!!」

その理不尽が、何も出来ない自分が、狂おしい程に許せずに溢れ出した真司の声のない絶叫と、

突如として真司達の周囲を囲むように降ってきた鎖が鳴らす暴力的な金属音とが重なり、

その爆音にバケモノ達が動きを止めた。

そして、爆音の反響がなくなるよりも早く、

突如として鎖から金色の光が強くほとばしり、真司の身を縛り付けていた茨を焼き払った。

「ごほ!げほっ!!な、なんだあ!?!」

「え…、嘘……………」

「な、何!?何が起こったわけ!?!」

真司もまどかもさやかも、全員が驚きの声を上げた。

あれ程の大群で真司たちを取り囲んでいた怪物が大きくその数を減らし、残ったものも吹っ飛ばされてひっくり返っていたのだ。

何が起きた?状況を微塵たりとも理解できない三人に、

「あなたたち、危なかったわね」

不穏だった空気を破る、暖かい声が聞こえた。

三人一斉にそちらに振り向くと、そこにはまどか達と同じ制服を着た、金髪に縦ロールの少女。

手にはランプのように淡い黄色の光を放つ宝石を持っている。

「よかったわ間に合って、あら？」

少女はまどかに、正確に言えば腕の中の生き物に気付くと、顔色を変えた。

「キュウベえ！」

「え？、この子のこと知ってるんですか？」

「ええ、わたしの大切な友達なの」

少女がまどかに駆け寄り、キュウベえと呼んだ生き物の頭をそつと撫でる。

すると生き物、キュウベえの目がうつすらと開いた。

「う…マミ……？」

「しゃ、しゃべったあつ！？」

不思議な生き物だと思っていたが、さすがにしゃべるなどとは予想もつかなかった。

素っ頓狂な声をあげる真司に関しては触れることなく、少女、マミはキユウベえへと優しく声をかける。

「そうよ、ああもうこんなに怪我して、どうしてすぐにわたしを呼ばなかったのよ」

「ごめん…迷惑かけたく、なかったから……」

マミは呆れた笑顔でもう一撫ですると、三人へと向き直った。

「あなたが助けてくれたのね、ホントにありがとう」

「えっと、わたし、この子に呼ばれて、それで……」

「『呼ばれて』？、…ふうん、なるほどね」

「え？」

まどかの言葉にマミは何か合点がいったような顔をする。真司は気になったが、彼が何か聞く前にマミが話を変えた。

「その制服、三滝原中のよね、二年生？」

「そう、ですけど、あなたは？」

「そうね、自己紹介しなくっちゃねでも……」

マミの視線が横へとズレる、まどか達もその視線を追いかけて、息を飲んだ。

横転していた化け物達が立ち上がり、更にその後ろにも無数の化け物がいたからだ。

うごめく恐怖がマミの登場により和らいだ空気を掻き乱す。

まどか達を庇い前に出る真司、だがマミはその更に一歩前へと踏み出した。

真司が慌てて呼び止めようとするが、言葉を直前で引つ込める。

マミの横顔が少しだが笑っているように見えたのだ。

それは先程の暖かい笑みではない。

余裕と自信に溢れた、まさしく歴戦の『戦士』の笑み。

「悪いんだけど、自己紹介の前に……」

マミは持っていた黄色の宝石を突如として高く放りあげた。

真司達、そして化け物の視線までもが宝石へと集まる。

それが一番高いところへ行った時に小さくステップを踏み、

ゆっくりと落ちてきた宝石を両手を前へと突き出しキャッチする。

同時に――

「軽く一仕事片付けちゃって、いいかしら？」

- 宝石から激しい黄色い光が溢れ出した。

光はマミを中心に集まっていき、彼女の格好を『変身』させていく。制服は光と同じ黄色を基調としたドレスに変わり、頭にはあの宝石と白い羽飾りを飾り付けた黒のベレー帽。

その変化は、真司の知る『変身』とはあまりに違っていたが、確かにまさしく『変身』だった。

変身時に巻き起こったエネルギーが化け物達を舞い上がらせ、一つ場所へと密集させる。

「はっ！」

マミは高く跳躍し、それらを見渡せる位置まで達するとふわりと腕をあげた。

突然だった。

何もなかった筈の空間を、百にも昇るかという大量の巨大なマスクェット銃が埋めつくす。

全ての銃口が怪物達を捉え、

「ティロ・ステルミニオー！」

その叫びと共に勢いよく振り下ろされた腕に応えるがごとく、撃鉄が一斉にたたき付けられ、射撃音が勇ましく響く。

放たれた光は一つの例外なく怪物を撃ち抜き、爆散さしめた。

「……なんか、北岡さんみたいだな」

真司の口が小さく漏れた言葉は、花火のように広がっていく爆音に掻き消されて誰にも聞こえることはなかった。

爆発が収まると、空間そのものが溶けるように消えていく、やがて薔薇の香りが収まった頃には周りの景色は完全に元の薄暗いものへと戻っていた。

あの奇怪な空間の後だとこの薄暗さもやけに落ち着く。そう安心したのもつかの間、カッン、と地面を踏み付ける音が響いた。

恐る恐る、ゆっくりとそちらに目をやると、黒い髪を掻きあげながら見下ろしてくる転校生の姿。

その表情は先に対峙した時と変わらない無表情。

「魔女は逃げたわ、仕留めたいのならすぐに追いかきなさいな
今回はあなたに譲ってあげる」

「わたしが用のあるのは……」

マミを睨みつけていた冷たい視線を横へとずらす、その先にはまどかとキュウベえ。

視線を遮るようにさやかが立ちはだかるが、それでも彼女の視線は揺るがない。

「……飲み込みが悪いのね」

瞬間、穏やかにもどった筈の空気が再び変わった。

先程消えた淀んだモノとも違う張り詰めた空気。

マミの発した殺気は、一瞬でこの空間を戦場へと変えてみせた。守られている側であるまどかやさやかでさえも、冷たいナイフを押し当てられたように感じたのだ。それを直に受けている転校生にはどう感じられているのかなどと、想像するのも恐ろしい。

「見逃してあげる、と言っているのだけれど」

殺気に気圧されたか、ここでマミとやり合うのは得策でないと思ったのか、転校生が一步後ずさる。マミは満足げに笑った。

「お互い、余計なトラブルとは今後も無縁でいたいものよね？」

「……………」

マミの牽制を最後まで聞くことなく、転校生は背を向けてその場

から姿を消した。
マミが殺気を無くし、今度こそ戻った穏やかさにまどかとさやかが
安堵の息を吐く。

（あれ……………？）

だが真司は、

一瞬、彼女が後ろへと向いた一瞬に、何か、違和感を感じた。
彼女に敵意だけを向けていたマミや、
慣れない緊張感に身を強張らせていた二人は気づかなかっただろう。
マミほどの敵意の目では見ず、
二人より戦場の緊張感に慣れていた真司だから気づけた。
彼女に一瞬だけ見えた。

（何かに…………耐えるような…………）

そんな表情に。

全ての脅威が去って、まどかはまずキュウベえをどうしたらよい
か、とマミに尋ねた。
するとマミは彼女に微笑んでキュウベえにすつ、と手をかざした。
ふんわりとした光がキュウベえを包み、瞬く間に彼（彼女？）の体

中の傷が消え去った。

「すごい……」

「ん、ううん、助かったよママ」

「お礼ならこの三人に言って、わたしは通りがかったただだから」

さっきまでの容態が嘘のようにキュウベえが元気よく地面へと飛び降りる。

そしてまどかたちへ赤い瞳を向けた。

「ありがとう、鹿目まどか！美樹さやか！」

「え？なんでわたしたちの名前を……」

「あれ！？俺は！？」

自分の名前がなかったことに真司が不平の声をあげる。

さやかからの『空気読めよ』という視線が突き刺さるが、そんなものは気にしない。

「……僕からすれば、何故君に僕が見えるのかと逆に聞きたいところなんだけど」

「は？」

「それはともかく二人とも！実は君たちにお願いがあって呼んでたんだ！」

「お願い？」

話を進めること優先で自分は完全無視ですかそうですか、と真司はしぶしぶ引き下がることにした。
しかし、キュウベエの言う『お願い』により心のモヤモヤは完全にすっ飛んでしまうことになる。

「うん、僕と契約して……」

……『魔法少女』になってほしいんだ！

〈次回予告〉

「なあキュウベエ、先に聞くけど、お前もただ願いを叶えるだけってわけじゃないんだろ？」

「確かに君の言う通り、願いを叶えた者には対価とも言える『指

命』が与えられる

僕としては十分払うに値する対価だと思っけどね」

第三話 『そんなの絶対おかしいだろ』

第二話　なんか北岡さんみたいだな（後書き）

今回で初変身と予想していた方、ごめんなさい

皆様何となく分かっていたと思いますが、大筋としてはまどか マギカ本編をなぞっております

そのため次の戦闘は本編の第二話後半部分にあたる『薔薇園の魔女』戦、

今のペースから考えておそらく三、四話ぐらい後の話になりそうです
仮面ライダーが主役の小説なのに……どうしてこうなった

今回マミさんが叫んでた『ティロ・ステルミニオ』、
ティロ・ファイナーレが『最終砲撃』という意味らしいので、それに倣えば『殲滅砲撃』という意味になります

エキサイト翻訳で調べただけなのでイマイチ断言は出来ませんがど

……

更新ペースがどうにも安定しませんが、週に一回は更新出来るよう頑張ります

では、次回も見てね！

第三話 そんなの絶対おかしいだろ

「うーん、よく寝たあゝ」

喫茶店『花鶏』、

その二階にて、眩しい日差しを身に浴びながらベッドから起き上がって真司は悠々と伸びをする。

やはりこの瞬間ほど気持ちのいいものはない、そう幸せ気分を噛み締めていると、横から無粋な声が聞こえてきた。

「やれやれ、ただでさえ間抜けな面構えだつてのに、さらにひどいことになってるぞ」

「ん！何だよ蓮、せつかくの気持ちのいい朝だつてのにさ」

隣のベッドに腰掛けて馬鹿にした視線をぶつけてくる蓮に悪態をつく。

それでも蓮は呆れ顔。

「気持ちのいい朝も結構だが、今何時か分かってるのか？」

「はあ？そりやお前……」

返しながら時計を見遣り…、顔色が無くなった。
時刻はただいま9時直前、どうあがいても遅刻だ。

「ちょ！ええ！？嘘だろおっ！？」

「ふっ、やっぱり気づいてなかったか」

果てしなく愉快だと笑う蓮を精一杯の威圧を込めて睨みつける。

「やっぱりじゃないって！なんで起こしてくれなかったんだよ！？」

「……なんでだと思っ？」

突然、蓮が立ち上がった。

その雰囲気は先程までと明らかに違い、不穏なものを感じさせる。

「蓮？」

蓮がゆらりと揺れたように見えて、

「……え？」

次の瞬間には、そこには誰もいなかった。

「れ、蓮？なん…だよ、からかつてるのか？」

一歩、二歩と、蓮の居たはずの場所へと歩みよる。

地を踏んでいる筈のその足には、虚空に放り出されているような感覚しか伝わらない。

ふと、窓から強い光が見えた気がして覗き込んだ。

見えたのは蓮、それだけでなく玲子や大久保、北岡に浅倉の姿まで。彼らは一様に背を向け、決して振り返ることはない。

「待つてくれ……、置いてかないでくれよ！」

窓へ、光へと手を伸ばすが、その手が届くことも、窓が開くこともありはしない。

「待つてくれ！編集長！玲子さん！浅倉！北岡さん！れえええんっ
！！」

「はっ！？」

強く目を見開いた。

激しい息の乱れもそのままに飛び起きる。

いつもと違うベッドの感覚に一瞬の戸惑いを覚えるが、すぐに自分の現状を思い出し、同時に先程の悪夢がまさしくそれだったことに気づいて安堵の息を漏らした。

「つたく、なんであんな夢見たんだろ……、よつと」

一人で寝るには少し大きいダブルベッドを降りる。

途中に見たドレッサーに、ここは夫婦部屋か、という来た時と同じ感想を抱きながら部屋を出た。

なにやら漂ってくる美味しそうな臭いに誘われるようにしてリビングへと赴く。

「あつ、おはようございます、城戸さん」

「おはよう、マミちゃん」

制服にエプロンというなかなかニーズの多そうな格好のマミが挨拶した。

真司はあくまで一般良識の持ち主、ロリコンでもないのとわりわけ大したリアクションを見せず普通に挨拶を返す。

いくらマミが立派な胸の持ち主だとしても結局は中学生、真司の琴線には触れなかったのだろう

正直、どうかしてると思う。

「ちょうど朝食が出来たところですよ
もしかしてそれで起きてきたんですか？」

「いや違うつて！」

「ふふ、冗談です」

マミは楽しげに笑った。

真司は彼女に促されるままに席に着く。

マミがテーブルに並べた料理に真司は目を輝かせた。

目玉焼きにカリカリのベーコン、シーザーサラダにコーンスープそしてご飯。

スープはさすがにインスタントだったが、ギリギリ生活だった真司にとって久しぶりの三品以上の朝食だ。

うれしくない筈がない。

「目玉焼き固めに焼いちゃいましたけど、大丈夫でした？」

「うん、大丈夫大丈夫

俺そついうの気にしないから」

「そうですか、ならよかった」

言いながらマミも真司の向かいの席に着く。
そしてどちらともなく手を合わせ、

「いただきます」

さて、今の状況にディスプレイの前にいる全国十万人越えのマミさんファンは『おいちよつと待てや』と思ったことである。

今から回想に入るがその説明に至るには少しばかり時間がかかるので、とりあえず答えだけ先に言っておくでしょう。

この状況には様々な呼び名がある。

『下宿』、『居候』、『同居』 e t c . . .

つまりるところ要するに、

『男女が一つ屋根の下状態』というわけだ。

真司、頼むからそこ代われ。

キュウベえの『お願い』にそれを受けたまどかとさやかはもちろん、かやの外だった真司さえもあまりの意味不明さに何一つとして理解できなかった。

キュウベえはその場で詳しい説明を始めようとしたが、さすがにここでは落ち着かないだろうというマミの提案によりマミの自宅に招かれることになった。

道すがらにそれぞれの自己紹介を終え、やってきたマンションの一

室。

マミは謙遜していたがかなり立派なもので、まどかたちは感嘆の声を上げていた。

真司にいたっては自分が前に借りていたアパートの十倍は良い物件であることに地味にプライドを傷つけていた。

後に一人暮らしであることを聞いて完全に砕け散った。

「ごめんなさいね、なにせ急だったから大したおもてなしも出来ないけど」

「いえ！この紅茶スツゴく美味しいです！」

「ケーキもメチャ美味っすよ！」

「そう？ならよかった」

用意されたケーキや紅茶を美味しそうに食べる三人を見てマミは嬉しそうに笑う。

ケーキに夢中になっていた真司がキュウベえを見て、ふと尋ねた。

「そっぴゃこんな珍妙な生物が歩いてたのに、誰一人としてお前のこと見なかったよな？なんでなんだ？」

「珍妙って、わたしの友達に随分な物言いですね？」

「あっ、ゴメン……」

「後真司、口元にクリームついてる」

「え、マジで？」

慌てて指で拭って舐めとる。

少女たちの中にいてその誰よりも子供っぽい仕草だが、キュウベエは大して呆れることもせず真司の問いに答えた。

「簡単なことさ、僕の姿は僕が選んだ者か、魔法少女としての才能を持った者しか知覚できないようになってるんだ」

「へえーすごいね、あれ？じゃあ真司さんは……」

「少なくとも僕自身が見えるようにしているのは元々契約しているマミ、後はまどかとさやかだけだよ」

「って、ことは……」

全員がゆっくりと真司へと向く、その目は完全に『引いて』いた。

「……変態じゃん」

「なんでそうなるんだよ!？」

「だって魔法『少女』の才能って……、あんた男なのに……」

「あの、真司さんって、オカマさんだったんですか？」

「違うから！全然違うから！」

まどかの突拍子の無さすぎる疑問を全力で否定する。
あまりの必死さに見兼ねたマミがフォローをだした。

「まあ、今までいなかっただけで、才能を持った男性もいるのかもしれないわね」

「そうだね、他に特別な理由もないようだし」

キユウベえの言葉に真司は一瞬ドキリとした。

『特別』なことに思い当たることがあった。

そもそも自分はことは別の世界の住人なのだから、特別であつて当然なのだ。

わざわざ隠すことでもないと思つたが、同時に簡単に信じてもらえることでもないと思つた。

マミとまどかはせいぜい苦笑いで済ましてくれるかもしれないが、問題はさやかだ。

彼女はわりと本気で真司のことをまどかのストーカーであると思つているらしい。

冗談かと思えたが、

ここに着くまでの間中ずっと真司とまどかの間に自分の体を挟んで警戒している様子だったことから本気だということが伺えた。

そんなさやかに『自分は異世界人だ』なんていえば即刻異常者に認定され、最悪通報される。

「？、真司さんどうかしたんですか？」

「い、いや！なんでもないよ！？」

ひとりでに焦りだした真司に一同が首を傾げる。
そんな中マミは一口紅茶を飲むと、さて、と話を変えた。

「そろそろ、本題に入りましょうか」

その言葉にまどかが神妙に頷く。

「…『魔法少女』と『契約』、でしたよね」

「そう、キュウベえに選ばれた鹿目さんたちにも、才能のある城戸さんにも関係のある大切な話だから、しっかりと聞いてね」

「おっけー、大体わかった」

「さやかちゃん、真面目に聞きなっ……」

どこかに通りすぎりそうなことを言うさやかをまどかが注意する。

マミはそんな二人を楽しげに眺めながら、机の上に何かを置いた。

「わぁ、綺麗……」

「これって、あの時持ってた宝石？」

「ええ、『ソウルジエム』っていうんですよ」

真司の言葉に頷きを返す。

「キュウベえと契約した女の子が与えられる宝石で、魔法少女の証であり、魔力の源でもあるんです」

「それで、その『契約』って？」

「そこからは僕が説明するよ！」

さやかが尋ねると、ピヨンとキュウベえが机に飛び乗った。うまいことにケーキや紅茶の間のスペースに乗っていたが、マミに行儀が悪いと叱られるとすぐにまどか達の前へと飛び降りた。

「僕は君たちの願い事をなんでも一つだけ叶えてあげられるんだ」

「え！？」

「マジ!？」

「…!」

その言葉を聞いた三人が驚き、目を見開く。

さやかがキュウベえの体を掴んで持ち上げ、激しい勢いで問い詰めた。

「ね、願い事っていうと!？」

「なんだって構わない、どんな奇跡だっておこしてあげられるよだから、ちよつと、あんまり、揺らさないで、もらえる、かい？」

「それはマジで言ってるのよね!？人をおちよくつてるとぶっ飛ばすわよ!？」

「さやかちゃん落ち着いて!」

まどかの必死の呼びかけに、さやはようやくキュウベえを下ろした。

しかし落ち着いたというわけではないようで、

次は指折り数えながらぶつぶつと何か言っている様は少々無気味だ。

「何でも…、金銀財宝とか、不老不死とかあ!満漢全席とかあ!！」

「さ、最後のはちよつと……」

「っていうか真司！あんた何さつきから黙ってんのよ！何でも叶うのよ何でも！もうちよつと盛り上がりなさいって！」

若干テンションのおかしくなっているさやかが真司の背中を強めに叩く。

しかし真司は反応を見せない。

さすがにおかしいと思っていると、突然真司が顔を上げた。

その表情はまどか達に出会ってから一度も見せたことのない真剣なもので、思わず息を飲んだ。

「…真司、さん？」

「なあキュウベえ、先に聞くけど、お前もただ願いを叶えるだけってわけじゃないんだろ？」

真司がキュウベえに問う、それは質問という形をとっているものの、確信を持った響きだった。

「何？まさかそれにビビって黙ってた訳？やれやれ、真司くんは口マンってのを分かってませんかあ」

さやかがふざけた口調で話しかけるが、真司は突っ込むこともせず、公園で確認した『アレ』を服の上から強く握りしめた。

角が肌に突き刺さり、冷たい痛みが頭を走る。

その痛みが真司にかつての戦いの『やり口』を強く思い出させた。

「確かに君の言う通り、願いを叶えた者には対価とも言える『指命』
が与えられる

僕としては十分払うに値する対価だと思うけどね」

「指命？」

「あなたたちも見たでしょう、あの怪物を」

まどかの問いにマミが少し目を細めながら言う。

襲われた時の恐怖を思い出したのかまどかは少し身震いした。

「あの怪物は『魔女』、僕と契約した女の子は魔女と戦う指命が与えられるんだ」

「え……」

「…やっぱりな」

まどかたちが衝撃を受けているなか、真司はさらに表情を険しくしてキュウベえを睨みつける。

「そうやって願い事を餌にして、戦いを強要してんのかよ」

「『餌にして』だなんて人聞きが悪いね

僕はただ魔女を倒してほしただけさ

でもただでそれをしてもらおうなんてのは虫がいいだろうから、代わりに願いを叶えてあげてるんだよ」

「……もつと他に魔女を倒す方法とかないのか？」

「難しいね、魔法少女の力がもつとも強いのはその名の通り『少女達だ

君のようなイレギュラーは稀だろうし、やはりまどか達ぐらい歳の娘に頼るしかないんだ」

「だからって、こんな女の子たちにあんな化け物と戦えなんて……」

強く目を閉じる。

そうしてまぶたの裏に移るのは数々の最後。

目の前で散っていった、手の届かなかった数々の命。

それをよりしっかりと見つめるように目を見開き、

「そんなの絶対！絶対におかしいだろっ！！」

真司の魂からの叫びが、部屋に木霊した。

あまりの迫力と必死さにしばらくの間水を打ったような静けさが漂う。

その沈黙をさやか苦笑いが破った。

「そ、そこまで大きな声出さなくても大丈夫だって真司、それにマ
ミさんも今までなんとかなってる見たいだし、案外余裕なのかも…」

「……だぞ」

「へ？」

「死ぬかも、しれないんだぞ」

「…っ！」

その言葉は真司から出たものとは思えないほどに、残酷な冷たさを
持っていた。

先程までとのギャップに全員が真司の並々ならぬ真剣さを感じ取り、
部屋が静まり返る。

「…確かに、生半可な覚悟ならやめておくに越したことはないわね」

「うつ、さ、さっきのは場を和ますための冗談っていうか…」

さやかが目をさ迷わせる、大丈夫、分かってるからとまどかが彼女
を慰めた。

「でもね城戸さん、現役の魔法少女としてこれだけは言わせて」

「…なに？」

マミはソウルジェムを軽く撫でるようにして一拍おいてから、真司へと向き直る

「わたし達魔法少女は、ごく一部の例外を除いて、一つの『命を賭けるに値する願い』を求める事を決めた存在なの
その生き方を否定することは誰にも出来ないと思うわ
……無論、貴方にもね」

「……………ああ、分かってるよ」

分かってるんだ、そう心の中で繰り返す。
そんなことは苦しいほどに分かっていた。
その願いを叶えるためなら、修羅道へと堕ちることも厭わない。
そんな男を、真司は隣で見ていたのだから。
そんな者たちの戦いを、真司は結局止められなかったのだから。
故に真司は『願い』の重さというものを誰よりも分かっていた。
だが、それでも彼は――

「……………」

「え、ええっと、願いも思い付かないし、わたしはとりあえず保留かな？」

「わ、わたしも」

「そっか、それは残念だ」

さやかとまどかの言葉に、キュウベえが大したことなさそうに返す。
あんな話の後だ、仕方のないことだろうと判断したのかもしれない。

「そうね、こんな大事な事を急に決めろなんて無理なことよね
……………そうだ、こうしましょう」

良いことを思い付いた、と言うようにマミが手を叩く、沈んでいた
空気を気味良く震わせる渴いた音に全員がそちらを向いた。

「あなたたち、しばらくの間わたしの魔女退治を見学してみない？」

「見学……………ですか？」

「言うならば『魔法少女体験ツアー』ね、
それを見て、魔法少女になるか、自分の戦いに身を投げてまで叶え
たい願いはなにか、それを良く考えればいいわ
城戸さんも良い考えだと思いませんか？」

「うーん、そうだね、良いと思うよ」

「じゃあ決まりですね！」

真司が頷くと、マミは嬉しそうに笑う。

言っておくが、真司はマミの意見に賛同したわけではない。

ただまどか達も本物の戦いを目の当たりにすれば恐れをなすだろうと、そう思ったのだ。

危険でもあるが、いざとなれば自分が守る、その覚悟があるからこそ頷きだった。

その後は場の空気も少し軽くなり、他にいくつかの話をして、

「じゃあ今日はここまで、

明日学校が終わったら早速始めるから、今日は各自明日に備えて早く寝るように」

「了解ですマミ隊長！」

「はは、了解です」

話が終わり、その場が解散の空気となった。

まどか達がそれぞれの食器を片付けてから、バックを手に立ち上がって玄関へと向かう。

真司もそれに続いていたのだが、完全に忘れていた『現実』を思い出し、妙な声をあげた。

「？、どうしました？」

やけに焦った様子の真司を不思議に思い、まどかが振り返って尋ねる。

「え、あつそつだ、ちょっと聞きたいんだけど、この辺で安い宿とか知らない？」

「宿…ですか？でもどうして？」

「いや、えつと…、実は俺の赴任って急に決まっちゃてさ、家探す暇もなかったんだよね」

「…ふーん」

とつさについた嘘はやはりそれなりのレベルのもので、明らかに疑った目を向けられる。
かと言って本当の事を言うわけにもいかず、ぎこちない苦笑いを浮かべるしかなかった。

「まっいいや、今いくらぐらいお金持ってるの？」

「えつと、大体十万ぐらい……」

「……観光に来たわけじゃないわよね？」

さやかが呆れてため息を吐いた、

真司の苦笑いが一層引きつる。

「確か、前にママが言ってた料金だと……、もって半月ぐらいかな？」

「食事抜きでそれだから、それも計算に入れると一週間もてば万々歳ってところかね」

「ああ…、そうかあ……」

これは本気で『HOME LESS LIFE!』を堪能することになるか……、

突き付けられた現実になんて頭を悩ませていると。

「あの、城戸さん」

「ん？何ママちゃん？」

「その、よろしかったらですけれど……」

ママが真司の表情を伺うようにしながら声をかけた。

そして次に出た言葉は、真司にとって突如として女神が降臨したのかと思えるようなものだった。

「うちで空いてる部屋、使いますか？」

「え！？ホントに「ええええ！？何言ってるんですかマミさん！！」

真司の言葉にさやかは絶叫が被さった。

「真司ですよ！？真司なんですよ！？何されるか分かったもんじやないですよ！？」

「…なんで俺今日会ったばかりの年下にここまで言われてんだろ？」

「でも、さすがにいきなり同棲なんてのはどうかと……」

「うっ、まあそれは確かに……」

まどかの意見に真司が諦めの表情を浮かべる。
だが、マミはそれを笑いとばした。

「ちょっと同棲だなんて、そんな大したものじゃないわよ鹿目さんなんていうか…、下宿っていうのかしら？」

「いや、それでもマミさん……」

「美樹さん、わたしはいいって言ってるんだから、どうするかを決めるのは城戸さんの問題よ」

城戸さんが嫌だと言っただけならわたしも無理強いはしないけど」

言いながら真司へ目を向ける。
絶望の最中に差し延べられた女神の手、真司の答えは言うまでもなかった。

こういった経緯でマミの家での真司の同棲、もとい下宿が決まったのだった。

もう一度言う、真司、頼むからそこ代われ。

「……城戸さん、どうかしました？」

「え…、いや、何ともないよ？」

昨日の事を思い出しながら黙々と食事を終わらせた真司に、マミが心配そうな視線を投げかけた。

「でも、さっきからごちそうさま以外ずっと黙ってますし…、もしかして口にあいませんでした？」

「いやいや全っ然そんなことない！むしろすっげえ美味かったからビックリしちゃって」

「いやぁマミちゃんは絶対良いお嫁さんになるな！俺が保障するよ！」

「もう、何言ってるんですか、褒めたってなにもでませんよ！」

心配そうだった表情を少し赤らめて、マミは皿を洗い始めた。
洗いながらの鼻歌はいつもより少しだけ楽しげなものだったそう。

朝食も終え、そろそろ登校時間となってきた。

真司の職場も同じ学校なので必然的にマミと一緒にいくことになったのだが、

「城戸さん、早くしないと遅れますよー？」

「ごめん！もうすぐ行くから！」

用意すべきものなど大してないはずだし着替えに手間取る歳でないだろうに、一体何を手間取っているのやら。

玄関に置かれた鏡でもう一度身だしなみを整えながら少し呆れて待っている。

「ごめんごめん、お待たせ」

「遅いですよ城戸さん、女の子を待たせる男子は……あれ？」

やっと来た真司の服装は、昨日とまったく同じ格好だった。

「城戸さん、その格好は……」

「ああ、マミちゃんはある服なんでも着てもいいって言ってくれたけど、パジャマはともかく他のはちょっとサイズ大きいみたいで」

「あ、そうでしたか、すいません気がつかなかって」

マミが申し訳なさそうに伏し目で言うと、真司が慌ててフォローした。

「マミちゃんが謝ることじゃないってホントに！」

まあ、近いうちに替えの服だけでも買いにいかなきゃダメだろうけど」

「それでしたら、今度一緒にわたしの行きつけの服屋さんに行きましようか

城戸さん、この辺の地理まだわからないでしょ？」

「うん、ありがとっマミちゃん」

二人とも良い笑顔で玄関を出る、そんな様子は今はまだ仲のよい兄

妹にしか見えなかった。

そんな二人の関係が今後どうなっていくのかは、まさしく神のみが
知ることだろう。

最後にもう一度、真司、マジでそこ代われ。

〈次回予告〉

「俺、認めないから」

「願いを叶える代わりにあんな女の子達を危険にさらさせるような
やり方、絶対に認めない」

第四話 『何も期待していない』

第三話 そんなの絶対おかしいだろ（後書き）

冒頭の展開はかなり悩みました

当初はアホみたいだなネタだったんですが、これは誰も得しないだろうなと思いボツに

結局かなり先の展開の伏線に落ち着きました

今回のメインイベント、真司VSキュウベえ

真司くんは元の世界でライダーバトルという前例とも言える戦いを体感して、さらに戦うのが年端のいかない少女ということもあり、どうやら魔法少女の契約には否定的なようです

さて、今回のくどいまでの描写によりお分かりいただけたかと思いますが、メインヒロインは我らがマミさんこと『巴 マミ』さんです
そもそも龍騎×まどかを考える発端が『マミさんをどうにかして幸せにしたいなあ』という妄想からきてたりします

でも恋愛描写はヘタクソなので、その辺はあんまり期待しないでくださいね？

それでは、次回も見てくださいね！

第四話 なにも期待していない

「いやはやお前もさ、ホントによくやるよまったく」

真司が教頭にそう声を掛けられたのは、昼休みに早乙女の命令でプリントのコピーを刷っている時だった。

脈絡も突拍子もありやしない話に、真司は目上の相手にも関わらず不躰な声をあげた。

「は？なんスカいきなり？」

「口調、減点1つと」

「え？」

「減点2、これ10点貯まったらお前クビね」

「はい！！？あ！すいません教頭先生様！ホントにいいスーツですねそれ！！」

二つ目のさらにとんでもない話に真司が慌てて媚びへつらつ、家無しに職無しが加わるのは避けたい、絶対に、何としても。

「おいおい真に受けるなよ、こんなんでもクビとか決めれるわけないでしょ？」

「え、嘘、ですか？よかつたあゝ」

「まったく、お前ホントに大学出てんの？馬鹿にも程つてもんがあるでしょ？」

「……それで、何の用ですか？、俺今忙しいんすけど」

不機嫌にききながら作業を再開する。

確かに最近では自分が他に比べてすこしだけ馬鹿であることは自覚しているが、こつも初対面の相手に言われ続けると気分も悪い。しかも内一人は年下だからたまつたものではない。

「ま、そう怒るなつて、給料上げてやるからさ」

「はい何のご用でしょうか教頭先生！！」

作業を放り出してそれはそれは良い笑顔を教頭へ向ける。
とことん扱いやすい男であつた。

「いやさ、実は俺今朝ここに来るまでに面白いもの見ちゃつて」

「面白いもの？なんですかそれ？」

「はつきりなんだとは分かんないけど、ありや多分エンコーだねエンコー」

「エンっ…！？ちよっそれホントですか！？」

真司が驚き大声をあげる

周りの教師が訝し気な目で見てくるが、話が気になり過ぎてまったく気づかない。

教頭はそんな真司をニヤニヤと見つめた。

「いやあ、あっさりボロだすと思ったけど、以外と演技とか出来るんだなお前」

「演技？」

今度は何の話なのか、真司が首を傾げる。

次の教頭の発言にそのまま首がへし折れるかというほどの衝撃を受けた。

「あ、もしかしてお前顔は良いから普通に引っ掛けたのか？
だったらとんでもなく手の速い変態だな、城戸真司くんは」

「はあ、確かにとんでもない……って俺え！？」

二度目の絶叫、さすがにうるさく感じた教師に怒られてしまった。

だが真司にはそれどころではない。
何故か出勤二日目にして変態のレッテルを張られたのだ、そりゃ焦るだろう。

「な、何の話ですかそれ！？俺が、手え出した！？誰に！？」

「えーっと、誰だったかな、確か三年で金色の髪の一人暮らししてる……」

「あら、マミさんがどうかしましたか？」

横から昼食をとってきたらしい早乙女が話に入ってきた。

真司が仕事を放置していることに気づくと、

教頭がいるためかヒステリーにはならなかったが、人間の女にこんな迫力が出せるのかと言いたくなるような眼力で睨みつけた。
恐怖のあまり情けない声を漏らして震え上がる。

「ああそうだバマミだ、ありがと早乙女ちゃん、助かったよ」

「いえいえ、教頭先生のためですから」

さっきまでの迫力はどこへやら、一瞬で柔和な笑みの別キャラへと変わった早乙女に真司はさっきまでとは違う意味で恐怖した。

「それで、マミさんがどうかしたんですか？」

わたし去年あの子の担任だったんでそれなりにお教えできますけど」

「いやそういうのじゃなくてさ、

どうもこいつがその巴に手え出しちゃってるらしいのよ」

「なん……だと………？」

目を見開き、体を小刻みに震わせるながらゆっくりと真司の方へと向いていく。

それはさながら死へのカウントダウン、完全に向かいあった時自分は『終わる』、

それを理解しながらも真司は動かない、否、動けない。

弱い生物は自身の天敵と対峙した時、無意識下で自分の運命を悟り身体機能を停止させるという

今の真司がまさしくそれだった。

蛇に睨まれたカエルには抗うことさえ許されず、ただ飲み込まれるのみ

そして、永久に続けられるかとも思えたカウントが、ついに、

「さあ、城戸真司………」

「う、あ、ああ………」

零（死）に達した。

「お前の罪を数えろっ……！」

「うわあああああああつ!!!!」

真司ご臨終、どこその一流な銃使いのような断末魔と共に彼の第二の人生は終わりを告げ――

「…それで、話続けていいかな？」

「はいどうぞ」

「だ、大丈夫で…す……」

――なかった。

さすがにこんなので終わる主人公はいない。
というかそんなのわたしが許さない。

「ま、別に生徒に手え出すとは言わないよ、でも初日から……」

「ダメに決まってるでしょ教頭先生！わたしだってまだそこまではしてないのに！」

「早乙女さん『まだ』ってなんですか『まだ』って」

「いちいち突っ掛かなよ、変態の城戸真司くん？」

「だから違うっての！あんたじゃあるまいし……」

「おいおい、何さりげなく俺のことロリコン認定してくれちゃってんの

俺こそ有り得ないよ？俺子供嫌いだし」

さりげなく教育者にあるまじき発言がしたが、真司にそれを気にかける余裕はなく、しどろもどろに弁解を始める。

「と、とにかく！俺とマミちゃんはそういうのじゃなくて、ただ…えっと、マミちゃんの家に住まわせてもらってるだけで……」

「同棲！？たった一日で同棲までいつてるんですか！？」

「だろうねえ、俺が見たのも二人でマンションから出てくるところだったし」

「同棲なんてもんじゃなくて！ただの下宿ですよ！げ・しゅ・く・！」

「教頭先生、それってなにか違うんですか？」

「いや、ほとんど同じでしょ」

大いに違う、断じて違う、だが二人にはそんなことは関係ない。重要なのは真司がマミと一緒に暮らしているという事実のみ、それに対する感情は両者にかなりの違いがあるが。

「でも、少し以外ですね、マミさんがそうも心を許すなんて」

「だからそういうのじゃないのに……、ん？」

完全に定着した間違ったイメージに打ちひしがれる真司だったが、早乙女の言葉に少し引っ掛かりを感じた。
それが何かは、はっきりとしなかったため漠然と尋ねる。

「早乙女さん、今のってどういう……」

「え？どういつ、って言われても……」

眼鏡に手を当てて適当な言葉を探す、しばらくそうした後、口を開いた。

「マミさんって、何て言うか、人と接する時独特の距離感を持つてるんですよ」

「そんなのあれぐらいの子だったらくあることですよ？
それがあっさり崩されるのもまたしかり、ってね」

教頭が興味なさ気にそう言った、しかし早乙女は首を振る。

「そついつのじゃないんですよ…、ホントに何て言えばいいか分からないですけど
それでも言うなら……『諦め』、というかなんというか」

「『諦め』？」

真司の反復に早乙女は頷きを返した。

「『この人たちとわたしでは仲良く出来るわけがない』って感じで普通そういう子って周りを見下してたりするんですけど、マミさんの場合はなんか違ったんですね」

「……ああ、あの子そついや色々あったもんね」

教頭が突然先程までと違った様子で神妙な声をあげた。

「教頭先生？」

「今思い出したよ、巴って確か3年前かそこらに交通事故で両親亡くしててさ、身内も遠い親戚しかいなかったから一人暮らししてんだよね」

その親戚からの仕送りと遺産のおかげで、不自由はしてないらしいけど」

「そんな、ことが……」

真司は俯き、考える。

そのことを踏まえれば、マミが自分を家に住まわせてくれたことにも説明がつく。

もしかすると、寂しかったのではないだろうか。

マミは確かにしっかりとしているが、それでも自分と一回り近く歳が離れている十分な子供なのだ。

家族との突然の別れから随分たったとはいえ、ああも広い家にたった一人では孤独をより強く感じてしまうだろう。

「なあ、城戸」

教頭が真剣な様子で声を掛けた。
それに真司が顔をあげる。

「お前が巴とどういう関係なのかは知らないし追究もしない、
だけど、泣かせるようなことだけはするんじゃないぞ」

「そうですよ城戸くん、あの子はこれからの人生を笑って生きなきゃいけないような子なんですから」

「二人共……」

二人の言葉に真司の目頭に熱いものが浮かんだ。
いささか破天荒なところがあるが、それでも彼らは教職者、
やはり生徒のことを何よりも大事に思っている素晴らしい人達なん

だと、そう思い直した。

「…どうよ早乙女ちゃん、今ので俺のイメージ結構アップしたんじゃない？」

「はい！もうアップ アップ アップ です！」

「まっ、そんなことしなくても俺は強くてかつこよくて頭も良くて、おまけに金持ちのスーパー教頭先生なんだけどね」

「……おい」

前言撤回、やっぱりとんでもない奴らだこいつら。

話が終わり、教頭がどこかへ行った後、

真司は、プリント制作が遅いという理由で早乙女からお叱りを受け、本来放課後の筈の屋上の掃除を命じられた。

初めは嫌な顔をしていたがマミ達との魔法少女体験ツアーもあったのを思い出し、

むしろ好都合だと思い直して進んで受け入れた。

そして赴いた屋上手前の階段にて、

「あ」

「……………」

美しい黒髪の転校生と三度目の邂逅を果たした。

屋上から下りてきた彼女がちらりとこちらをみやり、視線が交わる。昨日の話し合いでも彼女――まどかが言うには『曉美 ほむら』という名前らしい――のことは話題にあがった。

キュウベえやマミ曰く『キュウベえがまどかに目をつけたのを察知し、邪魔な魔法少女が増えるのを妨害する』のが目的のようだ、とのことだ。

まどかとさやかはそれに一応納得していたようだが、真司はどうにも釈然としなかった。

それというのも今も脳裏に残る、昨日の一瞬彼女に見えた『あの表情』、

何かに堪えているようなあの表情が、真司にほむらを敵視することを躊躇させ続けていた。

「えっと、まどかちゃんに聞いたんだけど、ほむらちゃん、だよな？」

表情のことが気になったというのもあるし、しっかりと話すことで敵対することのない良好な関係が築けるかもしれない。

そう思いほむらへと声をかけたが、

彼女はすぐに視線を外し、サッと背を向け真司から離れていく。

「ちよつ、ちよつと待って！」

そう強く呼び止めると、ようやくほむらは足を止めた。
話を聞いてくれる気になったかと安堵しながら口を開くが、

「城戸真司」

それは声を発することなく、静かに驚きを形作った。

「なんで、俺の名前……」

「あなたに一つ言っておく」

ほむらは全く振り返らない。
だが、初めて対峙した時と同じ得体の知れない瞳がこちらを睨んでいるように、真司には感じられた。

「わたしはあなたに何の期待もしていない……、だから、余計なことではないで」

それだけ言つと、カツカツと同じ調子の足音と共に去っていった。

「期待してないって……、俺の何を知ってるんだよ」

少なくとも名前は知られていた。

少し不気味なことだが、それでもやはり疑いきれない。

むしろ今の態度にどこか元の世界の親友に似たものを感じて、より一層気にながら、とにかく仕事のために屋上への階段を上っていった。

見滝原中学校

比較的高い全長の校舎であるこの学校は、屋上からの見晴らしも抜群である。

そのため昼休みには屋上で昼食をとる生徒も少なくない。

といっても、すでに昼休みも終わりに近いので人影などありはしないが

「あつ、真司だ」

「こんにちは、真司さん」

訂正、あつた。

それもこの世界で数少ない見知った顔が。

手元には空の弁当箱があるので、どうやらここで食べ終わってちょうど教室に戻るところだったらしい。

「おっ、まどかちゃんとさやかちゃん、… キュウベえも一緒か」

「一緒だよ、何か問題かい？」

「…別に、問題とかじゃないけど」

キュウベえがまどかの足元で尻尾を揺らしている。

昨日の夕方は結局うやむやになったが、真司としてはやはりキュウベえは信用出来なかった。

キュウベえの『願い』を対価に戦わせるというやり方が、どうしても神崎士郎の仕組んだライダーバトルと重なって見えてしまうのだ。あの戦いが起こした多くの悲劇を知るだけに、やはり色々引っ掛かってしまう。

「そうだ！ちよつと真司聞いてよ」

「ん、なに？どうかした？」

微妙に重くなった空気には気づかず、さやかが声をあげた。

「それがさ、まどかったら今日学校来る時からずっと変なこと言ってるのよ」

「へ、変なことって……、でもわたしホントに見たんだよ！？」

「はいはい、どうせ寝ぼけてたんだって」

まどかがむくれながら必死に反論するが、さやかは呆れ口調でまったく相手にしない。

「真司さん、真司さんは信じてくれますよね？」

「いや、っていうかまったく話がよめないんだけど」

「僕としても有り得ない話だと思うけどなあ」

「キュウベえは黙ってて！」

まどかに顔を押し潰されてキュウベえがキュツぷい、と妙な声をあげる。

さすがにこれには真司も同情した。

「いやいや、いくら真司でもあんな話信じないって」

「そんなことないよ！だって真司さん良い人だもん！」

「あー、とにかくまどかちゃんは今朝なにかを見たわけだ」

このままでは埒が開かないので、まどかに話を促す。

「あのですね、わたしが家を出てさやかちゃん達に会う前の道のことなんですけど

良い天気だなあ、なんて思いながら木に止まってる鳥を眺めて歩いてたんです」

「ふんふん」

「そしたら近くの家の窓が、こつ…ギラッ！て光った気がして、そしたら……」

「そ、そしたら！？」

まどかの引きに真司が思わず身を乗り出す。

どうやったら今の一瞬でここまで引き込まれることができるのか、さやかは何も言わないが、その目はヤレヤレと言わんばかりに呆れていた

「そしたら、その窓から突然赤い龍が飛び出して鳥を食べちゃったんです！」

「な、なんだっ……………え？」

……赤い、『龍』？

「ほら、やっぱり真司も信じないって、さすがに龍はないよ龍は」

「ち、違いますよね！？龍がいたって信じてくれますよね！？」

「あー、いやー、うん、まあ、有り得なくはない……んじゃないかな？」

なるほど、確かに『アレ』がポケットに入っている以上、『あいつ』もこの世界にいておかしいことはなにもない。

しかし『ごめん、多分その龍って俺のだ』、なんてことを言うわけにもいかず、

全身から冷や汗を流しながら曖昧に返した。

「ほらねさやかちゃん！やっぱり真司さんは信じてくれたよ」

「…真司？別に無理して合わせる必要はないんだよ？」

「ハ、ハハハハハハ、良いじゃん？夢があつてさ」

さやか、ドン引き、

真司はやはり渴いた笑いでごまかすしかなかった。

「あー、そうだ、放課後のことなんだけど」

さやかがドン引くのをやめて話を変える。

真司としても龍の話が続けられるのは胃に悪いので意識を切り替え

た。

「悪いんだけど、わたしとまどかちよつと遅れるから」

「え、なんで？」

「いやあ、実は…」

まどかが恥ずかしそうに頬を赤くし、上目づかいで言う。

「昨日色々あり過ぎて、今日提出の宿題があつたのを完全に忘れちゃってまして……」

「それでわたし達二人とも居残りってわけ」

「…なにやってんだよ」

真司自身も学生時代はしょっちゅう居残りを食らっていたので、あまり偉そうにいえる口ではないのだが。

と、昼休みの終わりを告げる無情なチャイムが大きく響いた。

「ああっ！？さやかちゃん大変！5時間目始まつちやうよ！」

「しまった！？宿題忘れと遅刻のダブルアクションなんてクライマックスどころじゃ済まないって！急ぐわよまどか！」

「ま、待ってよさやかちゃん！」

さやかが一気に駆け出し、その後にもどかが続く。二人はあつという間に階段を駆け降りてしまった。残されたのは真司と、キュウベえ。

「…お前はついてかないのか？」

「なに、もちろん行くさ」

真司の方を見ずにそう返すと、キュウベえはゆっくりとまどか達の後を追いつきだす。

「……俺、認めてないから」

ピタリ、とその足が止まった。

「『願い』を叶える代わりにあんな小さな子たちの命を危険にさらさせるようなやり方、絶対に認めない」

「…そうかい、君がそう考えるなら、残念だが契約しなければいいけどまどか達が契約するかどうかは彼女達が決めることだ。君が口を出すことじゃない。それに……」

キュウベえが向き直る。水晶のような赤い瞳が、真司を映しかえした。

「魔女を放っておく訳にもいかないんじゃないかな？」

たとえ彼女達が戦わなくとも魔女が存在するかぎり決して安全とは言えないし、さらに多くの人間の死ぬ可能性も高くなる」

言いながら目を細めると、写っている真司も同様に歪む。しかし、実際の真司は態度も視線も決して歪めることなく、そこに立ち続ける。

「どうなんだい？まさか何も考えずに否定しているわけじゃないよね？」

「…だったら、俺が戦う」

「……なんだって？」

「俺が戦うつて言ったんだ

誰にも戦わせないし、誰も死なせない、そのための『力』も『覚悟』も、俺にはある！」

キュウベえへと強く腕を突き付ける、その先にしっかりと握られているのは『力』と『覚悟』の証。

黒いシンプルな造りに刻まれた金色の龍が、キュウベえを睨みつけた。

「……なるほど、それが君をイレギュラーたらしめる理由か」

真司が持つモノを睨むように見ながらキュウベえが言う。

視線は交わらない、だが、いや、故に両者の間には強く火花が散っていた。

「……とにかく、僕はもう行くよ

放課後のこと、ちゃんとマミにつたえておいてね」

そう言うときユウベえは再び歩き始め、今度はもう振り返ることなく真司の見えない奥へと消えていった。

最後に一人残された真司は『アレ』をしまい、少し景色を堪能してから箒を手にとってボチボチと掃除を開始した。

青空の向こうのほうにやけに黒い雲が見えた気がして、箒で掃く力を一層強くしたのだった。

〈次回予告〉

「確かに魔女は恐ろしいは、でも、だからわたし達魔法少女がいる」

「魔女が絶望を撒き散らし、人を殺すというのなら、わたし達はそれ以上の希望を振り撒いて人を救うまでのことよ」

第五話 『センス悪いって、言われませんか？』

第四話 なにも期待していない（後書き）

キーワードを少し編集しまして、『若干のキャラ崩壊』の『若干』を抜きました

理由は諸々ありますが、とりあえず一言、早乙女先生ファンの方ごめんなさい

龍騎本編におけるミラーワールドは優衣の力で生み出された空間のようですが、この話では『ミラーワールド自体はこの世界にも存在し、優衣が生み出したのはモンスターのみ』ということになります

『じゃあお前世界の再構成はどうやったんだよ』って話になります
が、

それはそれ、これはこれということで

上手い設定が思いつかなかったのはわたしの責任です……

わたしが弱いから……わたしが未熟だから……

ところで皆様はまどかの最終回見ましたか？

まさかラストでディケイドが乱入してくるなんて夢にも思いませんでしたね

ってか完結編は冬に映画でやるって東映はいい加減にしろって話ですよね

はい、嘘です

実際の最終回については未見の片もいるでしょうから内容を言及は

しません

ただ一言、一応妄想してるこの話のラストは本編最終回とは『全くの別物』になると思います

あのラスト以上のものにはなることは無いでしょうし、そもそもちやんとそこまで辿り着けるのかも断言は出来ませんけれど……

そんな意志の弱いダメ野郎の小説ですが、どうか見捨てないでやって下さい

それでは、次回も見てくださいね！

第五話 センス悪いって言われませんか？

昨日と同じく教頭の『帰っていいよ（邪魔だから）』発言を受け、授業が終わった頃には自由となった真司は校門にてマミを待っていた。

帰っていく生徒たちを眺めながら待っていると、間もなくしてマミが合流した。

「えっ、鹿目さんたち遅れるんですか？」

「うん、そうらしいよ」

待ち合わせ場所のファーストフード店へと移動中に、マミにまだか達が遅れる旨を説明する。

マミは始め黙って聞いていたが、理由を話すと額に手を当ててため息をついた。

「はあ…、まああんなもの見せつけられたら仕方ないといえばそうかしらね」

「マミちゃんはそういうの大丈夫なの？勉強と魔法少女の両立って大変そうだけど」

「確かに大変ですけど、補習なんかで時間を取られれば魔法少女にも支障になりますから」

「へ、へえ、そうなんだ、スゴイなマミちゃんは」

「そんなに褒めないでください、その……照れますから」

元の世界にて真司はライダーと仕事の両立がほとんど出来ず、上司の大久保が理解ある人物だったためクビは免れていたものの給料が笑えない額まで減らされたりしていた。比べるようなことではないのだがどうにも中学生のマミより意識が低いような気がして、とにかく耳が痛かった。

「まどかちゃん達が終わるまでけっこうかかると思っけど、その間どうしようか？」

真司が半ばごまかしのように尋ねる。

俯いて目を逸らしていたマミだったが、すかさず顔と声をあげた。

「そうだ！だったら先に城戸さんの服、見に行きましょうか」

「え、でもさすがに時間大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ、待ち合わせ場所と同じショッピングモールの中ですから」

そついうことならと真司が頷いたのをみて、ならば善は急げだとマミは足を急がせた。

走る理由に、桃色にほてった顔を隠したいというものもあったことは、当人も気付くことはなかった。

そういうわけで、二人は真司の服を買いにショッピングモール内にあるマミ行きつけの服屋へとやってきた。

始めは順調だった。

主な仕事が掃除なので、汚れても大丈夫で動きやすい服としてジャージが良いだろうということになり、マミの勧めで赤地に白のラインが三本はいつたジャージを選択。

これは真司も大層気に入りマミをベタ褒めし、マミは謙遜していたが、実際満更でもなかった。

しかし、仕事外の服、つまり私服を選んでいる時にそれは起こった。

「城戸さん、わたしとしてもこんなことは言いたくないんです」

「……………」

「でも、一応同じ家で暮らしている身としては、やっぱり言うておかなきゃいけないんじゃないかって、そう思うんです」

「…そんな勿体つけなくても、はっきり言えばいいじゃん」

「……………わかりました、では城戸さん……」

ゆっくりとマミの口が動く。

真司にはそこから放たれる口撃が読めていたが、だからこそ抵抗は

しない。

抵抗は自分がそれを恐れていると認めるのと同義だからだ。
故にノーガード、完全な余裕を持ってそれを受け止め

「――センス悪いって、言われませんか？」

「ぐおあっ！！」

られなかった。

真司の剥き出しのハートは容赦ないボディブローにあっさりとK・
O・されてしまった。

試合開始わずか30秒、ここに新たな伝説が生まれたのであった。

「べ、別に良いじゃんか、俺が部屋でなに着てたってさあ……」

「だからってこれは無いですよ、わたしこれ着た城戸さん見て笑
わない自信ありません」

言いながらママが広げたのは、目に痛い派手な黄色にデカデカと
真っ赤な文字で『闘魂』とかかれた、体育会系の少年が悪ノリ買う
ぐらいしか需要のなさそうなTシャツ
通称『闘魂Tシャツ』。

「カッコイイじゃんコレ！なんて言うか、『っしやあ！』って感
じでさー！」

「ごめんなさい、あなたがなに言ってるかまったく、微塵も、何一つとして理解できないわ」

「そこまで!？」

結局、真司がごり押しして『闘魂Ｔシャツ』を含む衣服一式が購入された。

闘魂Ｔシャツの入った袋を抱えホクホクとした笑みの真司を見るマミの表情は、随分と呆れながらも決して悪い表情ではなかったことを言及しておく。

「あ、マミさんと真司だ！おいこっちこっちー！」

「さ、さやかちゃん、絶対そんなに大きな声出さなくても聞こえるよぉ……」

服屋を出てファーストフード店へとたどり着くと、『闘魂Ｔシャツ』の件で時間をかけすぎたのかまどかとさやかが先に到着していた。

一目をはばからずに大声で真司らを呼ぶさやかに、まどかは恥ずかし気に俯く。

キュウベえは無心でフライドポテトを喰らい続けている。

ちなみに買った服はさすがに邪魔だろうということでマミ宅へ配送を頼んでおいた。

真司が闘魂Ｔシャツへ名残惜しそうな視線を向けていたのは、今年に入って一番どうでもいい事実である。

「ごめんなさいね、遅くなっちゃって」

「いえいえ全然大丈夫っすよ！元はと言えばわたし達が悪いんですから、マミさんが気にする必要なんてまったくないです！」

さやか of 言葉に自分の名前がなかったが、真司はもはや気にもならなくなっており、ツツコむことなくマミと一緒に席へと着いた。

「さて、それじゃあ早速魔法少女体験コース第一弾の始まりだけど、みんな覚悟はいいかしら？」

「もちろん！その証として……」

さやかが立ち上がり、威風堂々と傍らから引き抜き天高く掲げるは、

ありとあらゆる悪を絶つ伝説の剣、なわけもなく、

「…なにそれ、バット？」

「スポーツショップで特売してた１９８０円のお値打ちバット！コレがわたしの本気ってやつよお！ー！」

何故か手にしたさやかに後光さえ注して神々しさすら感じてしまうが、所詮は木製のそれ。

不審者程度ならノックアウト出来ても、魔女というバケモノを相手にするには随分と頼りがない。

「ま、まあなにもないよりはマシ、かしらね？」

「そ、そうだね、案外なんとかなるかも……」

「あの、お二人さん？なんかマジのフォローしてるから一応言っとくけど半分ぐらい冗談だからね？」

『撲殺少女さやか マギカ』とか素で言っちゃ痛い子じゃないからねわたし」

わかってるわかってると真司とマミが頷くが、

その軽く引いている様子にさやかはどうにも納得が行かなかった。

「あー、そっぴやまどかもなんか準備したって言ってなかったわけ？」

「え！？わ、わたしは、えっと……」

さやかの突然の振りに少し焦りながら、まどかはごくそそと自分の鞆に手を入れる。

そっぴ取り出したのは表紙に『英語ノート』と可愛い字で書

かれた一冊のノート。
全員が覗き込むなか、まどかが少し誇らしげにそれを開くと、そこには、

「こ、これはっ!」

「あらあら...」

見開きページ一杯に描かれたたくさんの少女達。

マミが変身した時のような姿、

メルヘンな衣装を纏ったまどか、

先日のおむらしき少女、

さらには彼女らが持つのだろう装備など、魔法少女に関する様々なものがノートの中にとろ狭しと描き連ねられていた。

「その、衣装とか設定だけでも考えておこうかなあゝなんて...」

「ふ、ふふふふ、なるほどね」

「あはははは!ダメだ!やっぱあんたには負けるわまどか!」

「え?あれ?ええ!?!」

よくわからないベクトルの覚悟にマミとさやかが声をあげて笑う。
だがしかし、ただ一人違う反応の男がいた。

「コレ、全部まどかちゃんを描いたの？」

「うう…、そうですね……」

予想外の反応にピュアな心をめった打ちにされ、顔を真っ赤に
てしまっているまどか。

真司はそんな彼女には目を向けず、食い入るようにノートを見つめ
続けている。

「？、城戸さん？」

「…す…」

「す？」

「…っごいんだなまどかちゃんって！こんなに絵上手いんだ！」

「ええ！？そういう反応！？」

まさかの発言にさやか degree 肝がぶち抜かれる。

真司へと信じられないというような視線を向けるが、彼の瞳には純
粋な憧れと尊敬しかなかった。

「そ、そんなにスゴイですか？」

「うんスゴイ！めちやくちゃ上手だつて！
特にこれなんてさ！」

「あ！それはわたしのなかでもちよつと上手く描けたかなあつて
思つたやつで……」

周りを置いてけぼりにしてワイワイと二人が盛り上がる。
放っておけばいつまでもそうしていそうだが、それでは話が一向に
進まないのです、

「えー、コホン！」

マミが多少強引に話題を変えようとしたが、

「よかつたらだけど、今度俺の絵も描いてみてくんないかな？」

「良いですよ、頑張つて描きますね！」

「あ、そうだ真司、あんたもなんか準備してきたのよね？」

真司達はまったく気づかず、さらにさやかまでも混ざつて話を脱線
させたので、
彼女は諦めふて腐れたように少し頬を膨らませながらポテトへと手
を伸ばした。

「え、俺？」

「うん、ほらその手に掛けてるビニールがそうなんじゃないの？」

「ああ、これは…」

言われ、真司が右手を持ち上げると、確かにその手首に小さなビニール袋が引つ搔かっている。

服屋からここに来るまでの雑貨屋で、マミに少し待ってもらって買ったものだ。
その中身は、

「まどかちゃん、はい」

「えっ、わたしに、ですか？」

「ああ、この前まどかちゃんの鏡割っちゃったから
あの時は謝りそびれたけど、ごめんな」

言いながら取り出した鏡をまどかへと手渡した。

先日借りたものとよく似たシンプルなピンク色の鏡。

「…あ、ありがとう、ごめいます
その…本当に」

「気にしないでいいよ、こういうのはキツチリしとかないと俺の気がすまないからさ」

「それでも、その、えっと……」

「？」

先程さやかとマミに笑われた時にも似ているが、何故か、言うならば『質』の違ったふうにもじもじとするまどかに真司は首を傾げた。

それをさやかがニヤニヤと見つめる。

「はっはーん、まどかちゃん、さては内心照れ照れですなあ？」

「さ、さやかちゃん！？別にわたしそんなんじゃない……」

「いやあ、確かにわたし達ぐらいの年頃の女子は年上に弱いところがあるよ、

得にまどかは男子とあんまり付き合いがないからなおさらってのも分かる

でもさ、真司は絶対やめといた方が良さと思うのよね

ってか真司にするぐらいならわたしにしときな、マジで」

「ふええっ！？なに真剣な顔で一から十までおかしなこと言うてるの！？」

「なーんかよくわかんないんだけど、とりあえず馬鹿にされてるんだよなコレ」

果てしない混沌さでいい加減話が進む気配も見えなくなってきた。そんなところでポテトを完食したマミ、やることもなくなってしまう、おもむろに話に割って入った。

「……そろそろ体験ツアー開始と行きたいのだけど、目的、忘れてないわよね？」

「あつ、いや、わ、忘れる訳ないですって！なあまどか！？」

「そ、そうですよ！わたし早く行きたいなー、なんて……」

「？、二人とも何焦ってんの？」

妙なオーラを発するマミに慌てる二人に対し、真司だけは分けがわからずキョトンとしている。

一応言っておくと三人とも完全に目的を忘れてしまっているのではなく、むしろちゃんと覚えているからこそその反応である。

「まあいいわ、それじゃあ行きましようか」

「はい、分かりました」

あれ？どうかしたのキュウベえ、なんだか元気ないけど」

「別になんでもないよまどか」（ポテト全部食べられた……）

全員が席を立つ。

機嫌は直ったがやはりマミへの申し訳なさは残っており、それにプラスして体験ツアーを目前にしての緊張もあつてか、

誰も真司が未だビニール袋を持ち続けていることを気にかけることはなく、

その中にまだ何かが入っていることには気づくことすらなかった

体験ツアーはまず昨日真司達が結界に飲み込まれた場所からスタートした。

魔女が居た場所に微量ながらある残り香とでも言うべき魔力、それにソウルジェムが反応して放つ光を手がかりに魔女を探しだすという。

メルヘンではあるが想像していたものとは違う地道な作業、それでも辟易とした様子の者は誰もいなかった。

「マミさん、なんかこう、魔女の潜んでいる場所の『目星』とかないんですか？」

ショッピングモールを出て夕焼けに染まる河をサイドに歩いている時、さやかがそんなことを尋ねた。

新人が少しでも技術をものにしたいくて先輩にコツを聞くような、そんな訊き方だった。

「そうね、比較的結界を作られやすいのは…、事故や喧嘩の起きやすそうな路地裏や、自殺に適した人気のない場所あとは、頻度が多いってわけじゃないけど病院なんかに巣くわれたら最悪ね

信じられない数の犠牲者がでることになるわ」

「病院……」

なにか思うところがあるのか、さやかがバットを持つ手を強くする。説明をしながらもマミの視線はソウルジェムから、さらに言えばその光からぶれることはない。

「そういや昨日はあんまり詳しくは聞けなかったけど、結局魔女って一体何なんだ？」

「何だと聞かれても、正直正体不明としか言いようがないんです、魔女も、その『使い魔』も
キュウベえから聞いた以上のことは知らないですから」

マミの言葉に全員の視線がまどかの肩に乗っているキュウベえへと集まる。

キュウベえは何を求められているのか察したようで、一つ小さな咳ばらいをして話し始めた。

「魔女とは『呪い』から生まれる怪物さ、『願い』から生まれる魔法少女とは真逆の位置にいる存在だね」

「聞くからにやばそうな感じね…」

「やばいなんてものじゃないよ、魔女は自分が作った結界に隠れ
潜み、外の世界へ『絶望』を撒き散らすんだ」

「うーん、なんだか詩的な言い回しだけど、具体的にはどんなこ
とをするの？」

「人々の持つ生きる希望や気力を奪い、人間を絶望させるのさ
そうなった人間は極端にネガティブになってしまつから、自殺や様
々な事件を引き起こしてしまうだろうね」

「なるほどな、まさしく『絶望を撒き散らす存在』ってわけだ」

なるほど、と真司が頷く。

「確かに魔女は恐ろしいわ、でも、だからこそわたし達魔法少女
がいる」

先頭を歩いていたマミがくりと身体ごと回って振り返り、真司
達へと薄い笑顔を向けた。

そのターンはあまりに華麗で、演技のように見えるものだった。

「魔女が絶望を撒き散らして人を殺すというのなら、わたし達は
それを塗り替える程の希望を振り撒くことで人を救うまでのことよ」

「さすがだねマミ、それでこそ魔法少女だ」

「絶望を打ち砕くのは希望ってわけか…」

「いやあやっぱりマミさんは正義の味方だ！マミさんは最高です！」

「ふふ、良く聞こえなかったわね、もう一度……あら？」

その異変は全員が同時に気づいた。

淡い光を湛えていたソウルジェムが、今は強くまばゆい光を放っている。

「マミさん、これって…」

「ええ、近いわね」

マミの表情が今まで以上に引き締まり、足の動きも早くなる。

真剣な空気に、全員が押し黙ってただ一心に進んだ。

やがて辿り着いたのは廃マンション。

その大きさから昔は高級マンションとして栄華を誇っていたと思えるが、

今は元からこの姿だったと思わせるほどに廃れきっている。

その様相には大した感慨を持たず、

真司は、でっかいなあ、なんて思いながらマンションを見上げる。

その瞳がぼんやりと何かを捕らえた。

「……………」

目をよく懲らして確かめる。

頭が一つ、腕が二つ、脚も二つ、ら

それが人だと気づくと次に沸いて来るのは違和感。

どうしてあんなところにいるのか、頭の中で計算式が出来上がっていく。

『人』+『ビルの屋上、その端』……
・自殺？

気付くと影はふわりと揺れて、そして段々大きくなって……、

「っ！危なあああい！！」

誰よりも素早く飛び出した。

背後からまどかの悲鳴が聞こえる。

それも今の真司には意識の外で、ただ目の前、いや、目の上の女性を救うことに全身全霊を集中させる。

（よし！間に合う！！）

目の上の女性が目の下へと落ちる前に、それとの間に割り込むことに成功した。

あとは何としてでも受け止める。

そう覚悟して全神経を集中させ、

「城戸さん、どいて！」

「ぐええっ」

上を向いていた顔面に、深々とマミの靴底が突き刺さった。

「マミさん、その人は！？」

「……うん、大丈夫、気を失ってるだけよ」

「し、真司さん、大丈夫ですか？」

「あ、ああ…、大丈夫、大丈夫………」

何が起こったのかというと、変身したマミが真司を『踏み台にする』形で跳躍、落ちてくる女性を見事にキャッチしてみせたのだ。その結果女性は地面との衝突を免れ、真司の鼻っ柱には見事な靴跡が残った。

「あれ、この人首元になんかついてますよ」

「これは魔女の『口づけ』よ、魔女に魅入られてしまった者の証……」

マミが女性の首元についた薔薇の紋章を指でなぞる。
女性を地面へと寝かせるとマンションへと向き直るマミに、真司が
少しヨロヨロとなりながら声をかけた。

「落ちてきた女の人、大丈夫だった？」

「はい、さつきはごめんなさい、助けるのに必死だったものです
から」

「いや、大丈夫、気にしてないから、全然」

真司は引き攣る笑顔でそう言うが、
イカシたフェイスペイントにさやかがなんとか笑いを押さえている
のに気付くと、
うつすらではあるが額に青筋が浮かんでいた。
その鬱憤をはらすように袖でがむしゃらに顔を拭う、周りの目など
無視だ

マミらも空気を読んで何も触れなかった。

気を取り直して挑むようにして入り口へ立つマミの後ろに、真司、
さやか、まどかと続く。

マミは一度振り返りその面々に目をやると、

「行くわよ」

短くそれだけ言って、バケモノの巣窟へと足を踏み入れた。

さあお待ちかね、いよいよ龍が轟くとき

騎士が参上したことで『物語』が動きだし、

銃士との出会いは『運命』を回す

『運ばれゆく命』と書いて『運命』

騎士が運ぶ黄色い命は、果たしてどこへと辿り着くのか

次回予告

「やっぱりさ、俺」

「何もせずに黙って見てるだけなんて、性に合わないんだ」

第六話 『つしゃあ!-!』

第六話　っしゃあ！

魔女が結界を張るマンションの内部。

一歩歩く度に無償に咳ばらいをしなくなる埃っぽい空気が舞い上がる、そんな中をマミは躊躇することなく正面へと歩いていく。

真司たちが建物の中を見渡しながらその後続いた。

「随分と古い建物だな…、魔女よりゴキブリがうじゃうじゃいそうだ」

「そ、そんなこと言わないで下さいよ！わたしゴキブリ駄目なんですから！」

「何を腑抜けてんのよあんたたちは！？もうここは敵の本拠地なのよ！気を抜いたらぽっくりよぽっくり！」

寄らば斬るとばかりにバットを両手で構え、さやかは見えない敵への警戒に気を抜かない。

そんな彼女にマミが落ち着くよう声をかけた。

「心構えは良いけれど、まだ魔女の結界には入っていないわよ？」

「え、マジ、ですか？」

「おおいにマジよ」

ガクリとうなだれるさやかにクスリと笑い、マミは周りをさっと見回した。

すると一点、エントランス正面の階段を上る踊場へと目がきたとき、帽子に飾り付けられたソウルジェムがチカチカと断続的に光った。マミがそれに気付き手を差し向けると、踊場の何もない空間がぐにやりと歪む。

やがて歪みが安定していき、それが空間が裂け開いたことにより出来た『入り口』であることが分かった。

入り口から溢れだす飲み込まれそうな空気にまどかが唇を震わせる。

「あの、向こうが……」

「そう、魔女の結界よ

さあここからが本番、みんな覚悟はいいかしら？」

「も、もちろんっすよ！」

さやかが全身に走る怖じ気を振り払うようにしてバットをぐるりと回す。

それに勇気づけられ、まどかも力強く頷いた。
続いて真司も頷く。

「よろしい、それじゃあ早速突入よ

っと、その前に美樹さん、ちょっとバット貸してもらえるかしら？」

「へ？はあ、どうぞ」

マミが差し出されたバットをサラリと撫でた。

するとバットは強い光を放ち、ぐよぐよとその形を変質させていく。自分の手前で起きる眩しさに離れようのないさやかが目をつむる。しばらくして光がおさまり、開けた目に映ったのは、

「おおっ！？コレは！？」

「急ごしらえだけど、護身用にはなると思うわ」

自分の手に握られた、これでもかとはかりにゴテゴテの装飾を施された金色のバット。

人によっては悪趣味だと目を細めるかもしれないが、さやかはいたく気に入ったらしい。

「よし！これでもう安心よまどか、まどかに近寄る敵はわたしがばったばったと叩き伏せてやるわ！」

「う、うん、でも無理はしないでね？」

「いや、だからあくまで護身用だよそれは」

キュウベえの呆れ声は届かず、何故か鼻高々にさやかははしゃぐ。バットの見えた目云々というよりも、友達を守れることが出来るのを純粹に喜んでいるようだった。

「さあ行くわよ、みんなくれぐれもわたしの側を離れないように」

「はい！」

「は、はい！」

マミが入り口へと飛び込み、その後にはさやか、少し躊躇してまどかと続く

真司はビニールの中身を少し覗く、

そこから聞こえた何かの咆哮に強く頷いて、結界へと身を投げた。

結界の中はあいも変わらぬ狂った空間だった。

踏み込むと同時に、前と同じくむせ返る薔薇の臭いが漂ってくる。

だが、以前と違うのはまどかもさやかも立ちすくむことなく前へと進んでいるということだ。

それというのも――

「ちよっ！？真司！後ろ！後ろ！」

「え？おわあ！？」

最後尾を走っていた真司の背後から、なんとも形容しがたいバケ

モノがぬつ、と現れた。

昨日遭遇した使い魔とよく似た蝶の羽と口髭を持つが、それを纏う身体はドロドロに溶け、全身を乱雑に並べられた目が覆っている。

思わずビニール袋を庇う形でのけ反る真司をそのまま押し倒すように、使い魔は頭から勢いよく突っ込んでくる。

「っ！」

「真司さん！」

バランスを崩し、避けることも出来ない。
あわや弾き飛ばされるかというところで、

「はっ！」

マミが放った蹴りが、使い魔を碎き散らした。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、ありがとう」

「あんまり気を抜かないで下さいね」

それだけ言うと、マミはまた先陣を走り出す。

それというのも、『魔法少女マミ』という存在ゆえだろう。

マミの持つ、力強く、爽やかな雰囲気の結果内のどす黒い空気を掻き消しているのだ。

まどかとさやかにとつて、今彼女はまさに先の言葉通りの『希望を振り撒く存在』だった。

一方真司としては、マミ一人に戦わせていることが気に病めて仕方がなかった。

出来るならいますぐポケットの中の『アレ』を使いマミの手助けをしたいところだが、

如何せん結界に入ってからずっと走り回っているため、『アレ』を使うタイミングを見つけれないでいる。

それからしばらくは平常だと錯覚しそうになるほどスムーズに進んだ。

近づこうとする使い魔達は、あちらの射程圏内に入る前にマミに存在を察知されて一撃の元に葬られる。

運よく近づけたものも、

銃床か、靴先か、もしくはさやかががむしゃらに振り回すバットを叩き込まれ、敢えなく消滅した。

そして、

「みんな気をつけて、そろそろ最深部に到着だよ」

一体どれほど走ったのか、それすらあやふやになりつつある時にキウベえがそう言った。

ちなみに彼は始めまどかの肩で踏ん返っていたのだが、それはまどかに悪いとマミに注意されたので今は必死に地面を走っている。

「最深部…、つてことは、やっぱり親玉みたいやつが？」

「ええ、この結界を形成している魔女が待ち受けてます
ここに来るまでにいた使い魔とは比べものにならない力を持ってる
でしょうね」

「そんなのと、戦うんですか？」

「そうよ、みんなを守るためですもの」

不安そうなまどかにマミが言い切る。

「なあに、いざとなればこの美樹さやか、及ばずながら助太刀致しますよ！」

あらゆる悪をぶっ飛ばす！とばかりにさやかがバットを振りかざした。

放つオーラはホームランを宣言する名選手に匹敵する勇ましさが、

「……さやかちゃん、すっげえ足震えてんぞ」

「うつ… ああもう！せつかく人がかつこよく決めてんだから、それぐらい空気読んで黙っててよね！」

バットを振り回して抗議する。

だがやはり足の震えは止まらず、無理をしているのが見てとれた。

「ありがとう美樹さん、でも今はまだ無理しなくていいわ
そういうことはあなたも魔法少女になってからで、ね？」

「うつ…、わ、分かりました……」

さやか、本日二度目のうなだれ、
仕方がないこととはいえ今の自分では力になれないことが悔しく、
口をすぼめた。

それからまた少し走ると、真司達の前に随分と豪勢な造りのドア
が現れた。

そしてドアの前に立ち塞がるようにしてうごめく使い魔たち。

あまりの明白差は、

実はわざと『この先には何かがあるよ』と教えてくれているんじゃないかと思えてしまうほどだった。

「…とはいっても、ちょっと多すぎだよね……」

「うん、ねえマミさん、ここは諦めて別のルートを……」

ドカン！と大きな音に身体が震える。

銃声は一つだが、それは目の前に並んだ数丁のマスキットが斉射された音で、

驚きまたたきして見直す一瞬の内にバケモノ共は塵へと化していた。

「？、今何か言ったかしら？ちょっと銃声で聞こえなかったのだけど」

「い、いや、なんもねーっス」

そう、と返して悠々と扉へと歩いていく。

あまりに余裕に溢れた態度にさやかは何も言うことが出来ない。

「やっぱりママさん凄いなあ……」

「……ああ、本当に凄い」

呟く言葉自体は同じものでも、まどかは尊敬の、真司は複雑な、それぞれ違った気持ちを抱きながら、扉へと進んだ。

重々しい、頭へと響く音を上げて扉がゆっくりと開く。

開いて少しは狭い通路になっており、

鼻が潰れそうになるドぎつい薔薇の臭いに耐えながらそこを数歩行けば、

通路が途中で切れて真下へと大きな庭園が広がっている。

そして、その中央、周りに咲き誇る薔薇達を愛でるようにして『それ』はいた。

「マ、マミ…さん…あ、れが？」

まどかが問うが、先に食べたポテトが胃から逆流してくるのを防ぐのに必死で口元を手で覆っているため、上手く言葉が紡げない。マミがなんとか意味を汲み取り、頷く。

「…ええ、あれが『魔女』よ」

「ま、魔女っていうよりアレは…えーと……ダメだ、アレに合う言葉が全っ然思いつかない……」

「ぐ、グロ過ぎる……」

真司が言葉を見つけれられないのも、さやかが耐え切れずえづいていいるのも無理はない、というよりも当然のことだった。

なにせ、言葉の通りなのだから。

塊として形状を保っているにも関わらず流動を続けるマーブル色の胴体。

既存の生物で言うところの脚としてか、数本の触手が不規則に揺れている。

その背中からは今までのバケモノらと同じく蝶の羽、ただしその大きさはあまりに巨大で、一振りするたびに嫌な風が真司達の頬を叩く。

そしてなりよりもその頭部、もはや吐瀉物としか形容できないそこからは常に汚らしく何かが垂れ落ち続ける。

唯一の飾り付けとしてか目のようにあしらわれた無数の薔薇も、付け焼き刃としてすら機能していない。

ただ椅子に鎮座しているそれだけにも関わらず、世界の全てを呪っているかのようにすら思えるバケモノ、

薔薇園の魔女『ゲルトルート』

その性質は不信

自分以外の全てを疑い、薔薇に近づく者全てを敵とする。

マミが力の抜けているさやか腕からバットを引き抜き、一歩進んでから後ろ手で地面へと突き刺した。

バットがその質量からは考えられない程深く沈み込み、そこを境としてマミと真司達を隔てる形に光の壁が形成される。

まどかが驚きの声をあげた。

「ば、バリアですか？これ」

「そう、これなら安全だから安心して応援しててね」

「あっ！ちよつ、待っ…」

真司が引き止めるのを聞くこともなく、マミはふわりと飛び降り

た。
延ばした手を間抜けに漂わせる真司の肩に、まどかがそつと手を乗せた。

「大丈夫ですよ真司さん、マミさんなら、きっと」

「そうそう、それよりわたし達はマミさんの勇姿を目に焼き付けることに集中しないとさ」

「……………」

空間を隔絶するバリアに手を触れる。
妙な冷たさが全身を突き刺した気がした。

「ご機嫌いかがかしら、お姉さま？」

華麗に、優雅に、かなりの高所から飛び降りたというのに、マミの着地は美しく、音一つたてたことは無かった。

しかしゲルトルトはそんなものに感慨を浮かべることはない、彼女の薔薇園に入り込むものは彼女にとって敵でしかない。

巨大な羽をはためかせて、同じく巨大な身体を舞い上がらせる。自分が座っていた椅子を相手に飛ばすというおまけ付きで。

自分を押し潰してもあまりある大きさが迫り来てもマミは焦るところをしない。

片手でスカートの裾を持ち上げ、その中から落ちてきた一丁のマスクットを落ちる前にキャッチ、すかさず構え、バックステップと同時に射撃。それ一発で椅子はただの粉塵に成り果てた。

「あらあら、そう焦ることないでしょう？まだ始まったばかりなのに」

マスクットを放り捨てながら被っている帽子を持ち上げ、返されることのない一方的な挑発と共にそれを上へと掲げる。すると帽子から十数丁のマスクットが飛び出し、マミの周りを囲むように地面へと突き刺さった。

そのうちの二丁を引き抜き、バタバタと飛び回るゲルトルートへと一方を突き付ける。

「さあて行くわよ、華麗に激しく、ね」

言い終わると同時、銃口から黄色い魔力弾が打ち出される。

撃ち終えたマスクットを放り捨てながら続けざまに一発、撃っている間に蹴り上げておいた一本を構えてさらにもう一発。

ゲルトルートは不規則な機動で飛び回るが、

一流の射手であるマミにはその動きを先読みすることなど容易なことだ。

さらに狙う対象がああも巨大では、それはもはや兎戯に等しい。

放たれた弾丸は全てゲルトルートへと吸い込まれるように着弾 -

「え……？」

次のマスケットを撃とうとして細めた目が、思わず丸くなってしまうた。

弾丸は確かにゲルトルードへの直撃コースを飛び、実際ゲルトルードがそれを躲すことは出来なかった。

しかし、弾丸がゲルトルードの身体をえぐることも、また無かった。飛び出した使い魔が、身を呈して弾丸から彼女を守ったことで。

使い魔が巨大なゲルトルードに寄り添い、その小さな身を盾にしてまで攻撃から守る様子は、

マミには親を必死に守ろうとする子供に、仲の良い『家族』のように見えて――

「――っ！、…見せつけて、くれるじゃない……！」

二丁のマスケットを同時に構え、間髪いれずに一斉発射。

使えなくなつたそれらを乱暴に後ろへと放り捨て、

さらに二丁構えては着弾を確認することもなく斉射を繰り返す。

何発もの弾丸が放たれたるが、全てがゲルトルードへと当たる前に使い魔に割り込まれてしまう。

その光景を否定するように、必要以上の力を込めてマミは引き金を引き続ける。

自分の足元からうごめきだすそれに気づくこともなく。

「っ!?!」

マミの足元から湧きでた手の平サイズの使い魔達が彼女体を這うようにして回り昇っていく。

やがて使い魔達は一本の茨と化し、マミの胴をきつく締め付けた。見ればもう一方の先がゲルトルードへと繋がっている。

いつの間にと疑問に思うヒマもなく、マミの体はたやすく引き上げられ、

「きゃあぁっ!?!」

「マミさぁん!」

これ以上ない乱雑さで、壁へと叩きつけられたさやか
の悲鳴が結界内に響き渡る。

「……………ちっ」

そんな彼女らへとばれないよう、マミは密かに一つ舌を打った。
見た目の派手さに反して衝撃は大したものではなかったが、
あんなものに気を惑わされて我を忘れるなど、まったくもって未熟
千万。

反省して、すぐさま対策を練りはじめる。

一番に思い付いたのは『ティロ・ステルミニオ』、アレの攻撃範囲と火力なら一瞬で使い魔もろとも焼き尽くすことができるだろう。

だが、それではダメなのだ。

それではあまりに華もなければ芸もなく、ゆえに意味もありはしない。

今回の戦いはただ勝つだけではないけない、

魔法少女の華やかさを彼女や彼に魅せつけなければならぬのだから。

考えながら、不安げな視線があるであろう方へと目を向ける。

そうしたマミに見えたのは、予想していた通りの怯え震える後輩たち――ではない。

そこに見えたのは、強い覚悟を身に纏った、

赤い、紅い龍の騎士。

「マミさぁん!!」

さやか悲鳴が反響し、あらゆる方向から真司へと届く。

その悲鳴が、真司の心にある『願い』を揺さぶった。

その揺さぶりを抑える理由など、真司のどこにもありはしない。

ビニール袋を手首から外し、中身を取り出して袋を地面に落とす。

袋はぱさりと小さな

しかし確かな音をたて、

それを聞いたまどか達が思わず音のした真司の方へと目を向けた。

視線を受けながら真司は取り出したモノを、青色のシンプルな鏡を放り置く。

「真司さん？何を……？」

「やっぱりさ、俺……」

出会った時と同じように、まどか達へ、ニツ、と笑う。

何故だろうか、確かにあの時と同じ笑い方なのに、

まどかには、さやかに、その笑顔があまりに力強く、頼れるモノに思えていた。

真司は手慣れた手つきで懷から、己の力、己の覚悟、その証たるソレを取り出す。

混じり気のない黒色の中に金色の龍がしっかりと刻まれたソレ、『カードデッキ』を握り、鏡へと視線を落とす。

寸分狂わぬ自分を映しだす筈の鏡だが、今は一点だけ違う部分がある。

鏡の向こうの自分の腰に巻き付けられた、中央に大きな『溝』のある銀色のメカニカルなベルト。

「何もせずに黙って見てるなんて、性にあわないみたいだ」

真司が鏡の自分へとデッキを突き出すと、

鏡の向こうからベルトが、『Vバックル』が浮かび上がり、現実の真司へと装着される。

「な、な、何？何するつもりよ！？」

「し、真司さん……？」

自分と同じ常識に生きていると思っていた人間のいきなりの異変に、動揺を隠すという考えが浮かんですらこない。

真司はただ集中する。

鏡の自分を睨みつけ、

デッキを握る左手は右腰へ落とし、

もう一方の手を高く左斜めへと突き上げて、

魂の底から己の全てを引き出すように……叫ぶ!!

「変身っ!!」

デッキをVバックルへと差し込むと戦士の像が幾重にも真司の身体へと重なり、

やがて一つの姿を形作った。

その存在が持つ熱さが溢れだした深紅のボディスーツ。

銀色の鎧が光り、

左手では龍を模した手甲が睨みを効かせ、

同じく龍の意匠を施された鉄仮面の奥で紅い瞳が燃え上がる。

「え?え?えええっ!?何よそれえ!!!?」

「……へえ」

「か、かつこいい……！」

「っしやあー！」

三者三様のリアクションを受けながら、真司は右拳を握りしめ気合い一発、一気に駆け出して、

「んがつ！？」

当然のように、張られたバリアに顔面を打ち付けたのだった。

「………うわぁ」

「……ああ、やっぱり真司なのね」

「かつこわるい……」

「うつ……」

装備された鉄仮面の防御のおかげで鼻っ柱に痛みはない。

だが、ある意味直にぶつけた時の方がマシであろう程に、後ろから来る二人と一匹の視線が痛くて堪らなかった。

「な、何？何が起きて…きゃあっ！！」

突然謎の戦士が現れたと思えば、いきなり間抜けに顔面を強打、しかもそれで強度に自信を持っていたバリアが蜘蛛の巣状にひび割れた。

今の数分で起きた出来事に理解が追いつかないマミだったが、ゲルトルートが理解するのを素直に待つてくれる筈もない。

巻き付けた触手を引っ張り上げて、マミを宙へと放り投げたのだ。そして羽をせわしなく羽ばたかせてマミへと迫る。

と、その頭がベチャリと嫌な音をあげて四方向へと開いた。それを見たマミは、まどか達の状況は理解できなかったというのに、自分の状況は一瞬で理解できてしまった。

――食われる

「マミちゃん！」

真司が姿を変えた戦士はマミのピンチに気づくと、素早く拳をバリアのひび割れの中心へと叩きこんだ。

バリアが派手な音と共に割れ、破片が舞い散る。

ちなみにこのバリア、魔力を込めたバットを軸として発動されていた。

そのためバリアが割れれば当然バットにも影響が及び、

「あゝあ！折れた！？」

さやかのかの叫びの通りバットはへし折れ、ただの木くずとなって地面に撒き散らかってしまった。

さらば1980円のお値打ちバット、君ほどお値段以上の活躍をしたバットは世界中探しても見つからないだろう。

「はっ！」

「ちよっ、真司！後で弁償しなさいよおっ！？」

さやかのかのそれはそれは悲痛な叫びを背中に受けながら、真司は高く戦場へ飛び出した。

「くっ……！」

空中を錐揉みしながら、マミはこんなところで終わってなるものと魔力を使って無理矢理姿勢を制御する。

なんとか体制は整えられたが、ゲルトルートのグロテスクな顎が既

に目の前へと迫り、回避は不可能、迎え撃つしかない。

（間に合って！）

一瞬でマスケットを発現させ、照準を合わせる。

だが焦るゆえか、運が悪かったか、もしくはその両方か。

無情にもマスケットは滑り落ち、軽い音が頭に叩きつけられたように感じた。

力が抜ける、迫りくる圧倒的暴力になす術もなく飲み込まれると、そう思った時、

（あ……………）

ふわりと、誰かが自分を抱えてくれるのを感じた。

誰だと思っ余裕もなく、

ただ随分と久しぶりに感じる暖かさに身を任せる。

一方抱き留めた真司は、

迫りくるゲルトルートへと右足を強く突き出し、

「だりゃあっ！！」

ここまで飛来した勢いを乗せた蹴りを、ゲルトルートの顔面へとぶちかました。

ゲルトルートの全長は真司の二、三倍をゆうに越える。

だというのに、真司が放った蹴りの威力にゲルトルートは身を悶えさせ、無様に地面へとたたき付けられた。

真司はマミを抱き抱えたまま、見事に着地を決める。

衝撃に足元から頭のとっぺんまでジーンとした痺れが走ったが、格好悪いので気合いで堪えた。

「大丈夫？マミちゃん」

「城戸……さん？」

真司に声をかけられ、フリーズしていた思考が溶けていく。

「っ！お、下ろし、下ろして下さい！」

顔を真っ赤にして、そう抗議する。

補足しておくとな真司のマミの抱え方は救出時からずっとこの体制、いわゆる『お姫様だっこ』というやつだ。

花も恥じらう中学生であるマミにとって、鎧越しとはいえないいろんな所が密着するこの抱き方は、異性にしてもらうものとしては刺激が強すぎた。

「え？ああ、ゴメン」

訳の分からないままにマミを地面へと降ろす。

かなり混乱していたマミだが、ここが戦場であることもありすぐに落ち着いていき、まず一つ、なりより大切であろう問いを投げかけた。

「…城戸さん……よね？」

「ああ、……いや、ちょっと違うか」

肯定の後に、不自然に続いた否定。

それに疑問の声をあげるマミへと、

未だ立ち上がらないゲルトルートへと、

そして戦いを見守るまどか達へと、真司は高らかに己のもう一つ名を吠えた。

「俺は龍騎！」

仮面ライダー龍騎！！」

『仮面ライダー龍騎』

全てが狂いし宴の中で、

他者のために戦い続けた龍の戦士が、ついに魔法の世界に参上した瞬間だった。

次回予告

「あーもう、ちょっと待てって」

「ほら、人の親切は素直に受けるもんだぞ？」

第七話 『そのためにライダーになったんだから』

第六話　っしやあ！（後書き）

お待たせしました、

主役ライダー『仮面ライダー龍騎』、ようやく登場！

が、今回は実質変身だけ

ホントは戦闘シーンや本編二話のラストも一気にやる予定だったんですが、

わたしの持病、『話を短くまとめられない病』の弊害がもろに出た結果となりました

ホントにごめんなさい

キーワード変更の真の意味が少しずつ露見してきました

早乙女先生のアレは言うなれば『ブラフ』みたいなものです

これからアレ以上の崩壊を起こす人物がいます

さーて誰のことかなー？（棒）

『更新ペースのわりに文章量多くね？』と思っていた方、鋭いです
実はこの話のプロローグは投稿する大体一月前に書き上がっており、
そこから一ヶ月間投稿することなく続きを書き、

いわゆる『書き溜め』をしていました

大体三話ぐらい書いてからプロローグを投稿、

そこからちまちまと続きを書きながら週一で順番に投稿していき、
必ず次の週の分は書き上がっている状態になるようにしてたんです

ここで残念なお知らせが、

はい、追いつかれました、次の話まだ半分くらいしか書いてません
来週分はいけるかもしれませんが、その次あたりからかなり不定期
になると思います

週一ペースが乱れることになると思いますが、どうか見捨てないで

下さい

それでは、次回も見てね！

第七話 いや、俺がキメる！

「仮面ライダー……龍騎？」

突如飛び出した聞き慣れない単語にマミが思わず小首を傾げる。
まあ当然の反応か、と真司、改め龍騎は後頭部をポリポリと掻いた。

「あー、とりあえず説明は後ですから、今はとにかく魔女を……」

「うわあああっ！」

「「！？」」

いきなり響いたさやか悲鳴に、龍騎とマミが一斉に見上げる。
そこにあつたのは無数の影、影、影。

何十もの使い魔が、バリアが割れて無防備となってしまうたまどか
達へと群がっていた。

「しまった！」

急ぎ、マスケットを目の前に展開して使い魔達に掃射

使い魔達は一気にその数を減らしたが、それを補って有り余る数が殺到する。

当然だ、ここは魔女の結界の最深部、

使い魔などそれこそ掃いて捨てる数が存在するだろう。

彼女達を守ろうにも、ああも多くては近づくことすらできない。

「どうするんですか城戸さん！あなたがバリア壊すから！」

「ゴメン！でも大丈夫、手はある！」

龍騎は叫ぶと左手に装着された龍の手甲に手を当て、額に当たる部分を前にスライドさせた。

それによりガチャリと小気味よい音をたて露出した何かの挿入口へと、

バックルのデッキから引き抜いた龍の描かれたカードを差し込み、スライドさせた額を引き戻す。

< ADVENT >

龍が機械的な見た目通りに、メカニカルな雄叫びをあげた。

「二人ともこのままじゃ危険だ！早く僕と契約を…」

「ちくしょー真司い！後で覚えてろおお！！」

「さ、さやかちゃん……」

「大丈夫よまどか、絶対に守るから！」

迫りくる使い魔達にバットの成れの果てである木屑を投げつけながら、まどかを背中に隠して後ろへと後ずさっていく。

まどかを守るという意思のおかげでパニックには陥っていないものの、

思考は十分に混乱しており、キュウベエの声には全く気づくことがなかった。

そんなさやかを嘲笑うように、使い魔達はじりじりと距離を詰めていく。

「ああああもうっ！神様仏様マミ様！誰でもいいから助けてくださああい！！」

さやかの悲痛な叫びは神や仏はともかくマミにはしっかりと届いていた。

だがマミにも、言葉には含まれていない真司にも、何もすることは出来なかった。

それに応えたのは、

「……オオオ・オ・ン」

「へ？」

「え？」

「！？」

ボンッ、とどこか間抜けな音をたて、一匹の使い魔が地に落ちた。その全身を、真っ赤な炎に包まれて。

「…え、何？今の炎どっから湧いたの？」

「よ、よくわかんないけど、足元から飛び出てきたみたいだよ…？」

「足元って……」

いきなりの謎過ぎる展開に、使い魔たちさえも動きを止めてしまっているなか、さやかは徐々に視線を落としていく。

そこには当然ながら火を起こすようなものは一つもなく、ただ真司が置いていった安っぽい鏡が……

「おおっ！？」

「ど、どうしたのさやかちゃん！？」

かれたことによって。
続いて鏡から飛び出た絶叫の主が、燃え上がっている使い魔の一匹を頭から丸呑みにした。

「な、何なのよ……んど、は……………？」

「さやかちゃん？何？どうし……………って、あああああ！！」

まどかが彼女にしては珍しく大声をあげる。

彼女達を見た。

紅い巨躯を、

金色の眼を、

並んだ牙を、

……その龍を

数いるミラーモンスターの中、それは一度の敗北も知らず、故に付いた二つ名は『無双』

無双龍ドラグレッダー

騎士の力の源である紅龍は、ただ目の前にある使い魔というご馳走を堪能していた

「さ、さやかちゃんこの子だよ！わたしが今朝見たって言った龍！」

「ま、マジで！？ってかむしろあのデカブツを『この子』呼びするあんたにビビるわ！！」

シヨックのあまりか、まどか達が少し間の抜けた会話をしている間にも、ドラグレッダーは使い魔を焼いては喰らうを繰り返す。

食欲旺盛な巨龍にとっては、少女に恐怖をもたらす使い魔の大群も食べ放題の焼肉と大した違いはないらしい。

「ドラグレッダー！まどかちゃん達を頼んだぞ！！」

「ガオオオオオン！」

龍騎の声にドラグレッダーが雄叫び返す。

それは主に対する忠誠の叫びなのか、それとも単に『人が飯食ってる時に騒ぐんじゃねえこの馬鹿！』という文句だったのか。

何にしろ、まどか達の安全は完全に保障されたのだった。

「……………」

啞然、もしくは呆然。

ポカンと口を半開きにした今のマミの様子を表すならば、そのどちらかが相応しかった。

まあ、ただの年上のお兄さんだと思っていた人物がいきなり良く分

からない姿に変身し、
さらにはとんでもないバケモノを使役し始めたのだ。
どんな百戦錬磨の戦士であろうとも、普通混乱する。

「マミちゃん？大丈夫？」

「っ！は、はい！？」

龍騎の呼びかけにようやっと意識を呼び戻した。
少しだけ口から漏れだしていたヨダレをばれないようにさりげなく
袖で拭う。

「な、何ですか城戸さん」

「いやさっきからボーツとしてるから、やっぱり驚かしちゃった
？」

「当然です！ですからちゃんと説明を……」

マミが紡ごうとした言葉は、ごうつ、と巻き起こった突風が彼方
へと吹き飛ばしてしまった。

二人して反射的に風の来た方へと身構えると、
ついに復活を遂げたゲルトルートが羽を強く羽ばたかせ、己の怒り
を撒き散らしていた。

「マミちゃん、さっきも言ったけど、説明は後で絶対にするから！」

龍騎が高く舞い上がるゲルトルートを見上げながら、デッキから新たにカードを引き抜き、炎をバックに剣が描かれたカードを手甲、『ドラグバイザー』へと読み込ませる。

< S W O R D V E N T >

「ガオオオン！」

「うわぁ！？」

電子音といっしょにドラグレッダーの叫びとさやかな短い悲鳴が聞こえると、その方向から、正しく言えばそこに置かれた鏡の中から一振りの剣が飛来する。

龍騎は慣れた手つきでそれをキャッチし、感触を確かめるように剣で軽く空を斬る。

龍の紋章が刻まれた赤い持ち手に、大きな反りが特徴的な銀の刀身のいわゆる青龍刀、

『ドラグセイバー』を改めて構え直し、ゲルトルートを睨みつけた。

「……確かに、今は魔女をどうにかするのが先決ですね」

「出来れば、俺に任せて下がって欲しいんだけど」

「馬鹿言わないで下さい、わたしは魔法少女です、魔女を相手に逃げだすなんてありえません」

「……そっか」

どうにかして説得しようと、ぎこちない頭を回転させようとしたが、
マミがマスケットを召喚しながらふと浮かべた素朴な疑問がそれを遮った。

「城戸さん、あなた空でも飛べるんですか？」

「へ？何だよいきなり？」

「だって……」

マミの視線がすつ、と龍騎の得物へと上がる。

「届くんですか？ソレ」

「え？………あ」

突然ですが、ここでライダークイズSHOWのお時間です。

今日のクイズは算数。

龍騎達の出方を伺っているのか、羽を小さく羽ばたかせ滞空を続けるゲルトルト、彼女の現在の高度はおよそ8メートルほど、

龍騎の身長は190センチ、セイバーを握った手を目一杯伸ばせば多分およそ230センチ、

ここで問題、龍騎の握るドラグセイバーはゲルトルトへと届くでしょうか？

小学生も、幼稚園児でも分かるまさしく愚問。

愚問を比べる大会があれば全国制覇を狙えるであろうレベルの愚問。そんな愚問に答えるのは我等がライダー業界の馬鹿代表こと城戸真司くん。

さてさてその答えはいかに

「と、届かない……………」

はい正解。

賞品はマミとさやかとまどか、あとついでにドラグレッダーからも向けられるもの凄く冷たい視線と微妙な空気。それではまた次回に会いましょう。

この番組はオルフェノクの支配を推進するスマートブレインの提供でお送りしました。

「ひ、卑怯だぞ！下りてこーい！！」

マミの指摘を食らった瞬間に頭を駆け抜けたわけの分からないク

イズ番組を振り払うように、
必死でセイバーを振り回す。

その場は完全に冷めかえていた。

前述の三人＋一匹も、もしかしたらゲルトルートや使い魔達も龍騎
へと冷めきった視線を送っていたかもしれない。

そんな空気だったので、それはとても良く響いた

一人動いている龍騎が何かを踏み潰した、サクツという音は。

「……………へ？」

ゆっくり、ゆっくりと右足を持ち上げていく、

そうして顔を見せたのは真っ赤な薔薇。

美しく咲き誇っていたであろうそれは、今は見るも無残、語るも悲
惨な姿へと変わっていた。

途端に、ぞわりとしたモノが龍騎の鎧の中を這いぬける。

恐る恐る視線をあげた。

そこにいる存在の容姿は別に変わらない。

ただ、それは、ゲルトルートは、一目で分かるほどの怒気をたぎら
せていて。

耳をつんざき、そのまま臓腑をも撒き散らせんとばかりに禍禍しい
叫びをあげると、龍騎へと一気に直進した。

「え！？お、おいそんな素直に来ること……………」

「っ！！」

マミは咄嗟に横へ跳ね飛んで躲すが、ゲルトルートのあまりの勢いに巻き起こった突風に煽られ、地面を二度三度転がった。

「くっ…、城戸さん!!」

すぐに飛び起きて、マスケットを構えながら龍騎の姿を確認する。しかし、ゲルトルートが通過し、龍騎が立っていた位置には誰もいない。

その周囲を見回しても、龍騎の姿を見つけることはできなかった。

「そんな……………」

目の前で人に死なれてしまった、守れなかった。

その事実がマミへと重くのしかかる。

その重さを引き金へとかかる指に無理矢理移動させ、マミはゲルトルートへと視線を向ける。

細かな震えを続ける瞳が、ふらふらと飛ぶゲルトルートを射抜く。

(……………ふらふら?)

ふと、疑問が湧く。

確かにゲルトルートの飛び方はかなり不規則な機動ではあったが、ああも力弱いものだったろうか？

あれではまるで『今現在攻撃を受け続けている』ような……

「す、すごい……………」

「うわ…、よくやるわぁあいつ……………」

ドラグレッダーに守られながら、マミより高いアングルで戦いを見守っていたまどかとさやか何かに気づいたらしい眩きが聞こえる。

それを聞いてすぐ、マミにも妙なモノが見えた。

マール柄であるゲルトルートの胴体に不自然な赤色が一点。

一体なんだと良く目を凝らすと、やがて気づいた。

それが、

「うそ……………」

左手と両足でゲル状の胴体にしがみついた、龍騎その人であるということに。

「へへっ、こうすれば飛んできるとか距離とか、関係ないよな！」

不安定な体制で右腕のみを動かし、セイバーを何度もゲルトルートの巨体へと突き立て、引き裂く。

セイバー本来の攻撃方と掛け離れているうえ、大きさや体制からして虫の一刺し程度の効果しかないように思えるが、ドラグセイバーは鋼鉄を易く切り裂く切れ味を誇り、それを握る龍騎の右腕も岩石を砕く腕力を持つ。そんな攻撃を何度も受ければ、ゲルトルートもさすがに溜まったものではない。

「な、なんてデタラメな……」

龍騎のあまりな戦い方に少し悪態をつきながら、主人の危機に飛びつけた使い魔たちを撃ち落としていく。

下手にゲルトルートを狙えば龍騎に当たる可能性もあるので、そうするしかない。

そんな苛立ちゆえか、数発の弾丸は使い魔を外れ壁に穴を空けた。

「うおつと！」

ゲルトルートが身をよじらせ、龍騎を振り回す。

十分にダメージを与えられたと判断した龍騎は、振り回される勢いのまま迷いなく飛び降りた。

マミを抱えていた時とは違い、今度はちゃんと膝を曲げて衝撃を吸収しながら着地、

セイバーを横へと放り捨てながらすぐさまゲルトルートへと向き直る。

ゲルトルートはまさしく満身創痍と言ったようすで、ゲル状の頭が徐々に崩れ始めていた。

チャンスだ、そう判断した龍騎がデッキからカードを引き抜く。しかし、そのカードが持つ力を感じ取ったのか、ゲルトルートが今まで以上に強く羽を羽ばたかせた。

強風を受け、龍騎の動きが一瞬止まる、ゲルトルートはその隙に羽ばたいた勢いをフルに使ってこの場から逃げ出さそうと高く舞い上がった。だが、

「わたしのこと、忘れないでほしいわね！」

マミが叫び、高らかに指を鳴らす。

すると先の外れ弾が空けた穴から無数の黄色い糸がゲルトルートへと伸びかかると、瞬く間に幾重にも絡み付き、その巨体を拘束した。

「下がってください城戸さん、一発ド派手に……」

「いや！俺がキメる！」

マミが言い切るより早く、龍騎が引き抜いていたカード、デッキと同じ龍の紋章が力強く描かれたカードをバイザーへと読み込ませた。

そのカードは現時点の龍騎最大の力

今まで幾多ものモンスターを打ち砕いてきたまさしく『切り札』

<FINAL VENT>

今までのカードと違い、読み込むと同時にバイザーの双眼が強く煌めいた。

「はあああああ……」

両手を右腰に落とし、一気に前へと突き出す。

両腕を一度引き戻してから、
守りを体言する左腕はバイザーを盾に見立ててバツクル前に、
攻めを体言する右腕は獲物へ飛び掛かる獣のように右上へと大回りに構え、

全身に力をたぎらせながら腰を落としていく。

身体を動かす度に鎧の鳴る小気味よい音と相まって、
それはさながら龍神へと捧げる舞いのよう。

それに呼応し当の龍、ドラグレッダーも咆哮をあげると、
尻尾の刃で最後の使い魔を叩つ斬りながら龍騎の元へと舞い降りて、
その周囲を旋回する。

その光景のもつ不思議な美しさにまどかにさやか、マミまでもが一瞬見とれてしまった。

その一瞬で龍騎は小さく跳んで両足を揃えると、

「はっ!!」

高く、高く、龍と共に空へと跳び上がった。

龍が宙で身体を捻らせる騎士を一回りする度に、龍の力が騎士へと宿るように、その高度を増していく。

やがて最も高い位置へと至り、騎士がゲルトルートへと右足を突き出した体制になると、その背後にて龍が深く息を吸い込んだ。

龍と騎士の力を完全に一つとした人龍一体の一撃

『龍騎士』の名を冠したあらゆるモノを『蹴り』砕く一撃

その名は――

「だああああああああああつっ!!!!」

――『ドラゴンライダーキック』

ドラグレッダーの撃ち出した紅蓮の勢いに乗って、炎弾そのものと化した龍騎がゲルトルートへと猛進し、その身体を蹴りつける、否、蹴り貫く。

一瞬で火だるまとなったゲルトルートは一つ派手な爆発をあげると、光の粒子となって完全に消滅した。

「か、勝ったの？」

「スゴイ……」

「……………」

今のあまりのド派手な光景に、龍騎を除く全員が呆けてしまっている。

そんな彼女たちの意識を呼び起こすように世界が揺れ、やがて境界は消え去り元の廃マンションへと姿を戻した。

「あー、なんかやけに疲れたな、慣れない相手だったからか？」

肩に手を当てて首を回しながら、もう一方の手でバックルからデツキを引き抜く。

すると鏡の割れたような音と共に鎧が離散し、龍騎から元の真司の姿へと戻った。

「まどかちゃん、さやかちゃん、それにマミちゃんも、大丈夫？ ケガとかないか？」

「は、はい、あの、真司さん、コレ……」

「え？ あつ、俺の鏡拾ってくれたのか、ありがとまどかちゃん」

まどかの差し出した鏡を笑いかけながら受け取った。

「あの、ところで、なんですけど」

まどかが真司へと問い掛ける。

その様子は何処かもじもじとしていた

「？、どうかしたの？」

「えと、その鏡って、わたしのとおんなじ……？」

「ああ、まあ同じ店で買ったやつだからね」

「やっぱりそうだったんだ……えへへ」

確かにまどかに渡した鏡と今真司の持つそれは、色それぞれ青とピンクであることを除けばまるっきり同じデザインである。

真司としてはまどかへ返すために買う時、そういえばと思い出してついでに買ったモノなので一切の他意はない。

なのでなんだってまどかが少し嬉しそうにしているのか、さっぱり訳がわからなかった。

「ってうおい！何をラブコメってるかあんたらは！？」

それより他に聞くことがあんでしょうが！

あの変身は？あの龍は？あとバット弁償しなさいよおっ！……」

「美樹さん、少し落ち着きなさい」

マミが呆れながら、真司の襟首をガクガクと揺らし続けるさやかをなだめると、いつの間にか足元に落ちていた黒い何かを拾いあげた。

それに気づいたさやかが真司を放り捨てながら尋ねる。

「あれ？何ですかそれ？」

「『グリーンフシード』、魔女の卵よ、倒された魔女が時折落とすことがあるの」

「た、卵ですか！？」

「それってヤバいんじゃないの！？」

「だからって二人とも俺の背中に隠れんなよ！」

放り出されてからようやく立ち上がった真司を盾にしたのはさやかだったが、密かにまどかまでが後ろへと隠れていたのが軽くショックだった。

「大丈夫だよ、この状態なら孵化することはない、むしろ役に立つぐらいさ」

「役に立つって、目玉焼きにでもすんのかよ？」

「……お腹空いてんの？」

端から見ればふざけた、当人にとっては真面目な言葉にクスリと笑いながら、マミがソウルジェムをグリーンフシードへ近づける。するとソウルジェムから黒いもやが飛び出し、グリーンフシードへと吸収されていった。

「今のは……」

「魔力を使うとソウルジェムにどんどん『穢れ』が溜まっていて、使える魔力も減っていつてしまうの」

「だけど今みたいにグリーンフシードを使えば穢れはグリーンフシードへと移され、ソウルジェムはまた輝きを取り戻すことが出来るのさ」

「……ええ、まったくよく出来たシステムよ」

「……!」

コツン、と地面を忌ま忌ましげに踏みこむ音と共に、抑揚のない声が届く。

一斉にそちらを向けば、そこにいたのは、

「出たわね、転校生…！」

「ほむら、ちゃん…」

「……………」

暁見ほむら、未だその目的も得体も知れぬ少女が、静かに佇んでいた。

「あら暁見ほむらさん、一体なんの用かしら
魔女ならもうわたし達がとくに倒してしまっただけねど」

「ええ、そのようね」

マミの手元にあるグリーンフィードへ目を向けながら、そう呟く。
さりげなくわたし『達』となっていたことに触れなかったが、
ただ気づかなかったのか、それとも何処かで戦いを見ていたのか。
と、マミが指先で弄んでいたグリーンフィードをほむらへと放り投げた。

さやかが驚きを見せるなか、当のマミは友好的な、
見方によれば余裕にも思える笑顔をほむらに向ける。

「それが欲しかったんでしょう？
あと一回分は残ってるはずだから、あなたにあげるわ」

「……いえ、これはあなたの獲物よ、全てあなたのものにすればいい」

だが、ほむらが放った言葉は強い拒否。

「……そう、人と分け合うのは癪ってわけ」
「好きなように受け取ればいいわ」

言いながらグリーンフシードを投げかえす、刺々しい装飾が空気を裂きながらマミへと向かっていき、

「あー！見てらんないなあもう！」

横から伸びた真司の腕に搔っさらわれた。

「え？」

「し、真司さん！？」

「……………！！」

「ちよっ！あんた何やって……………！？」

いきなりすることにマミらが声をあげ、ほむらさえも目を見開いている。

真司はそんな中をグリーンフシードを握り締めてほむらへとズンズン歩いていく。

思わず身構えるほむら。

「逃げんたって、ほらこっちこいこっち」

緊張感など知ったことかと、空気全体を掻き乱すようにほむらへ強く手招きする。

無視するかと思われたほむらだが、以外なことにはぼ流されるようにして一歩近づいた。

真司はそんな彼女の右腕を掴むとしっかりと、

しかし装飾でケガをしないように優しくグリーンフシードを握らせた。

「！、城戸真司、いったなんの……」

「『なんのつもりだ』じゃないっての、他人に気いつかうのはいけどさ、だったらむしろ親切は素直に受けとるもんだぞ？

これ、人生の先輩からのアドバイスだ」

真司がニツと笑いながらそう言う。

ちなみにこれ、大久保編集長からの受け売りそのままだったりする。入社後初めての飲み会で恐縮しまくっている真司に大久保が掛けた言葉だ。

そしてその後真司は酒の力もありホントに全く遠慮をせず、大久

保にブチ切られるというオチがついた。

ほむらの表情がまた崩れる。

驚きと戸惑いの入り混じった、だが先程までのモノより随分と年相応な表情。

しかしほむらはそれをすぐに隠すと、まどかへと一瞬目をやってから、サッと真司達に背を向けた。

「……礼は言わないわ」

「いや言えって」

真司の半ば冗談じみた言い方の言葉を背中に受けながら、ほむらの黒髪は闇へと溶けていった。

「まったく、ホントに蓮だよなあの子」

「おいコラ真司い!!」

「おわ!？」

肩を掴んでぐいと引つ張られ、無理矢理向き直される。

そうして目の前に現れたのはさやかか鼻っ面。

どうにも大層ご立腹な様子だ。

「何を勝手にくれてやってんのよ！あれはママさんでしょうが
あー！！」

「い、いや、だって……」

「いいのよ美樹さん、元はと言えばわたしが差し出したんだから」

「むう、だけどママさん……」

さやかが不満げに唇を尖らせる。

どうやら彼女はほむらのことをあまり好ましく思っていないらしい。
良くも悪くも裏表のない性格であるさやかと徹頭徹尾自分を出そう
としないほむらでは、相性が悪いのも仕方のないことなのかもしれない。

「あの、真司さん、ちょっと思っただんですけど」

「うん？どうかした？」

まどかが遠慮がちに前に出た。

「どうしてさっきのほむらちゃんのことを、『気をつかってる』
って思っただんですか？」

「えっ、そりゃあだって」

問い掛けを受けた側にも関わらず、やけに驚いた様子で真司は返した。

「『そっちの獲物だから全部使え』って、
ようするに『わたしのことは気にせずにごうごう全部使って下さい』
ってことだろ？」

「は？」

「え？」

「……あつ、そっか、そういうことだったんだ」

質問したまどかは納得いったらしく、

『やっぱりほむらちゃんっていい子なのかな』と真司が知るなかで
一番の笑顔をぱあっと浮かべた。

マミは驚いた表情のまま固まっている。

そしてさやかは今更ながら思う。

この男はよく言えばとんでもないお人よしであり、悪く言えば……

「馬鹿、なんだろうなあ……」

「え？さやかちゃん今なんか言った？」

「いーや別にいい？」

白々しくそつぽを向くさやか、その心中は随分と穏やかだ。
緊迫していた空気も、気がつけばすっかり和みきつたものになって
いた。

、そんな中でキュウベえの真っ赤な目だけが、強く爛々と輝き続け
ていた。

↓次回予告↓

「今の話と今日の戦いで分かってくれたと思うけど、戦うってい
うのはそういうものなんだ」

「まどかちゃん達みたい女の子がそんなことすることない
無論、マミちゃんだってね」

第八話（今度こそ）『そのためにライダーになっただから』

第七話 いや、俺がキメる！（後書き）

龍騎初戦闘終了

正直に、対巨大生物戦の書きにくさを舐めていました
シチュエーションは考えやすいんですが、如何せん地味になってしまった気がします

ファイズの不良殺法、カブトのカウンター戦法など、平成ライダーには様々な戦闘スタイルがありますが、
真司の場合は『強い行動力からくる思い切りのよい戦い方』がそうだと考え、戦闘描写は出来るだけそれを意識しました
満足していただけていれば幸いです

蓮が龍騎本編にて、

多くを救うためなら家族だって犠牲にするのが英雄だという東條に
言い放った言葉、

『本当に大切なものがあるなら、どんな犠牲を払ってでもそいつを
護ればいい』

口下手でツンデレ気質なところとかもそうですが、この考え方が一番ほむらと蓮の強い共通点だと思っています

また出ました、わたしの『話が無駄に長くなる病』

ホントはちゃんと前回の予告通りのサブタイまで行きたかったんですが、そうするといつももの倍近い長さになりそうだったので、ちょうどいいところで一度切りました

書き溜めキレて早くも計画性の無さが露見してきましたが、応援よろしく願います

では、次回も見てね！

補足説明 + （前書き）

ようやく龍騎が登場したことに伴い、おそらく本編で詳しく説明しないであろう細かい設定を、

13ライダー全員分やろうとして挫折した魔女図鑑風の龍騎とドラグレッダーの紹介、よく分からない小ネタと合わせて説明したいと思います

『あれ？このことの説明はないの？』とか、

『こういうお題で小ネタやって欲しいんだけど』などということがあればどしどしご意見お寄せ下さい

それに合わせ、随時この節に追加させていただきます

あと『俺も魔女図鑑風のヤツ考えたよ！』というのも、お待ちしております

補足説明 +

仮面ライダー 龍騎

その性質は『迷い』

他者の強き願いに翻弄されながら、本当の自分を探し続ける
その迷いは果てしないが、故に一度迷いを捨てればまさしく無双の
力を発揮する

・デッキ内容は完全に原作通り、増えたカードも抜けたカードもない

・基本的に戦場が現実世界なため、活動限界時間はなし

・ミラーワールドと現実世界間の移動能力は健在

原作第二話で入ったところからしか出られなかったのは未契約状態
だったからであり、

契約後はミラーモンスターの力を得ているため可能になると解釈
よって今は何処からでも現実世界に戻れる

・ちなみにライドシューターはない

・細かいスペック（キック力、各APなど）は深く考えないこと

ドラグレッダー

その役割は『火炎』

吐き出す火炎球は無双龍の異名に違わない威力を誇る

一番食べたいものは昔から今までで変わることなく『契約者』

・龍騎とは逆に現実世界及び結界で活動限界があり、『アドベント』を用いた際に援護してくれるのは大体10分ほど

それを越えると粒子化が始まり、さらに5分ほど経過すると消滅する

・契約は原作通りの形で履行され続けており、

デッキ、もしくは契約のカードが破損した場合は容赦なく真司を食らいつくす

・だが、オーデインから彼の力の大部分を与えられたことで、命を求める本能がかなり抑えられており

また、オーデインに『人間以外の生物も命を持っている』ことを教えられたので空腹は鳥などを捕食することで自分で解消できるため、『餌を与えなかったことでの契約不履行』は実質有り得なくなつた

・魔女はともかく、使い魔は魔女から分離した存在なので命は持っていない

それでも食べるのは単にドラグレッダーの食い意地が張ってるだけ

・ちなみに真司に懐いていない訳でもなく、彼のピンチにはカード無しでも駆け付けてくれる……かもしれない

つまり、忠誠心とかではなくあくまで動物的な懐き方だということ

おまけ

真司

「あれ？マミちゃん何やってんの？」

マミ

「宿題ですよ、学生としては一応こつちが本分ですから」

真司

「宿題か、懐かしいなあ……
今やってるのは数学？」

マミ

「はい、もう三年生ですから、やっぱり難しいんですね」

真司

「そうか……、よし、俺が教えてあげるよ」

マミ

「えっ、大丈夫なんですか？
うちの数学けっこうレベル高いって有名ですよ？」

真司

「大丈夫だって！俺ちゃんと大学出てるんだから！」

マミ

「そうですか？だったら、ここなんですけど」

真司

「よーしどれどれ……」

~~~~~数分後~~~~~

マミ

「……それで、ここでこの公式を使っんです」

真司

「ふんふん……あーホントだ、なるほどこうやんのか  
いやあさすがマミちゃんだよ、説明が凄いい分かりやすい」

マミ

「そ、そんなことはありませんよ、城戸さんの元が良いから……」

真司

「いやいや、謙遜することなんて……アレ？」

マミ

「どうかしましたか？」

真司

「いや、なんかおかしい気が……  
まっ、いいか、いいよな！」

- 完! -



## 第八話 そのためにライダーになったんだから

見事魔女を打ち倒した真司たち一行は気絶していた女性を介抱した後、先日と同じようにマミの家へとやって来ていた。着いたと同時に始まったのは真司に対する質問攻め。

矢継ぎ早に繰り出される問いに真司はなんとか対応していき、今ようやく一段落ついたところだ。

「つまり要約すると……」

マミが用意した紅茶を一口啜ってから続ける。

「城戸さんはこことは違う世界の住人で、あの変身もドラゴンもその世界のモノ……ってことでいいのかしら？」

「そうそう、そういうこと」

「……しょーじき信じにくいわね、それだったら真司も魔法少女だっていう方がまだ説得力あるわ」

話を聞くのに集中してまったく減ってない紅茶を前に、さやかは訝しげな視線を真司に向ける。  
その視線をキュウベえが遮った。



「それはないよ、あの力からはまったく魔力を感じなかったし、真司と契約した覚えも僕にはないからね」

「いやそれ以前に俺男だから、少女じゃないからな」

分かってるってー、と手を振って返しながら、さやかはようやく半ば存在を忘れていた紅茶を口にする。

「でも格好良かったよね、あの変身！っていうの」

「まあそこは確かにそうかも、なんかまさしく正義の味方ーって感じでさ」

まどかが少しうつとりした様子で言うと、さやかもそれに乗って――

「…違うよ」

「……へ？」

ピシヤリと、真司の声が降り落ちた。

声は小さかった、にも関わらず深く鼓膜へと突き刺さり、心の奥底まで響かせる。

「そんなんじゃないんだよ、これは」

声はあまりに冷たく、空気もなにもかも、その場にいた全てが、一瞬で凍りついてその動きを止めた。

「今から話すのは、スゴイ難しい話、でもそれ以上に大切な話だから、しっかりと聞いてくれ」

言いながらデッキを机へと放り置く。

全員の視線がそれに集まったので、真司が次の言葉を放った時の表情は、誰も知ることはない。

「それは……殺し合いの道具だったんだ」

何処かで、鏡の割れる音がした。

十二人の男たち 一人の悪人  
仲間に喰われて 十一人が残った

十一人の男たち 一人の遊び人  
遊びが過ぎて 十人が残った

十人の男たち 一人の嘘つき  
嘘をホントにして 九人が残った

九人の男たち 一人の復讐者  
目的以外が見えなくて 八人が残った

八人の男たち 一人の先生  
教えが伝わらなくて 七人が残った

七人の男たち 一人の自分勝手  
幸せ掴めず 六人が残った

六人の男たち 一人の英雄モドキ  
英雄になれて 五人が残った

五人の男たち 一人の強欲  
約束果たせず 四人が残った

四人の男たち 一人の狂人  
苛立ち狂って 三人が残った

三人の男たち 一人のお人よし  
答えを見つけて 二人が残った

二人の男たち 一人の最強  
幕を下ろされ 一人が残った

たった一人の男 愛する者へと命を運び 代わりに自分は冷たく  
なった

……そして誰もいなくなった

「……これで、おしまい」

「……………」

願いを求めた戦士たちの戦い

その戦いの真の目的

そして、戦士たちの最期

誰も、何も言えなかった。

当然だろう。

その話は未だ幼さの抜けきらない少女たちが全てを受け止めるには、あまりに重すぎた。

「ちょ、ちょっと待つてよ、なんか、よくわかんないんだけど」

米噛みを押さえながら、さやかが呻く。

話の内容が濃すぎたため、脳のキャパシティを越えたらしい。

「え、えーっと？まず真司の世界で願いを叶えるための戦いがあ

って、

それに真司も参加してて、それで……」

ひりつく喉を癒そうと、目の前の紅茶の存在も忘れ一度唾を飲み込む。

それでも痛みは消えることがなく、そのまま言葉を紡いだ。

「最後には、みんな死んじゃったってわけ……！？」

「……ああ、そうだ」

真司が静かに頷いた。

「で、でも死んじゃったんだったら、今ここにいる真司さんは……」

「それは…実は俺もあんまりよく理解できてないんだ聞いたところによると、戦いが終わった後、本当の意味でその戦いが『なかったこと』になったらしくてそれで全部が元通りになったらしいんだけど……」

真司はふと窓へ目を向けた、瞳に映ったのは部屋側のガラスに止まった一匹の羽虫。

部屋の中は確かにとても暖かく、居心地は悪いものでは決してない。だが、羽虫は自分で窓を開くことができない。

外の世界へと戻ることは、二度とできない。

「…その元通りの世界から、俺だけ弾き出されちゃったんだよ理由はよくわかんないんだけど、さ」

真司が微笑を浮かべた。

いつもの屈託のない笑顔とは対照的な、濃く影の差した微笑。

「それで、ホントは消滅する筈だったんだけど、さっき話したなかにいた最強のヤツが……なんでか助けてくれてそれでこの世界に送られたってわけ」

オーデインの最後の行動、真司は未だその理由に納得のいく答えをだせていなかった。

実際には彼の人間らしさが垣間見えた結果なのだが、ライダーとしての冷徹なオーデインしか知らない真司にとっては仕方のないことだった。

真司の独白が終わっても、部屋には依然と沈黙が漂い続ける。

「あーえっと、それで何が言いたいかって言うところ……」

沈み込んできた空気と、なりより自分の頭を盛り返そうと、強引ながら明るい声を出そうと努めて。

「…………ぐす」

だが、静まり返った空気を揺らす微かな泣き声に、そんな気遣いやら何やらが何処かに飛んでいってしまった。

「か、鹿目さん……？」

「う…うう…ひっく……………」

「えっ…………ええっ!？」

鼻や耳まで真っ赤にし、まどかがぼろぼろと涙を零しつつける。確かに重くショッキングな内容である自覚はあった真司だったが、まさか泣き出すとは思ってもいなかったため慌てふためいてしまった。

マミもどうやら真司と同じ心境なようで、どうしたものかとオロオロしている。

「大丈夫まどか？ほらコレ使いな」

「うん…………ありがと……………」

さやかから受けとったハンカチも力無く震える手の中にあつてはその役目を果たせず、涙は絶えず溢れ続ける。

「ど、どうしたんだよまどかちゃん？もしかしてさっきの戦いでケガでも……」

「だ、だって……だって……」

わたわたとする真司へと、まどかは丁寧語を忘れるほどの感情を言葉共に発露していく。

「叶えたい、譲れない願い事があつて……でも……そのためだから……」

震えた、だが、暖かい何かを感じさせる声

「他の誰かを殺して……自分まで……死んじやって……  
…真司さんは、自分の世界からまで……追い出されちゃって……わかんない……わかんないよお……」

「…まどか、ちゃん……」

どうにも、真司は鹿目まどかという少女に対しかなり不当な評価をしていたらしい。



心の優しい少女なのだとは思っていた、誰かのために、自身を投げ出せる少女なのだと。

だが、それだけではなかったのだ。

自分が知るわけもない男たちが戦い、死んでいったことにも心を痛め、

その理解しがたい、理解を放棄したくなるような動機を、心から必死に理解しようとして涙を流す。

他人ことを思いやれるということの、ある意味での究極形と言えるのかもしれない。

「……………良いんだよ、それで」

「ふえ……………」

俯いて泣き続けるまどかの頭にぽんと手を乗せ、そのまま三三度撫でる。

ちょうど父親が子供をあやすようなリズムで。

彼女の優しさを知ったからこそ、なお強く、自分が彼女と同じ思いから見つけた願いが脈打った。

彼女たちには戦いなんてものとは無縁な、平穏な世界を生きて欲しい、と。

「今の話と今日の戦いで分かってくれたと思うけど、戦うつてい  
うのはそういうものなんだ

自分を、ともすれば他の誰かも傷つけてしまう」

まどかから手を離し、部屋にいる全員を一人一人しっかりと見渡す。

「だから、まどかちゃん達みたい女の子がそんなものすることなんてないんだ  
もちろん、マミちゃんだってね」

しゃべり通しで渴いてきた口を紅茶で潤す。  
すでに温くなってしまっているものの、その暖かさが心地よかった。

「でも、さ……」

と、まどかにハンカチを渡してからずっと俯いていたさやかが視線を上げた。  
まっすぐに投げ掛けられるその視線と言葉を、同じく正面から受け止める。

「もし、わたし達にもあんたの世界にいた人たちみたいに、絶対に叶えたい『願い』があったとしても……、  
それでもあんたは戦うなって言うの？ 諦めろって、そう言うの？」

責めるような、今までで一番真剣味のこもった口調。

それに真司は、

「……なんだ、そんなことか」

「は、はあ!？」

ひどく、あっけらかんとして返した。

「そんなことって…、んなわけないでしょう!？あんた一体何聞  
いてて……!」

「いいや、間違いなく『そんなこと』だって」

激昂するさやかに、真司はさっきまでの深刻そうな様子は何処へ  
やら、軽い口調と軽い笑顔で、

「さやかちゃん達は願いを叶えればいい、だけど戦いは俺が引き  
受ける、たったそれだけのことだろ？」

彼女達の信じ難いことを、やはり軽く言っただけのけたのだった。

全員が面食らっている、絶句とはまさしくこのこと。

そんな中でキュウベえだけが変わらない表情で、真司の目の前へと  
飛び降りた。

「いやいや、さすがにそれは困るよ  
僕側のメリットが全くないじゃないか」

「えー別にいいだろ？どっちにしろ魔女は倒せるんだし」  
「……というより、矛盾してないかい？」

キユウベえが真っ赤な目を光らせる。

「戦うことがどういうものか、さっき君自身が言っていたじゃないか  
その後すぐにそうも軽い事を言ったら、どうにも説得力つてものを感じられないよ」

「別に、軽く言っただけじゃないって  
ただ、俺は一応これでも大人で男だし、それに……」

真司がポリポリと頬を掻く。

軽薄なわけではない。

ただ『当然のことだ』という本気の意味があるからそう聞こえるだけのこと。

自身に降りかかる痛みも、纏わり付く悩みも、それらの全てを引ってくるめてなお真司はこの思いを当然のことと断する。  
何故ならば――

「――俺は、そのためにライダーになったんだから」

ミラーワールドのライダーは己の『願い』のために戦う戦士である。

故にその願いがぶれることはない、もしぶれる時が来るとすればそれはライダーでなくなる時だ。

真司、仮面ライダー龍騎もそれは変わらない。

たとえ覚悟が揺れようと、その願いだけはぶれはしない。

「まあそんな訳だから、これからの魔女退治は俺に任せて……」

「……一つ」

「え？」

スッ、と、今まで黙り通しだったマミが一本指を立てた。  
必然的にそこへと視線が集まる。

「魔女を倒すにはそもそも魔女を見つけないことには始まりません  
そしてそれにはソウルジェムが不可欠……」

二つ、と続けながらさらに指を立てる。

「探しだせたとしても、こちらから結界へ赴くには魔法少女の力が必要

そして三つ」

立てた三本の指を顎へと当てて、マミが薄く、柔らかい笑みをつくる。

「わたしは魔法少女の運命を知ったその日から、人を救うために生きると思ったんです  
だから申し訳ないけれど、その申し出は聞けません」

「ごめんなさいね、と笑顔のまま小首をかしげる。  
その瞳が映すものは、真司には窺い知れなかった。

気がつけば、辺りはすっかり暗くなっていた。

星々は街頭に照らされ姿を隠し、空に浮かんでいるのはその身を大きく削がれた月だけ。

それもあの様子では一週間ほどで新月となりそうだ。

そんな殺風景な空の下を、まどかとさやか、それに真司が歩いている。

マミがやんわりと突き付けてきた覚悟と拒絶、真司はその後もマミを説得しようと試みたのだが、

話は何の進展も見せることなく平行線をつ走り、ただ時間だけを消費した結果が今のこの暗さだ。

仕方なく『今後は二人で魔女を倒していく』ということとで一端話

を落ち着かせ、今日はお開きということになったのだが、

『こんな夜道を女の子だけで帰らせるなんて言語道断、城戸さん、送っていつてあげてください』

『ああ、もとよりそのつまりだよ』

『……送り狼か』

『おいさやかちゃん今ボソツと何言った』

『？、送り狼って？』

『ああそれは』よし！二人ともこれ以上暗くならないうちに早く帰ろうな！』

といったやり取りを経て、真司が二人を送っていくことになったのだ。

さて、そんなこんなで夜道を歩く三人であったが、先の話の重さがまだ尾を引いているのか、誰かがぼつりと喋ることはあっても、会話として長続きすることはなかった。

この重苦しい沈黙をなんとかしようと考えあぐねている真司。その袖がついつい、と引っ張られた。

「あの…今日は、ごめんなさい」

「へ？なんだよまどかちゃん、急にどうした？」

袖を引っ張っていた犯人、まどかへと意識を向ける。

「だって、その、急に泣き出したりして、迷惑、かけちゃったから」

「あ、いや別に気にしてないからさ、大丈夫だって」

言って、先の時と同じように頭へと手を置いてやる。

ただ違うのは、今度は少し激しめに、くしゃくしゃと撫でていること。

「ん……………」

髪が少し乱れるが、それでもまどかは成されるがままで、ただ目を細めるだけだ。

「……………そろそろさやかちゃんの暴言が来る頃だな」

「あんた今まで自覚してやってたの？」

なにか悟ったような事を言う真司に、さやかはまどかのモノとは



違った風に細めた目を向けた。  
だがそれだけで、コレといった罵詈雑言が飛び出す訳でもなく、ただ一度小さく息を吐き、

「……わたしも、ごめんね」

彼女からはあまり聞くことの出来ない小さめの声。

「えっ？、さやかちゃんから謝られる覚えは本気でないんだけど」

「いや、さ、ほら会ってすぐの頃はストーカーだなんだって言うてたじゃん？」

気恥ずかしそうに少し視線を逸らしながらさやかは続ける。

「あの時はただの危ない馬鹿なんだと思ってただけど、昨日今日と一緒に過ごして、戦ってる真司を見て、わたし思い直したんだ」

「へえ……どんな風に？」

ずっと馬鹿にされているだけだと思っていたので意外に思い、興味津々で問い掛けると、さやかはそれを受けて、

「うん、やっぱり馬鹿なんだなーって」

「っておい！？思い直したって『改めて』ってことか！？」

「ただあーし！」

ピツ、とさやか是指を高く上げる。

そしてその指を真司へと突き付けながら。

「結構カツコイイ馬鹿、みたいだけどねっ！」

明かりの少ない夜闇を照らすような明るい声を、満面の笑みと一緒に輝かせた。

そんなものを不意打ちで食らえば、平常でいられる男子などいるはずもなく。

「そ、そっか、いや、始めからそういう態度だったら言うことなかったんだけどなあ」

「おやー？真司くん、顔が赤くなってるのはわたしの見間違いかなー？」

「そ、そ、そうだよ、見間違い見間違い、ありえないだろそんなの」

「ふふーん、いやはや愛いやつよなー」

「だから違うって!!」

耳まで、とは言わないまでも、一目でそうだと分かるほどに真っ赤になった真司と、それをニヤニヤとしながらおちよく倒すさやか。

そんな二人を眺めるまどかは、ただただ苦笑いを漏らすことしか出来なかった。

「いやー笑った笑ったあ!」

「もう、さやかちゃんったら年上の人にあんなことして……」

「だって真司だし?何て言うか、一目見た時から『あ、大丈夫だ!』って思ったのよ」

「大丈夫って…、まあわたしも『優しそうな人だなあ』とは思っただけ」

「そうそう、なんかそういう人の気を緩ませるオーラ持ってるのよねーあいつ」

まどかとさやかが談笑しながら夜を歩く。  
そこに真司の姿はない。

それと言つのも、先のやり取りからすぐのこと、そろそろ家が近くなってきたという理由でさやかが帰らせたのだ。

それでも危ないからと付いて来ようとした真司だったが、

『え？何？住所調べようとしてんの？マジのストーカーなの？』と罵らんばかりの視線を浴びせられれば、退散する他なかった。

「ところでさーまどか、あんたって本気で真司のこと好きだったりすんの？」

「ふええっ！！？な、な、何言い出すのかな急に！？」

「いやそこまで急でもないでしょ？」

初心100%なまどかの反応に呆れながらも、さやかは心底楽しそくに、見方によればオッサンぽくも見える動作でまどかへと迫っていく。

「ほれほれお嬢ちゃん、わたしにだけこっそり教えてみなっ」

「さ、さやかちゃん、動きがなんか怖い……」

手をワキワキとさせるさやかに若干怯えつつも、これは答えるまで引き下がらないだろうなー、と判断して言葉を探す。

「……確かに、真司さんってかっこいいし優しいし、素敵な人だ

なっと思つよ」

「ほう……これは……」

「で、でもね！」

完全に勘違いしにかかっているさやかへの牽制として声を上げながら、まどかは続ける。

「その、お付き合いしたいのかって言われると、なんだか違って……」

えーっと、その、お兄ちゃんみたいって感じ、かな？」

「あーそれ何となく分かる、確かにあんなのが兄妹でいたら楽しそうで良いわよね」

さやかが頷き、まどかが笑う。  
一時流れる明るい空気、だが、

「……そんな真司さんが、戦ってるんだよね」

それははたと、明る過ぎる街灯に照らされて浮き出すようにして、影が射しこむ。

「……うん、マミさんもだけど、もしかしたら真司はそれ以上に  
凄いのかもね  
だって普通言えるわけないよ、全部の戦いを引き受けるだなんて  
それも含って間もないわたし達のためなんかにさ」

「……………」

真司の経験した戦いを聞いて、まどかは怖くて堪らなかった。  
それは願いのための殺し合い自体に対してでもある、理解できない  
ものは、えてして恐怖へと変わるから。  
だがそれ以上に、まどかが何よりも怖かったのは、

「……死んじゃうかも、しれないんだよね、真司さんも、マミさ  
んも」

「そういうもんみたいだからね、戦うってというのは  
それに、真司に至っては……」

もう、既に一度死んでいる。

くだらない冗談だと笑い飛ばしたくなる。

だが、あの時の真司の表情がそれを許さない。

心へと直に思い知らされた、戦うということの意味を。

真司の戦ってきたという過去、戦っているという今。

その二つを前にして、まどかが思うのことは――

「……契約して、戦うつもり？」

「っ！」

見透かされた心に、顔を振り上げればさやかの視線。  
ぶつかったまま固まるまどかへと、さやかが微笑みかける。

「わかるわよ、何年親友やってると思ってるの？」

まどかが悩んでる時の表情も、こういう時にどんなことを考えるの  
かっていうのも、わたしにはよく分かってるんだから」

「さやかちゃん……」

「あんたはやっぱ優しいね、でも真司はきつと怒るわよ？  
あいつもあんたと同じぐらい優しいんだから」

「…うん、でも、わたしは……」

それは自分にも分かっている。

真司のあの申し出は、自分達に戦いの苦しみを味わさせないための  
もの。

だがまどかにとっては、真司やママがその苦しみの中にいるという  
ことが、自分がそれを受ける以上に辛く、苦しく、悲しい。

だから、こんな何もない自分でも、二人を支えることが、多くの人  
を助けることが出来ののだとしたら。

それはとても嬉しいことだと、そう思えてしまうから。

「……はあ、どうしてこうもわたしの周りにはお人よしが多いかな」

「さやかちゃん？」

さやかが呆れたような、それでいてどこか嬉しそうな表情を浮かべる。

「まっ、どうせだからわたしもそのお人よしの中に入れて貰おうかな？」

「えっ？それって……」

「うん、契約した時はわたしもいつしよに戦うよ  
まどかやみんなが戦ってるのに、わたしだけ願い叶えてもらってハ  
イさようならじゃ格好つかないしね」

さやかの言葉に、今までまどかの表情に見えていた影がうつすらと薄くなる。

それに釣られ、さやかも照れ臭そうながら笑顔を見せた。

そこには打算も計算も一切ない。

純粹で暖かな二人の少女の友情だけが、そこにあった。



広いリビングにて一人、マミが紅茶を煎れている。

まどか達は帰り、真司はいまだ戻らない。

一人分の紅茶を煎れるのは三日振りではないが、何故かずいぶんと久しく思えていた。

「マミ、ちょっといいかな？」

紅茶を煎れ終わり、さて一息というところで、やけに低いアングルから声を掛けられる。

その方向と声は両方とも慣れきっており、目を向けることもなく返事を返す。

「あらキュウベえ、てつきり鹿目さん達に付いて行っと思ったのだけど」

「ああ行くさ、だがその前に君に話しておきたいことがあってね」

「そう、紅茶がもう一杯必要かしら」

「いや結構、すぐに済むさ」

言いながら、キュウベえはマミの正面へと移動して、真っ赤な視線で彼女を見据える。

赤という色は人の心を掻き乱す作用を、少なからず持っているらしい。

キュウベえが持つ二つの輝きも例に漏れず、不安を抱かせる何かを放っている。

それでも、マミはそれをただ受け止めるだけ。

「城戸真司、というより彼の変身する龍騎とやらのことなんだけど」

「あれがどうかしたの？あなたあれには一切の魔力反応が無いって言ってたじゃない  
それはとどのつまりただの兵器だということ、何を気にすることがあるのかしら？」

「確かに龍騎自体は問題ない、だが彼の使役していた巨龍は別さ」

巨龍……ドラグレッダーだったか？

マミが心底くだらなさそうな話だと停止させかけていた頭を動かし始める。

「あの巨龍からは、どちらかと言えば魔女に近いモノを感じた  
具体的な正体はわからないけど、警戒しておくに越したことはない  
と思うよ」

無論、それを使役する城戸真司自身もね」

「……なるほどね」

マミが紅茶を煎れたカップを手にとり、

そして、中にある赤い色へと視線を落とす。

「忠告は感謝するわ、でもわたしには城戸さんが魔女に属しているようにとはとても思えないの」

「……そうかい、まあ君がそう言うなら僕は何も言わないさそれに、彼がお人よしであることは僕も同意せざるをえないよ」

「ふふっ、本当にね  
まあだからこそ……」

口元だけに笑みを浮かべて

「……けっして、相容れることはないのでしょうか」

その笑みの意味を、今は誰も知らない。

想いは連鎖する

優しさが優しさが呼び、二人の少女の絶望への一步を後押ししたように

だが、この連鎖の複雑なことに同じ繰り返しとは限らない

龍騎士の優しさ、それに連鎖するは銃士の――

次回予告

「ねえ、不思議には思わなかったの？」

「どうしてわたしが、彼女達の契約を一度たりとも止めようとしなかったのか」

第九話 『あなたにはわからない』

## 第八話 そのためにライダーになったんだから（後書き）

途中に挟んだよく分からない回想

あれの元ネタはアガサ・クリステイの『そして誰もいなくなった』

で有名な童謡、『十人のインディアン』です

別に大した意味はなく、単にわたしがやりたかったただけなので、あんまり気にしないで下さい

今回は前回の戦闘描写以上に難産だった気がします

それというのも、まどか達のライダーバトルを聞いての反応を考えるのが……

今後の展開も踏まえてこんな感じになりましたが、皆様納得していただけたでしょうか？

次回、『ぶっ飛びます』、色々

若干が完全に抜けたキャラ崩壊

明後日の方向に吹っ飛んだ独自解釈

溢れ出る厨二病、高二病

下手しなくともドン引きモノです、お気をつけください

ライダー×魔法少女は、三部構成で話を考えてます

まどか本編で言うと、

第一部『1～3話』

第二部『4～9話』

第三部『10～12話』

と言った感じで

つまり、今はまどか本編での2話が終わったところですので、第一部は既にラストパートなのです  
どうか最後までお付き合い下さい

では、次回も見てね！

## 第九話 激しいのは好みじゃないの

イギリスはロンドン、その夜の町並みのように薄暗く、所々に立てられた街頭から漏れる弱々しい光だけが照らす空間で

「ティロ・ステルミニオ!!」

空中に並べられた無数の銃口から、やはり無数の光弾が放たれる。全ての光弾は闇が形作った黒猫へと殺到し、その存在を消滅させた。

「やった!」

「いやーやっぱりマミさんの強さは泣けるねえ!」

「もう、見世物じゃないのよ?」

まどかとさやかは黄色い声にマミは非難めいた台詞を返すも、ちやっかりと小さくながら手を振ったりなど、満更でもない様子。

「……はあ、もうちょっと危機感とかそついうの持てよな」

そんな彼女達、得にギャラリー二人を見ながら、真司の変身する龍騎は首元を人差し指で強めに引っ掻いた。

鎧越しのため全く意味はないのだが、そうせずにはいらなかった。

真司としては体験ツアーは初日で打ち切るつもりであったし、あの話までしたのだからまどか達も当然引き下がるものだと思っていた。だが、事態は彼の思い描いていたものとは全く逆の方向へと進んでしまう。

あちらから頼み込んできたのだ、『これからも戦いに付き添わせてほしい』と。

言うまでもなく真司は猛反対、だが彼女らは決して折れようとはせず、またマミからの強い説得を受けたこともあり、しぶしぶながら同伴を認めたのだった。

「あ、結界が消えてく……」

「結界も作ってるヤツも気持ち悪いくせにこの瞬間は圧巻なのよねー  
わりと嫌いじゃないわ」

二人の言葉に空を見上げる。

空というところ少し違いかもしれないが、とにかく結界が上から円状に崩れ始めていた。

崩壊したそれが粒子となって降り注ぎ、ぽっかりと開いた先に見える星々は勝利を祝福しているのかもしれないが、

今回はマミの独壇場だったこともあって、あまりそういう気分には

……



「危ない！」

「へ？」

間抜けな声が上がったと思えば、それは自分のもので、次の瞬間には何かに押し倒されて尻餅をついていた。  
押し倒してきた何かはマミ、突然のことに彼女への抗議のため顔を上げようとして――

「っ！！？」

――響く、爆音

出所は正面、すなわち今し方自分の立っていた場所。  
そして、その犯人は、

「ほ、星が…降ってきたあ！？」

どうやら、星々が祝おうとしていたのは龍騎らの勝利ではなく、死であつたらしい。

動揺が広がる中、開いた穴は光一つない闇へと変わり、そこから結界全てが黒く塗り潰される。

弾け飛ぶ街頭、立ち込める暗雲。

空間全てが完全に闇一色に染まった時、『ソレ』は現れた。

天涯に穿たれた闇の穴から降りてきたソレは、闇以上に黒い暗黒。

その姿を絵としたいならば簡単だ。

画用紙に思うがままに絵を書いて、最後に黒のクレヨンでその全てをぐしゃぐしゃに否定すればいい。

ただそれだけで、その存在は完成する。

暗闇の魔女『ズライカ』

その性質は妄想

彼女にとっては虚構こそが真実であり、全ての真実は虚構となる

「使い魔に時間を掛けすぎたわね……城戸さん、大丈夫でした？」

「あ、ああ、助かったよ、ありがとう」

「無事ならよかったです」

真司の礼への返事もおさなりに、自分の手中にマスケットを召喚して改めて臨戦体制へと入る。

真司もそれに倣ってデッキからカードを引き抜き、バイザーへと読み込ませた。

< S W O R D   V E N T >

音声と同時に、龍騎のちょうど心臓辺りからドラグセイバーの柄が生えてきて、龍騎はそれを躊躇なく引き抜き構える。

これだけ聞けば魂から剣を生成したのかとも思えてしまいそうだが、そんな大層なわけもない。

ただ首から掛けている鏡からセイバーを召喚しただけのことだ。

ちなみにその鏡はマミの魔法によって強化されており、並大抵の攻撃では壊り出した側がダメージを受ける程の強度を誇る。

強化に伴い見た目も随分とマジカルなものに変わっているが、それに気づいたまどかが少し寂しげな表情だったのは、きっと気のせいだろう。

自分に向けられる殺気を感じとったのか、ズライカの様子に変化が現れた。

ぽんっ、と間抜けな音が二つ鳴り響いたと思うと、ズライカの、生物に当て嵌めるなら背中当たる部分の闇が二カ所弾ける。

弾けて飛び出すは、一対の巨大な蝙蝠の翼。

ズライカは翼を一度はためかせ、羽を除いた全身から先と同じように星々を乱れ撃ちながら龍騎達へと滑空していく。

直撃してしまえばどうなるか分からない勢いだ、その動きはあまりにも真っすぐすぎた。

「そんな単調な攻撃、当たってあげるわけが……」

「よっしゃいいー!」

「え」

サイドステップで華麗にかわすマミとは対照的に、

龍騎はセイバーを左手に持ち直すとカードを一枚を読み込ませ、  
龍の勇ましい胴を模した盾、『ドラグシールド』を右手に召喚、腰  
を落としてどっしりと構える。

マミにはギョツとされてしまうが、一応狙いはあった。

以前のゲルトルトとの戦いのように、飛行している相手には張り  
付いての攻撃が一番だと考えたのだ。

――だが、実のところ前回のアレは『完全な偶然』だったりする

なんかぶつかった時いい感じにセイバーが相手の身体に突き刺さっ  
ただけなのだ。

そんな偶然を根拠に、ぶつかった時の衝撃にそもそも耐え切れるの  
かということは完全に度外視して行動を選択しているのだから、考  
え無しの方が随分とマシなことだろう。

降り注ぐ星々をシールドで防ぎ、いよいよもってぶつかり来る巨体  
に龍騎はセイバーをまっすぐに突き立てる。

セイバーが突き刺されば後は簡単だ、前のようにそこを軸にして相  
手に引っ付いてやればいい。

こちらへと突っ込んでくる勢いも利用すれば、セイバーは軸にする  
のに十分な固定をされるのを龍騎は先の戦いでなんとなく理解して  
いた。

しかし、古今東西において、馬鹿の一つ覚えとはかく無様に崩れ去るものである。

直前、切っ先がズライカへと触れるかどうかの直前。

ズライカは大きく翼を羽ばたかせて急停止、そして次の一振りで龍騎の頭上へふわりと舞い上がったのだ。

「えっ！？なんで！？」

それを見た龍騎の焦ること焦ること。

完全にこの策が通ると思いこんでいたらしい、浅ましいことこの上ない。

マミもついつい「言わんこっちゃない」と攻め立てんばかりの視線を送ってしまう。

そんな冷やかな空間で、またも響く間抜けな音が二つ。

それに反応し見上げてしまった視線の先で、さらに今度は四つの音が。

「……あーっと」

巨大な質量が自由落下の際に上げる薄ら寒い風切音を耳にしながら、龍騎は上を見上げたままに、ほとんど無意識で呟いた。

「さっすがに……、なんでもありませんじゃないか？」

眩きを覆い潰すようにドオツ！と、豪快な爆音と土煙があがる。  
世界中のビルダー達が唾を飲むであろう程に筋肉隆々で、爪までも  
が黒光りした四肢。

それを四足のバケモノよろしく装備して、先までとあまりに違った  
シルエットとを得たズライカが、龍騎の下半身を押し潰しながら着  
地した音だった。

「な、な、なんじゃそりゃあ！？」

「真司さん！！」

「ダメだまどか！前に出過ぎると危険だ！」

まどかの悲鳴とさやか of 驚愕。

二つの絶叫と目の前の衝撃を受け、マミはすかさずズライカへと持  
っていたマスケットを発砲。

黄色い魔力弾はズライカへと確かに、着弾し、

「なっ！？」

ただ、それだけ。

被弾箇所が爆ぜることも、痛みへのけ反ることもなく。

着弾という事実だけを残して、望んだ結果は何処かへ消え失せた。

マミは諦めず何発もの弾丸を撃ちだすが、ズライカには何の影響もない。

強い闇の前では、矮小な光など取るにもたたないという事実。

ズライカはまさしくその体言者であった。

そしてゆつくりと、騎士を死へと誘う黒光りした右手が振りかぶられ――

「た、たすけてドラグレッツダアアッ!!」

< A D V E N T >

零距离、龍騎の胸元から飛び出した深紅の炎を点した顎が、そのどてっ腹をえぐり飛ばす。

剣と盾、恥と外聞の全てを放り捨てての召喚、なんとかぎりぎりで間に合ったらしい。

「死ぬかと思った…死ぬかと思ったあ……」

「銃は効かなかったのに、今は通じた…、単純に威力の問題？それとも……」

龍騎が生還の喜びとダメージに膝について息絶え絶えとしているのを尻目に、マミは顎に手を当てて先の応酬を反芻し始める。

もし単に威力の問題なら特大級の攻撃をぶつけてやればいい。  
だが見当違いであった場合、無駄にカードを切ることになるので少し億劫だ。

「……ここは様子見かしらね」

念のため新たにマスケットを召喚しながら、ドラグレッダーと対峙するスライカへと視線を向けた。

全長ゆうに5メートルを越える巨龍とそれに匹敵する異形の戦いにしては、少々地味な戦闘が繰り広げられていた。

巨龍の口から迸るは灼熱の業火、『ドラグフレイム』。

ドラグレッダーは宙を旋回しながらそれを放ちつづける。

対するスライカはただフレイムを星々で撃ち落としていくだけだ。強引に攻めいくことも、有利に立ち回れるであろう姿へと変わることもしない。

「頑張つて、ドラちゃん……！」

「大丈夫よ、なんかドラちゃん調子良いっぽ……ドラちゃん!？」

さやか言葉の通り、まどかは少しセンスがわ……、もとい、ドラグレッダーが圧倒しているように思える。

だが、マミはその状況に妙な違和感を覚えた。



ズライカの炎に対する気迫が尋常でないように思えたのだ。  
少なくとも、単に迎撃するだけのそれではない。  
さながらその存在自体を否定しているかのような……

――闇、星々、夜、拒絶、炎、熱、光……

「……なるほど、試す価値はあるかしら」

「へっ？」

龍騎の間抜け声には耳を貸さず、マミはマスキットを突き付けた。  
狙うはズライカ、ではなくその遙か上の闇の穴。  
マスキットの銃口に魔力を集め、開いた時と変わらずに闇を湛える  
そこへと弾丸を撃ち込み、

「『ティロ・イオスプレンド』……！！」

マミの宣言が高らかに鳴り響き、全ての闇を掻き消した。

『ティロ・イオスプレンド』、『輝ける砲撃』、すなわち照明弾。  
魔力により固定された弾丸から発せられた強烈な光に結界内の全て  
が例外なく照らされる。

まどか達は眩しさのあまりに顔を腕で覆い隠す。  
ドラグレッダーは嫌そうに目を細め、ミラーワールドへと帰ってし

まう。

龍騎はいきなりのことに目を守れず、強化された網膜に焼き付いた光に苦しみ転げ回る。

そして、ズライカは四肢を無茶苦茶に、金切り声は目茶苦茶に、暴力的に振り回し始めた。

秘匿していた何かを衆目に曝された子供のように、純粹な幼心が世界の全てを否定する。

「ふふつ、予測通りかつ狙い通りね」

「な、何が……？」

「そこまで難しい話じゃないですよ、ただ……」

回復しない視覚にふらふら揺られながらも、龍騎はなんとか立ち上がった。

そんな彼へと笑いかけつつ、マミはマスケットを両手に一本ずつ生み出す。

「彼女が、根っからの出無精だったみたい、ってだけですから」

「……？」

ズライカの性質は『妄想』

それゆえに、その妄想の全てを消し去り見たくもないモノを見せ付ける光を何より嫌う。

だから彼女の行く先はいつも闇に包まれる、光は全て闇に飲み込まれる。

――ならば、その闇ごと照らす光で全てを焼き払えばいい

単純な魔力とスケールの差で、マミはズライカを完全に凌駕していたのだ。

「さて、それじゃあ行かせてもらいましょうか」

言うが速いか、マミは高く跳躍し、ズライカの眼前へとまさしく『踊り』出た。

同時に、いつの間に配置していたのやら、更なる光がスポットライトのようにマミを中心にして集まれば、そこはもはやズライカの知る場所ではない。

マミのために作られ、マミのために存在する、マミ一人だけの戦場>ステージ<。

輝ける光の中、軽く脚を交差させて凜と立つマミが、ゆっくりとマスケットを掲げ、突き付け――

「一曲お付き合い、願えるかしら？」

……バマリ、オン・ステージ

自分の闇を奪ったのが目の前の存在だと気づいたか、ズライカは立ち上がり、変化できなくなった腕をマリへと全体重と共に叩きつける。

「あらあら、随分と積極的なアプローチなこと」

迫りくる豪爪にマリを取った行動はその場での小さなステップ。膝間接のみのジャンプはズライカの一撃を躲すのに十分な跳躍力を生んだ。

「でも、ごめんなさいね？」

躲して、降り立ったのは地面ではなく拳。

相手が対応するよりも早くに腕を駆け上がり始めると同時に、マスケットから魔力弾を一発撃ち出す。

放たれた弾は先と違確かな手応えと共に着弾、ズライカを怯ませた。その隙にマリは腕を蹴り付けて跳躍、その一飛びでズライカを飛び越える。

地面へ落ちながら、天地を逆転したままに、残っているマスケットを背中へと突き付け、

「あんまり激しいのは、好みじゃないの！」

先程以上の威力を持たせた魔力弾が、ズライカの背中を穿ち抜き、その巨体をつんのめさせた。重低音がズウンと響き渡る。

その一方的な戦闘は、それを見る者全てへと理解させた。暗闇の魔女ズライカは、彼女のダンスパートナーとしてあまり不相応であるということを。

「さてつと」

身を捻って着地して、すぐに両腕を真つすぐ突き出すと、彼女の拳をそれぞれ覆うように大口径の銃が装備された。腰を落とし、両方を一辺に発砲、反動に身体が震えるが、それに見合った衝撃がズライカを遠くへ吹き飛ばす。

この二撃は伏線、十分な距離をとり、『最終』たる切り札を発動するための前準備。

繰り広げられるマミのワンマンショー、そのステージには何人足りとも並び立つことは出来ない。

だが、いつだって空気の読めないヤツは居るもので。

「マミちゃんだいじょ……あつ、もう終わりにかけてる」

まだはつきりとしない視界でなんとかマミの元へとたどり着いた龍騎だったが、既に戦いが終わりにかけていることに気づいた。自分が情けないやら何やらで、思わず力弱い声を漏らしてしまうが、ここまで来たなら最後ぐらいはと、カードを一枚引き抜いた。

「……城戸さん、正直もう見てるだけでも構いませんよ？」

「いやぁ……最後ぐらい手伝わせてもらわないと、俺も立つ瀬ないっていうか」

「……はぁ」

そんな呆れた乱入者にマミは表情だけで「やれやれ」と呟くと、龍騎から視線を外し、未だ立ち上がらないズライカを見遣る。

龍騎も同じようにしてマミの隣に立つと、引き抜いていたカードをバイザーに読み込ませた。

< STRIKE VENT >

電子音声と同時に、胸元の鏡から龍が飛び出した。ただし、その龍は胴体を持たない。

無双龍の勇ましい頭部を精巧に模した打撃武器、『ドラゲクロー』。それを振るって放つ殴打は、岩盤をも易く砕く一撃となる。だが、クローの真価はそこは別にある。

「はああああ……………」

深く息を吐きながら、クローを握る右手を引き絞る。すると、それを待っていたとばかりにドラグレッダーが鏡から現れ、龍騎の傍らで唸りをあげた。

「……………」

マミは無言で両の手の平を重ね合わせると、そこに魔力を集中させた。

練り上げられた魔力はやがて手の平には収まりきらない輝きへと変わる。

そしてついには輝きは花開き、出来上がるのは巨大な銃、否、『砲』。

直径、全長の両方ともが今までのものの十倍をゆうに越す砲身は、使用者が正義であることを証明するかのような白銀。

龍の顎が、巨大な銃口が、ギリリと敵を睨みつけ、力の解放を今か今かと今か待ち兼ねる。

それは『昇』りゆく『龍』の勢いを持つ、全てを『突破』する紅蓮  
それは歪んだ悪に幕引きを告げる、『最終』たる『砲撃』

最後に一度、二人ともが息を吸い込んで――

「はあああああああつ!!」

「ティロ・ファイナーレッツ!!」

『昇龍突破』、そして『ティロ・ファイナーレ』

怒涛の勢いで解放された二つの輝きの前に、ズライカは為す術など  
あるわけもなく飲み込まれ、その身の一片たりとも遺さずに焼き尽  
くされた。

「いいよっしゃあ!!」

「やっぱり、かっこいい……!!」

今度こそ完全に闇が明け、何時もと同じ満面の星空が龍騎たちを出  
迎えた。



「ふいー、疲れた疲れた」

「今回城戸さんほとんど何もしてないですけどね」

「はは…、それは言わないお約……………どっから出したんだその紅茶？」

デッキを引き抜き変身を解きながら、いつの間にか優雅に紅茶を啜るマミについ突っ込んでしまっても、彼女は曖昧に微笑むだけだった。

「二人ともおっ疲れさんした！」

さやかが笑顔で手を振りながら真司たちへと駆け寄った。それに続くまどかは、スツと真司に何かを差し出す。

「はい真司さん、スポーツドリンクです」

「おっ、サンキューまどかちゃん」

まどかの差し出したスポーツドリンクを受け取ると、蓋を弾くようにしてすぐさま開けて、喉を鳴らしながらがぶ飲みした。

「そ、そんなに慌てて飲まなくても…  
マミさんはどうですか？」

「ああ……美樹さん、この紅茶あげるわ」

「えっいいんですか？あざーっすマミさん！」

その申し出にさやかは大層喜んで、マミの持つカップをひっそらうと、腰に手を当て一気にぐいっと飲み干した。  
口の端から一条の筋がこぼれるが、そんなものを気にしない様になんとも男らしい。

「っぷはー美味い！この一杯のために生きてますなあ！」

「もう、大袈裟ねえ」

「マミ、グリーンシード拾ってきたよ」

「あら、ありがとうキュウベえ」

キュウベえが器用にも耳で掴んだグリーンシードを受け取ると、すぐにソウルジェムへと宛がった。  
ジェムのくすみが取れ、まばゆい光を放つ。

「これでよし、鹿目さん、ドリンク貰えるかしら」

「はい、どうぞ！」

マミの手へとまどかが笑顔でドリンクを渡す。

つい先程まで戦場であったことが信じられないほどに、和やかな空間が繰り広げられていたのだった。

## 第九話 激しいのは好みじゃないの（後書き）

……もうね、自分の計画性の無さに嫌気がさしてきましたよ最近  
前々回に続き、今回も予告した部分まで辿りつけませんでした、本  
当に申し訳ありません

戦闘シーン4000文字ぐらいでパパッと終わらせるつもりだった  
のに……どうしてこうなった！？わたし自身のせいだね！！

ズライカの能力については完全に妄想です  
といってもほとんど使い魔の上位互換ですが

描写不足でわかりにくかったかもしれませんが補足すると、この  
ズライカは光を浴びると、浴びた時の姿で固定され変化ができなく  
なります

その前にマミの射撃が効かなかったのは、弾を取り込むように着弾  
箇所を変化させて優しく受け止めていたからです

え？やっぱり訳わかんないって？

……考えるな、感じるのだ

次回予告がないのは前回したものと同じになってしまっ  
たら、つまり仕様です

今度こそはきちんと目標まで辿りついてみせます  
では、次回も見てね！

## 第十話 あなたには分からない

「そーだなあ、『通りすがり』」

「り、り、り……『龍騎』」

「『決まり』っ、ルールとかそんな感じの意味だからちゃんと名詞だよーん」

「また『り』か！？り、り！りいい……っ！」

「はい時間切れ、城戸さんの負けです」

「だああああ！また負けた！！」

今の時代、近代的な光により遅い時間だろうと明るさと賑やかさが保たれている。

光があるのが当然であり、闇や無音とは就寝時にだけしか付き合いがないというのもざらだ。

それは物理的な明るさだけのことでなく、人並みにおいても明るく賑やかな者がより歓迎される、そんな世の中……だが、

「あははははっ！真司あんたちよつとボキヤ貧すぎやしない！？」

「今ので三連敗だから……わたし達全員にアイス三つずつだね」

「嘘だろ…、こんなはずじゃあ……」

「最初に言っただでしょ？、わたしはかーり強いってね」

「くそおおおおおお！もう一回！もう一回だっ！」

「何度やろうと結果は同じ！ブタ札がストレートフラッシュに勝てないようにい！生まれ落ちて才能【カード】を配札されたその瞬間！勝負はとくに決まってるのよおお！」

「俺はそれでも、諦めたりなんかしない！」

「いいや諦めるわね！絶対的な力の前に、人は膝を折らずにはいられない！」

「……二人とも、ちょっと静かにしましょうか」

だからといって夜遅くまで馬鹿みたいに騒いでいいというわけではありません。

深夜に騒ぎ立てるのは近隣の方々の迷惑となります、十分に気をつけましょう。

お兄さんとの約束だぞっ。

ちなみに、なんだってこんなことになっているのかというと。

暗闇の魔女を撃破し、少しの休憩の後に帰路へとついていた魔法少女一行。

そんな時に、さやかがふと、何の脈絡もなく『しりとりやるうぜ』などと宣いだしたのだ。

何故か全力で拒否するまどかと、そういうのがあまり得意でないというマミが辞退したので、

別段断る理由もなかった真司だけがそれを受けることになり、さらにさやかの舌三寸にホイホイ乗っかって『賭け』まですることになった。

その行動には『さすがに中学生には負けないだろう』という余裕、言い換えれば慢心があつたのだろう。

だが、そんなものがあるうがなかるうが、『Queen of take hips（しりとり女王）』、『文系のプライドの破壊者』の異名を持った、しりとり界の覇者たる美樹さやかという少女の前には、城戸真司の敗北は確定した未来でしかなかったのだ。

「あの…わたしは別に奢ってもらわなくても……」

「そう！？いや助かるよ、まどかちゃんってばホント天使だ！」

「て、天使だなんて、そんな大袈裟な……」

恥ずかしげに目を逸らすまどかと、真司はニコニコと笑顔を向けて、

「おりゃあっ！」

「ぶへえっ！？」

その脳天に、さやかの鋭くダイナミックな手刀が振り下ろされた。

「さやかちゃんチョップ……」

「へえ……後で言うんだ」

キリッ、という音が聞こえてきそうな程のキメ顔はさながら金色の毛を持つ熊のようであった、とはキュウベえの後の感想である。それを言って数分後に行方不明になり、半日後かなりやつれた状態で見つかったが、一体何があったのかは固く口を閉ざしている。

「いやいや！普通になにすんだよ！？」

「決まってるでしょ、敗者の分際でわたしの嫁に手えだそうとした馬鹿への制裁よ」

「またそれか！何なんだよ教頭先生といい早乙女さんといい、みんなして俺のこと女たらしみたいに言ってるさ！俺が何したっていうんだよ！？」

「天然かよ……また罪深いこつたね」

真司の、俺は無実だ！という悲痛な訴えを、さやかは完全に冷めきった視線で打ち返した。

無意識の加害者ほど厄介な者は存在しない、当人を含む誰ひとりとして幸せになれないからだ。



数多の一級フラグ建築士が嫌われる理由はそこにある。  
嘘である。

「わたしも別にアイスは結構ですから、安心していいですよ」

「ホント！？よかったぁ……ありがとうな二人とも」

「い、いえ！気にしないで下さい」

「はい、鹿目さんの言う通りです」

――――？

甲斐性なしの男に気をつかう二人の美少女という実に微笑ましい光景に、さやかはふと奇妙にも『自分が嫌いなモノ』を感じた気がした。

まどか、何時も通りだ、この子が優しいのはよくわかってる。

真司も変わらない、こいつが見たまんまのヤツなのは短い付き合いながらわかってる。

と、すれば、

（まさか、マミさん？）

いや、それこそありえないと心の中で頭を振るう。

強くて頼れる彼女が、よもや『あいつと同じ目』をするとは思えな

い。  
きつと気のせいだと、やはり心の中でパシンッと頬を叩いて気持ちを切り戻した。

「言つとくけどわたしは奢ってもらうからね、きつちり19800円分」

「ちえっ、まあ仕方ない……くない！？全員のアイス代さやかちゃんに集約しても多すぎんだろそれは？！」

「何言つてんの、この中にはあんたにへし折られたわたしの愛刀の弁償代も入つてんのよ  
あんたつたら何時までたつても弁償しないんだから……」

「愛刀つて……あの時のバットのことだよね？」

まどかは頬に指を当て、思い出すように呟いた。

諸君らは覚えているだろうか、城戸真司が仮面ライダー龍騎へと変身したあの日、哀れにも散った命があったことを。

守るべきもののために悪へと立ち上がりながら、その守るべきものに打ち砕かれた存在。

「1980円のお値打ちバット」。

それこそが、世界で最もお値段以上の活躍をした存在の名前である。

さやかはくうつと拳を握り、彼との少ない思い出を噛み締めた。

「わたしは忘れないわ、目の前であなたの拳が愛刀を見るも無残な姿へ堕としたことを……」

「で、でもさやかちゃん、あれはマミさんを助けるために仕方なく……」

「それとこれとは話が別よ！何がなんでも弁償してもらってからね！」

「だからってなんで値段が10倍にもなってるんだよ！？」

「慰謝料と利子込みよ、それでも結構譲歩してるんですけど？」

「……どこの闇金だったの……」

いい加減にツツコミ疲れてきたようで、真司は額に手を当てて深く息を吐く。

そんな態度が気に入らなかったのか、さやかは表情をムツとさせた。

「なーによその反応は？いいわいいわよ、こうなったらキュウベえに『バットとアイスちょうだい』ってお願いしてやるんだから」

「いい！？急に何言い出して……！！」

「さやかちゃんアイスとバットで魔法少女に！？」

「いいだろう、それが君の全てを差し出すにたる願いなら……」

「キュウベえも乗っかるなああああ!!」

「キュツぷい!?!」

さやか of 言葉に契約の態勢にはいるキュウベえの口をふさぎながら、真司が死に物狂いで捕まえる。

掴んだ手を耳でベツチベツチ叩かれて地味に痛い、必死で我慢した。

「わかった!絶対弁償する!だからそれだけはやめとこう!なつ!?!」

「そうだよさやかちゃん!いくらなんでもそんなのひど過ぎるよ!あんまりだよ!」

「ええー何この超絶的な説得の波……、わたしはあんたらの中で一体どんなキャラなの……?」

さやか、ドン引き。

軽く言った冗談でここまでのリアクションを得られるのは芸人的には美味しいだろうが、それ以外には焦りしかもたらさない。

「まあ、さすがにその願いはどうかと思っけれど……」

三人のまさに漫才なやり取りを端で楽しげに眺めていたマミは、

真司からヒョイツとキュウベえを抱きとると、まどか達へと向き直った。

「体験ツアーも一週間目を迎えたわけだし、そろそろ『願い』も決まってきたんじゃないかしら？」

薄い笑顔と共に小さく首を傾げながら尋ねる。

だが、口ごもるまどか達の様子を見ると、残念そうに肩を落とした。

「そっか……まあ、仕方ないわよね」

「……」めんなさい

「いいのよ、こういうのは焦らずじっくりと決めるべきなんだから、ね？」

謝るまどかにマミはウィンクと共にそう返す。

茶目つ気が効いたソレに、まどかも少しだけ気が楽になったようだった。

「あつ、そういやマミさん、前々から訊きたかったんですけど」

「あら、何かしら？」

さやかの問題を、マミはキュウベえを下ろすため屈み込みながら聞いて、

「マミさんの願いつて・・・」

喉元に、撃鉄の上げられた銃を突き付けられた・・・ように感じた

鼻をくすぐるのは、血によく似た硝煙の香り。  
錯覚だと、そう気づいても冷や汗は止まらない。

何処からか、誰からか、そもそもなんなのかすら分からないプレッシャーに、一瞬で全てが飲み込まれた。  
ただの少女である二人は息を殺され、マミは気配を探ってもいるのか屈んだまま動かない。

真司は襲い来るプレッシャーにどこか既視感を感じながらも、それが何か掴めないでいた。  
例えるならば、針の穴に薄い膜が張られて、糸が通るのを邪魔しているような、そんな感覚。

「あ、あー、えっと！質問、行かせてもらってよろしいでしょー

かつ！？」

以外にも、謎のプレッシャーから一番に抜け出したのはさやかだった。

彼女の無駄に大きな声と身振り手振りは、まるで目の前の獣に『敵意なんてないよー』と訴えかけているような動きで、

その間抜けさに毒気を抜かれでもしたのか、プレッシャーは波が引くように消えていく。

（な、なんだっただ、今の……）

真司はそれとなく額の汗を拭くと、密かに深く息を吐いて、乱れたそれを整えた。

「ふう……、それじゃ美樹さん、改めて質問どうぞ」

（えっ、続行！？）

立ち上がりながらさやかに質問を促すマミに、真司は思わず信じられないという視線を向けてしまう。

それでもマミは平然。

そんな様子なので、何か考えがあるのかと、周りを警戒しながらとりあえず黙っておくことにした。

「その…、契約の『願い』って、誰かのために使ってもいいのかな？」

「え？」

さやか言葉が予想外のものだったのか、マミが驚きの声を上げる。

「例えば……わたしなんかよりずっと困ってる人がいて、その人を助けるために、『願い』を使うっていうのは……」

「誰かって、上条くんのこと？」

「は、はあ！？ちよつ、ちよつ、ちよつとお！？なんでそこで恭介が出てくるわけ！？」

「『上条くん』？、『恭介』？」

聞かない名前に、真司の頭のうえでハテナマークが踊り始める。さやかのなんとも乙女な反応に心を和ませたまどかが、飴玉のような声を弾ませた。

「『上条 恭介』くん、さやかちゃんの幼なじみで、怪我で入院してるんですけど、さやかちゃんったらしょっちゅうお見舞いに行ってるんですよ？」



「へえ、以外と良いところあるんだ」

「ほああ！？だから！違う！全然違う！！」

「うわっ！？」

軽く言う真司とは対照的に、さやかはわたたと手を振り顔を真っ赤にして、これぞ焦った少女だと言わんばかりのご様子。

「幼なじみとしてちょっと心配なだけで！別にあんたらが言うてるようなことなんてまっったく無いから！！」

「いや、俺らなんにも言ってる……」

「とにかくあいつとは何にも無いの！分かった？理解した？どうーゆーあんだすたん！？」

顔どころか全身を真っ赤していきり立つさやかをドウドウと嗜めつける。

その場の全員は確かに理解した、それが当人のしてほしい理解かどうかは別にして。

「つと、とまあそんな話は置いて！」

「騒ぎ出したのはさやかちゃんだけだね」

「何か言ったかまどかあ！」

「てへへ、なんでもないよ」

まどかが舌を出して悪戯っぽく笑う。

意図したもので無いだろうが、さやかは暴走は先のプレッシャーがもたらした重さを遥か彼方へ吹き飛ばしてくれていた。

そんな空気ながら、さやかは改めて表情を真剣なものへと引き締める。

「……それで、どうですかマミさん、誰かのためなんて、やっぱりダメですかね？」

「そうねえ……」

マミは顎に手をあてて俯き、少し唸っていたが、そう間もなく顔をあげた。

その表情は、笑顔。

「……それがあなたが考えぬいて出した答えなら、わたしは何も言わないわ

魔法少女の『願い』っていうのは、そういうものよ」

「そう、ですか？……」

さやかは腕を組むと、そのまま擦切れるのではないかと思うほどに頭を捻り始める。

しばらくそうしていたが、はたと真司へ顔をあげた。

「ねえ、真司たちはどうだったの？」

「えっ、どうって……」

「ほら、あんた達仮面ライダーの中にもさ、誰かの『願い』のために戦ってた人はいなかったのかって」

言われ、契約が前向きに考えられているのに少し引つ掛かりながらも、「そうだな…」と小さく呟いて、かつての世界に思いを馳せた。

「……まあ、いたにはいた、のかな」

友の思いを継いで戦いを止めるべく奔走した『仮面ライダーライア』、『手塚 海之』。

愛する人のために非情の仮面を被り、剣を握り続けた『仮面ライダーナイト』、『秋山 蓮』。

真司の記憶の中でさやかの言う『誰かのために戦う仮面ライダー』に当て嵌まるとすれば、きっとこの二人だ。  
だが、

「……でも、ちょっと、なんか違うんだよな」

そう、違うのだ。

たしかに端から見れば、彼らは親友や恋人のために戦っていたのだろう。

だが、正しく言えばそうではない。

手塚が躊躇なく前へと歩き続けたのも、

蓮が仮面ライダーで在りつづけられたのも、

彼らがあの頃の真司とあまりに掛け離れていたのも、そうだったからではない。

「違うって、何がどう違うのよ？」

「うーん、何て言っただもんか……」

必死に脳を捻って、少ない自分のボキャブラリーから彼らを語るに相応しい言葉を選び出す。

納得にいくものは出てこない、そもそも彼らの生き様を少ない言葉で表現できるはずがない。

それでも真司は考え続ける、何となくだが、このことはキチンと伝えなければならぬという思いがあった。

自分と同じ、『願い』を探す彼女たちのためにも。

「そうだな……『割り切れてた』、のかな」

「『割り切れてた』？」

さやか of 怪訝な声に、考えるのをやめないまま頷く。

「確かに、あいつらの『願い』は誰かのためのものだったと思う、でも……、」

口の動きは小さく、出てくる声もゆっくりだが、それゆえに一つ一つの言葉が重い。

「きつと、その『願い』はあくまであいつら自身の『願い』だったんだ  
蓮や手塚も、そのことをちゃんと分かってたんだって、そう思う」

こんなところかな、と締めくくる。  
さやかはそれを受けるとしばらく深く唸りをあげて、それから結局肩を竦めた。

「……結局、その人たちは誰のために戦ってたわけ？ごめんだけどよくわかんなかったわ」

「ええ…、結構頑張って考えたんだけどな……」

自分の持てる力の全てを込めてまとめあげた言葉だったが、それでも彼女には届かなかったらしい。

これではボキヤ貧と言われても仕方がないか、とうなだれている真司に、まどかは「でも」と声をかけた。

「なんだか、すごく大事な話だった気がします  
いつか絶対にださなきゃいけない答えっていうか……」

そう言うまどかの表情は真剣そのもので、そういう風に受け止めてもらえたというだけで、幾分か気が楽になったように思えた。

「そうだね、今の話の意味がちゃんと分かるまでは考えなきゃかな」

「残念だなあ、僕としては早ければ早いほど、それこそさっきのお願いごとでなつてくれてた方がありがたかったんだけどね」

「おいおいキュウベえ、さすがにあの願いは無いって、なあさやかちゃん」

「いや待て、やっぱりアイスとバットも捨て難いような……」

「ダ、ダメええええええええええええええええ！！」

「分かった分かった分かりましたあっ！両方ちゃんと奢ればいいんだろ！？」

「そーそー、分かればよろしい」

結局ただ今真夜中真っ最中であるということも忘れ、やいやいと騒ぎ立てる真司たち。

マミはそれを少し離れて眺め、笑っていた。

ただ静かに、笑っていた。

真司はその後、まどか達と別れてマミ宅へと戻り、得に特筆するようなこともなく床へとついた。

つきはした、だがすぐに眠りに落ちたというわけではない。

むしろ目は強く冴えていて、ベッドに入ったまま一時間も二時間もただ寝返りばかりを繰り返している。

理由はわからない、

数時間前に受けた謎のプレッシャーのせいなのか、戦闘で大した出番もなかったために体があまり疲れていないのか。

こつも暗闇の中にいると考えは悪い方向へ流れ、ついには何か悪いことの前触れかなどとさえ考えてしまっていた。

「……ダメだ、ちょっと気分変えよ」

呟いて、ベッドから這い出す。

こういう時はアルコールでも煽れば一番なのだが、マミの家にそんなものがあるわけではない。料理酒でもあればいい方だろう。

せめて牛乳はあったらどうか、そう考えながらドアノブを掴むと、

それを捻る前にドアの開閉音がした。

「っ、泥棒!？」

今の重々しい金属的な音は間違いなく玄関のそれ。  
気づいてすぐさま、とっさに廊下へと飛び出すが、そこには誰もいなかった。

「?、幻聴……なわけはないよな」

そもそも眠れなくて困っていたというのに、寝ぼけていたなどとはありえない。

だがこの場に誰もいないというのも事実。

一瞬頭がこんがらがってしまいが、すぐに気づいた。

確かにドアは開いた、なのに誰もいない。

なのならば、

「あっそうか、出ただけか、あーびつくりした」

あのまま答えがでなければ確実に幽霊かなにかだと勘違いしていたことだろう。

気づけてよかった、ほっとして胸元を撫で下ろ……



「……いや待て、出た？」

この時間にか？

自分を除けばこの家にいるのはマミだけだ。

しかし、時計は見ていないがベッドに入ったのがだいたい日付の変わる少し前だったはず。

とすれば今はおそらく2時前後、中学生が外へと出歩くような時間ではない。

少なくとも普通の中学生の時間では。

「まさか、魔女でも出たのか？」

理由があるとすれば、普通ではないそれぐらいだ。

魔女の気配に気づいたはいいが、時間が時間だったので、眠っているのを起こすのも悪いと思って自分一人で行った、ということころだろうか。

「なんだよ水臭い、そんなの全然気にしなくっていいのにさ」

ちえつ、と唇を尖らせると、靴を履いて玄関出る。

下を見下ろせばどこかへ歩いていくマミが見えたのですぐに駆け出そうとするが、ふとドアを見遣って立ちどまる。

一瞬だけなにか迷うようにしていたが、結局何もすることなく階段

へと走った。

鍵は、まだ貰っていなかったのだ。

走る、走る。

とつくの昔に息はきれ、喉元から短く断続的に空気が出入りする。急いでいるからとエレベーターではなく階段を使ったのは失敗だったかもしれない。

あそこで体力を温存出来ていればもう少し楽だったろうし、今のように半ば見失う前に追いつけたのではないだろうか。

そんな風に少し前の自分に対し悪態をついていると、ある広場にてようやくマミを見つけることが出来た。

「マミちゃ……………」

「あなたはあの二人を魔法少女になるよう、意図的に誘導している」

ただし、一人ではなく、もう一人。

黒髪の美少女、謎の転校生にして謎の魔法少女、  
暁見ほむら。

彼女もまたこの広場に存在していた。

（なんだ？一緒に魔女狩りしてたって空気でもないみたいだけど）

思わず引つ込んだ声のままに身を隠し、彼女らの様子を伺う。

「いきなり呼び出して何の用かと思つたら、第一声がそれ？」

「時間が惜しいのよ、それに、できればあなたとはそう向かい合つていたくはない」

「次は挑発か……やれやれ、ずいぶんと嫌われてしまつてるものね」

軽い口調にほむらが眉を細めるが、マミは鼻で笑うことで返す。

「あの子たちはキュウベえに選ばれた……奇跡を掴む権利が与えられたの」

それに手を伸ばすかどうかは、あの子たち自身が決めること」

「伸ばすように仕向けている誰かがいるから、迷惑なのよ、特に……」

「鹿目さんは、かしら？」

「っ！、……そうよ」

ほむらは一瞬その表情を大きく歪めたが、一度目を閉じてファサリと髪を撫でたなびかせると、次に目を開いた時にはいつもの冷静

な彼女が戻っていた。

そんな彼女にマミは不敵な笑みを向ける。

「彼女は素晴らしいわ、溢れ出す才能もさることながら、何よりもあの優しさ……」

彼女ならまさしく万人が望む『魔法少女』になることでしょうね」

「……その万人の筆頭はあなたでしょうに」

「何か問題かしら？『正義の味方』が増えることは誰にとっても喜ばしいことじゃない  
それを本人が望んでいるならなおさらね」

マミの態度は変わらない。

ほむらはその場の全てに響くような舌打ちをした。

「そう、彼女は強く優しい、だからあなたは彼女に固執し、依存する」

「そう攻撃的に難しい言葉を並び立てれば圧倒できると思ってるのかしら？」

むしろ心の弱さが露見するわよ、そういうのって」

「……………」

マミがそう言った直後だ。

その場から離れている真司は、思わずゾワリと身震いしていた。  
なぜかはわからない。

ただ、無性に寒かった。

マミも何か感じ取ったのか、身をたじろかせている。

「心の弱さ……か」

ほむらが軽く口角を吊り上げた。

その動きは確かに『笑う』という行為のそれなのだが、真正面からそれを見るマミには、到底笑っているようには見えなかった。

それは笑っているにしては、あまりに冷たく、恐ろしい。

そんな笑みを貼付けたままに、ほむらの口がゆっくりと動く。

「そんなこと、『あなたにだけは』言われたくないわ」

「っ！、ずいぶんと、知ったふうな口を利くのね……！」

「ええ、知っているもの、ある意味であなた以上に」

今までと違う、確かに何かかこたえたマミ、ほむらは首をもたげさせた、見ようによつては見下しているようにも思える。  
だがそれは一瞬で、すぐに彼女に対し踵を返した。

「これ以上は時間の無駄、かしらね」

「……ええ、次に会う時には背中にも気をつけなさい  
わたし、『悪人』には容赦しない質なの」

「……………」

作られたものだと思わずとも分かる笑顔を背中に受けながら、ほむらはその場から一瞬で掻き消えた。

しばらく沈黙が流れる。

マミも少しの間何もすることはなかったが、月のない夜空を見上げると、軽く息を吐いた。

「それで……いつまでそうしてるつもりなんですか、城戸さん？」

「ウェイ!？」

名前を呼ばれ、真司は思わず間拔けな声と共に立ち上がってしまった。

咄嗟のことでしたどもどろとしている彼に、呆れをたっぷり含んだ視線が送られる。

「……………どこから居ました？」

「あ、いや、その……意図的にどつつてところから……………」

「始めからじゃないですか、それ」

肩を竦めて視線を強めるマミ、真司はつい縮こまってしまった。

「……城戸さんはどう思いますか？」

「え？」

思いもよらない質問にまたも間抜けな声上がる。

「さっきのわたしと暁見ほむらさんの話についてですよ  
何か思うところはありました？」

「何かって、そうだな……」

かなりのオーバーアクションで、今日はよく何かを考えさせられる日だ、など思いながら考える。

「……俺は、正直ほむらちゃんに賛成かな」

言った途端、マミの目が鋭くなった。

しかし何も言うことはなく、真司も考えながら俯いていたので全く気づかない。

「……契約自体は別に気にしない、みたいなことを以前言っ  
てませんでしたっけ」

「いやそうんだけどさ、ほら二人が言った通りまどかちゃん  
て優しい子だから、もし力を手に入れちゃったらそれで人助けを  
せすにはいられなくなっちゃうと思うんだよね」

昔の俺みたいに、とは付け加えなかった。

なんだか自分で自分のことを優しいと言っているようで気恥ずかし  
かったのだ。

「とは言っても俺の立場上、絶対に『願い』を叶えるとは言え  
ないからなあ

とりあえずこれからも『絶対に戦わせない』ってスタンスでいくよ  
マミちゃんもなんだかんだ言っただもかちゃん達が戦うのには反対  
なんで」

「黙って」

「……………え？」



声を聞いた、ただそれだけだった。

それだけのはずなのに、脳裏を『ここは何処だ』などという意味の分からない問いが駆け抜けた。  
すぐに振り払っても、違和感は変わらず纏わり続ける。

「……本当に、誰も彼も知ったふうなことを言ってくれるものね」

はたと気づいた。

自分は感覚を知っている。

初めて会った時の、戦場の中にいるようなこの感覚を。  
ついさっきの、銃を喉元に突き付けられたようなこの感覚を。

「ねえ……不思議に思わなかったかしら？」

針穴へ向かう糸が徐々に鋭く尖り、行く手を阻む薄い膜をゆつくり貫いていく。

「どうしてわたしが、彼女たちの契約を、戦おうとするのを、一度たりとも止めようとしなかったのか」

膜はいやだいやだと張り詰めるが、針は、事實は容赦なく逃避を貫いて、

「わたしはね、道連れが欲しいんです  
ずっと一緒に居てくれる、とっても優しい道連れが」

――全てが、真実へと繋がった。

「なにを……」

「ああ、あなたはダメよ、だって城戸さん、『仮面ライダー』な  
んでしょ?」

真司を見るマミの表情は、今までになくどこまでも無色なもの。

「初めは魔法少女の才能があるっていうから期待してたけど、結  
局なんでもなかったみたいだし」

『正義の味方』は『魔法少女』じゃないとね

仮面ライダーなんてもの、むしろじゃまなぐらい」

「じゃ、じゃま、って……」

言葉を無くす真司に、マミは淡々と話し続ける。

「わたしが助けるはずの人まで助けそうになるし……  
そうだ、あの時はごめんなさいね、つい踏ん付けちゃったわ」

「っ！まさか、あれは！？」

「ええ、そういうこと」

小首を傾げながら、そう言った。

いつもなら優しい笑みのついているその動作も、今は何も感じられない。

「なんで、だよ、なんでそんなに……」

「うん？」

狼狽し、纏まった言葉も紡げずに疑問だけを落とし続ける真司。  
マミはその疑問には全く答えなかったが、何か琴線に触れたのか、それだけには答えた。

「だって、そうしないと『わたしは一人ぼっちになっちゃう』でしよう？」

「なに……？」

「理解しなくていいわよ、どうせ、あなたには分からない」

「……そうかよ」

それを聞くと、真司はうなだれるようにして視線を落とした。

「だったら……だったら一つだけ教えてくれ」

「……………嫌よ」

マミは拒否するが、真司はゆっくりと顔をあげていく。

上がるにつれて表情もまたゆっくりと見えてきて、それから逃げるようにしてマミは後ずさる。

「なあ……、どうして、どうしてそんなに……………」

「黙って……………黙りなさい……………！」

「どうして、そんなに泣きそうに……………」

「黙れと言っているでしょうっつ……！！……！！……！！」

絶叫と、重なる銃声。

真司の言葉が出来上がり、届くよりも早く、マミは瞬間で変身して弾丸を放ったのだ。

それらは真司の足元をえぐり、強烈な火花と炸裂音、硝煙があげた。

突然のそれに真司は思わず目をつぶってしまいが、そんなものは一瞬。

あがり続ける硝煙が目へと入ることもいとうことなく、顔を振り上げ、目を見開く。  
だが、

「……マミちゃん？マミちゃん!？」

今の今までスポットライトを欲しいままにしていた彼女は、ステージだけを残して消えうせて、  
取り残された観客の情けないアンコールだけが、長い間ただ響き続けた。

「はあ…はあ…はっ……………」

どこまで走ったのか、どれだけ走ったのか。

そんな在り来りな疑問を持つ余裕もなく、ただ走り続けて、いや、きつと逃げ続けていた。

魔法少女の姿であるというのに、息は変身していない時以上に掠れている。

そんな状態だ、延々と走り続けていれるはずもない。

「あぐっ！」

当然のように足が絡まって、地面へと顎を打ち付けた。  
いつもなら簡単に受け身をとれるはずなのに、今は手をつこうとさえ思えなかった。

「……………」

倒れ伏したまま、動かない。  
立ち上がるうという気はおきない。  
だがそのまま土を舐めつづけるのも嫌だったので、寝返りを打つようにして仰向けになった。

「……………」

月はない、わたしを照らしているのは照明の無機質な光だけ。  
虫の声一つ聞こえず、騒がしさとは無縁なこの空間が、わたしの居場所

「……………嫌われちゃったなあ」

自分の中から出たのかどうかあやふやな声は、誰に届くでもなく夜闇へと溶けた。

今の言葉にも、先の彼へ宛てた問いにも、意味なんてものはない。

ならどうして問うた？どうして逃げた？

心の中で誰かが鎌首をもたげ、わたしにとって嫌な視線を向けながらそう問い掛けてくる。

「……知らないわよ、そんなの」

無視するに越したことはない、そう思っているのに、気がつけば答えを返していた。

視線は月のない空を眺め続けたままで。

「ただ……あの目が、どうしようもなく怖かったの」

思い返して、後悔する。

彼のあの目には、何故か直視することも、されることも出来ない。襲いくる胸を貫かれるような感覚と共に、大切な何かが変わってしまっ気がして。

気がつけば変身して、マスケットを構えていて、そして――

少女は気づかない。

自分は今もずっと前から変わり始めていたのに、彼と出会ったその日から。

少女は気づかない。

その変化の意味を、そして、その名前を。

少女は気づかない。

そもそも彼に問いかけをしたことが、己の心を見せたことが、己が変化を求める証であると。

少女は気づかない。

「……いつまでも、こうしてはいられないよね」

立ち上がり、光を受けた帽子に頂く金の宝石が、ゴポリと、濁った音を上げたことに。

本来の『終わり』は近い、正しき物語は、その『終わり』から始まったと言っている。

しかし、そこ存在するは、すでに『終わり』を遂げた龍の騎士。故に、この物語はとうの昔に始まっている。

既存の世界に遠慮はいらない。

その存在のあるがままに

吠えよ龍、轟け騎士。

狂った孤独<sup>いま</sup>を、変えてみせろ。

次回、仮面ライダー龍騎！



「巴一人だけ無傷でな、まるで『奇跡』か『魔法』でも起こったみたくに」

「今度の魔女は……っ！」

「言っただけよね？『悪人』には容赦はしないって」

「この状況下で起こりえる絶望は、鹿目まどかの契約、もしくは  
……巴マミの死亡」

「なんだって……なんだって言うのよっ！！」

第一部最終話 『それが俺の願いだったんだ』

――戦わなければ生き残れない！――

「「変身……！」」



## 第十話 あなたには分からない（後書き）

さんざん言ってきたキャラ崩壊、ここにてようやく解放

『マミさん』ならぬ『闇さん』が見れるのはここだけ！

『見たくもなかったわ！』という声が聞こえてきそうですが……

マミニストの方々にティロ・フィナーレ（物理）を叩きこまれる覚悟はありますが、一応この崩壊、わたしなりの原作解釈に因つています

主に、彼女だけやたら『魔法少女らしい』理由や、原作十話の『アレ』とか、色々なものを踏まえた結果こうなりました

それら全て『豆腐メンタルで厨二病なマミさんかわいい（ノノノ）』で片付けることも出来ますが、ここは敢えて……と言った感じです

さてはてついに第一部も最終局面、ノリで予告を龍騎風にしてしまう程に盛り上がってまいりました

最終回は前編と後編の二部構成（場合によっては三部構成）でお送りします

マミさんが色々ぶっ壊れている理由とは？

真司は彼女の孤独いまを変えられるのか？

そしてわたしは何時になったら遅筆から抜け出せるのか！？

そんなこんなで、ご期待下さい、次回も見えてね！

『魔法少女まどか マギカ』ファンの皆様へ

どれだけ言葉を並べようと、今回の『巴 マミ』さんに関する展開は紛れも無いキャラ崩壊です

強い不快感を覚えた方々もいらっしやったことでしょう

深くお詫び申し上げます

同時に、この作品が『二次創作』であることを理解していただけよう、

深くお願い申し上げます

ボロツト

## 最終話 アバンタイトル

少女が泣いていた

夕闇が満ちる頃、かつてならば明るさと賑やかさに溢れていたとある広い一室。  
されど今そこには何もなく、延々と流れつづける少女の慟哭とそれを眺める笑顔の写真だけが、この部屋の全てであった。

「うつ……なんで……どうしてえ………」

少女の嗚咽の中に、時々意味のない疑問が混じる  
たが、

分からないことがあれば、優しく教えてくれた母はいない。  
甘やかすなと言いながら、優しく見守ってくれた父はいない。  
何より誰より愛した人たちは、自分だけを置いて行ってしまった。  
今はもう、ただ一人だけ。

誰かが少女に言った。

『今君が生きているのは、きっとお父さんとお母さんが守ってくれたんだ』

だから君は精一杯に生きるんだ』

嗚呼、なんという美談。

きつとそれは誰の耳にも心地好く響き、心を美しくさせるのだろう。

しかし、それは結局ただの言葉だ。

美麗なる言葉には、少女の臍に重く食い込む現実を取り払うような力はない。

ただ少女の周りを飾り立てるだけ。

誰かの目に麗しく、誰かの耳に心地好く。

『誰か』の中に少女は入れない。

故に、それが少女に届くはずもなかったのだ。

「ひつく……うう……うううう………」

日常へと戻り、やはり一人であるという現実には打ちのめされたその日から、少女の慟哭が止んだことはなく。  
そしてこれからも永遠に――

「やあ、調子はどうかな」

否、そこに影が落ちたことで初めて、嘆きがほんの少しだけ鳴りを潜めた。

「う……え………？」

「ここだよここ、できたら開けてもらえないかな」

少女は声に気づいていたし、見えてもいた。

ただ、心が全て嘆きで満ちていたことも相まって、理解ができなかったただけだ。

なぜならその影は、とても人語を解する者の形をとっていなかったのだから。

普通の子供であれば、大人ならなおさらに、そのような正体不明の何かと関わることなど御免だろう。

だが、悲しいかな、

「……いま………開けるわ」

今の少女は、孤独に未だ幼い心を狂わせてしまっていたのだ。

ふらふらと、ろくに食事もとることもなく圧倒的に栄養の足りていない身体を影へと向かわせる。

カーテンを開くこともなく、手だけをその中に入れて窓の鍵を外す。すると勢いよく窓が開き、一気に吹き込んだ風がカーテンを大きくはためかせた。

突然のことに怯む彼女へと、

「どうもありがとう、そして久しぶりだね『巴 マミ』」

風と共に入り込んできた『それ』は、いつも彼女の家族がそうしていたような調子で名前を呼びかけた。

『それ』を表すには『愛玩動物』という言葉がピッタリなように思えた。

その姿であるというだけで無条件に人の愛を得ることの出来る、あの種の理不尽の塊。

少女も少女らしく少しのときめきを覚えたが、彼女の心の嘆きと戸惑いのほうがそれより遥かに巨大だった。

「あ……あなた、誰……？」

「おや、覚えていないかいな、君とは確かに契約をしたはずなのだけれど」

少女の疑問に、『それ』もまた疑問で返す。

軽く小首を傾げる動作は可愛いものだったが、やはり少女はそれどころではなかった。

「け、い、やく……何を言っ……るの？」

「まいったね、頼むから思い出してくれないか」

『それ』の動くことのない口から放たれたその言葉は、



「この僕に向かつて、君は確かに、あの時『願った』じゃないか」

少女を終わらせる、呪いの言葉。

「あ」

頭の中で起きる、爆発的な記憶の再生。

「あ、ああ」

血とガスの臭いが立ち込める空間で、力無く倒れ伏す自分がいる。全てが冷たくなっていくのを感じ、嫌な臭いもいつしか無くなった時、血に塗れた視界に今と同じ影が映った。

「ああ、ああ、ああ」

何も思わず、何も考えず、何を求めるでもなく手を伸ばして、その状況に合っているが、何の意味もない言葉を、

「あ……あああ……」

『願い』を、口にしたのだ。

- 
- 
- 
- 
- 
- 

助けて

[illegible]

衝擊、拒絶、悲哀、そして絶望。

その全てが詰まった絶叫は、まさしく負の感情そのもの。

「どうしたんだい急に  
そんなに叫ぶと喉を痛めるよ」

それを受けてなお『それ』は表情を変えず、首を傾げる動きだけで感情を見せ、的外れな心配を向けた。

「.....わたしは」

『それ』の視線など歯牙にもかけず、少女はその場にへたり込み、

ただ虚空だけを見つめる。

「『助けて』と、願ったから、生きているの？」

「ああその通りさ、それが君の『願い』だったからね」

「わたしが……………」

その瞳は、それ以上に空っぽな色をたたえて。

「『助けて』と、願わなかったから……………死んでしまったの……………」

その問いに『それ』は何も答えない、訳が分からないと言う風に少女へと視線だけを向ける。

何故、どうして、置いて行ってしまったの？

解を告げられることなくドロドロと回り続けていた疑問が、少女の心ごと今一度浮き上がる。

これまでは触れるモノなど何もなかった。

しかし、そこに初めて闇が落ちる。

闇は少女と同じ姿をしていて、大きく裂いた口からは狂笑と呪詛が溢れ出す。

何故？何故何故何故！？

笑わせるなよ、お前のせいじゃないか

助けるための手を伸ばさなかったのは誰だ - - - - お前だ

ただ一人生き延びるために願ったのは誰だ - - - - お前だ

パパとママを見殺しにしたのは誰だ - - - - お前だ

お前だお前なんだお前なんだよ

お前が生き延びたお前が助けなかったお前が見殺しにした

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前がお前が

お前がお前がお前がお前がお前が - - - -

「.....」

影は一つ笑い、呪う度に少女の心を打ち叩く。

一度叩けば音をたてて軋み。

十度叩けばヒビが一つ増え。

何度も叩けば、やがてヒビは裂け目へと変わり、

「…………アハ」

……音もなく、崩れ去る

渴ききつた空虚な笑いが部屋一杯に響く。  
それが外へと届くことはない。

部屋の中だけで跳ね返り、全てが少女にのみ降り懸かる。

「そろそろ、こちらの話をさせてもらってかまわないかな」

狂気溢れるそこにあつてなお、『それ』は調子も表情も変えることなく少女へと掛けた。

「さて、承知していると思うけど、契約を果たした君は晴れて『魔法少女』となった」

「『魔法少女』についてだけど、まずこれと対をなす存在として『魔女』っていうのが存在するんだ」

「魔女は人々を襲い、絶望を撒き散らす

だから『魔法少女』は『人々を救う』、言うなれば『正義の味方』として……」

「……………いいの？」

音が、消えた。

「『いいの』とは珍しい反応だね、大抵の娘はむしろ嫌が」

「ホントにいいの？『人を救って』いいの？『魔法少女』でいいの？『正義の味方』でいいの？」

目の前にある人の形でない『それ』以上に無機質な瞳が映しているのは、いつか何かで見た光景。  
困っている人がいて、助けてあげた人がいて、そしてその周りにはとてもたくさんの人がいて。

「そこまで意欲的なのはむしろ有り難いぐらいだよ  
君はまさしく正義の味方だよ、『魔法少女 バマミ』」

「魔法…少女……正義の味方……、ふふ、うふふふふ」

少女が笑う、楽しそうな声、虚ろな瞳、色のない表情。

「さて、では改めて自己紹介といこうか」

少女が自分を見ていないことに気づくことなく、気づいたところで知ったことでもなく、『それ』はただ淡々と、

「僕の名前はインキュベーター、よろしくね、巴マミ」

己の名を告げたのだっ。た

その日、一人の『少女』の心は完膚なきまでに壊れ果てた。

壊れた心の欠片は『正義』という器に無造作に詰め込まれ、生まれたのは何よりも美しく在り、何処までも歪な新しい心  
その心の名は、『魔法少女』

その歪み、断ち変えし者の名は――

仮面ライダー×魔法少女 第一部

『城戸真司・巴マミ』編  
孤独いまを変えるは龍の騎士

最終話 それが、俺の願いだったんだ

- - - 開幕



## 第一部最終話　それが俺の願いだっただ（前編）

午後3時から長針が大体半周した頃の見滝原中学校、その教室練にある階段。

そこに行けば、見る者によれば驚くようなモノを見ることが出来る。それは、

「……………」

ため息をつくわけでも、涙しているわけでもないのに、地獄の底まで落ち込んでいると一目でわかる城戸真司がこじんまりと腰掛けている光景である。

昨日の晩、結局マミを見つけることは出来なかった。

情けない気持ちを背負ったままマンションに戻り、一応マミの寝室を確認してから床についた。

確認の結果などは言うまでもない。

そして今朝、あれほど遅くまで活動していたのだから当然早くに起きれるわけもなく、目が覚めたのは遅刻ギリギリの時間。

急いで飛び起きたが、何故起こさなかったと文句を言うべき相手の姿はなく、ラップも掛けられていない朝食と昼の弁当、

そして先に行くという旨だけが書かれた無機質なメモに出迎えられた。

とにかくさっさと着替えた後、朝食を3分で胃に、弁当を5秒で靴

に詰め込んで起床後5分たらずでマンションを後にして  
（補足しておく、靴箱の上に初めて見る鍵が置いてあり、それで  
キッチンと施錠しておいた）、なんとか遅刻直前で学校に滑り込むこ  
とが出来た。

そして向かえた昼休み、今度こそ話をしようとマミのいる3年生  
の教室へと臨んだ。  
臨んで、それだけだ。

あと数歩行けばマミの姿が見えるだろうというところで、冷たい風  
が真司を吹き抜けた。  
自然と、抜けた先へ視線が誘われる。

そこにいたのは、魔法少女  
銃を構えて、こちらを睨んだ、確かめるまでもない幻想、  
しかし、真司の足を止めるのに、その幻想は十二分。

会って、何を話すというのか、何を話せるというのか。  
そもそも、自分は今彼女に会うに値するのか。

湧きだし続ける疑問が鎖となって絡み付き、心さえも封じる。  
気がつけば視界はガラリと変わっていて、自分が逃げ出したと気付  
いたのは数瞬後のことだった。

「……………」

何かをしなければならぬ、どうにかしなければならぬ。  
分かっている、解っている、判っている。

だというのに、身体は動かない。

ただ、沈んでいく。

深く、ドロドロとした闇へと、音もなく……

「えいつ」

「！」

ペシヤリ、という、今の心情とあまりに掛け離れた間抜けな音が、自分の近く、というより頬に直接響いて、意識と視線が急浮上する。見えたのは、眼鏡を掛けた女性の柔和な微笑み。そして、頬に感じたのは、

「……………早乙女さん、何ですかコレ」

「絆創膏です、転んじやつてシクシク泣いてる男の子に、先生から送るせめてもの手助けです」

「……………泣いても転んでもないんですけど」

「いーえ、先生にはちゃんとわかります」

躓いちゃったと言った方が正しいかもしれませんがね、

笑顔のままでそう言いながら、早乙女は絆創膏を真司に押し付け続ける。

鬱陶しげにその手を払っても、押し付けはしなくなっただが差し出す

のはやめず、真司は仕方なくそれを受け取ってポケットに詰め込んだ。

早乙女は真司のそんな様子をまじまじと眺めた。

「マミさんと、喧嘩でもしましたか？」

「……………」

数刻の沈黙の後、真司はコクリと頷いた。

内容を話す訳にもいかないので、ただそれだけ。早乙女も追究せず、黙って真司の隣に腰掛けた。

「…………マミさんは、いい子ですよ、とっても」

「……………知ってます」

知ってはいる、だからこそ、分からない。

彼女の真意が、あの表情の意味が、真司には分からない。

「その様子だと、なかなか複雑みたいですね」

俯く真司へと、早乙女が微笑みを向けた。

とても優しい笑みは、やはり彼女は教職者なのだと納得させるもので、そんな笑顔だったからか、

「俺……………思い上がったのかもしれませんが」

気づかないうちに、真司の口から言葉が衝いて出ていた。

「え？」

「俺が知ってるマミちゃんだけが、本当のマミちゃんなんだって、勝手にそう思い込んで……………馬鹿ですね、まだ出会って一週間しかたってないってのに」

「ふうん、つまりお前は愛しの巴が自分の思ってたのと違ってたから、そうやってへこんでるってわけ？」

「っ！？」

自分の後ろ、つまり上の階から掛けられた声、勢いよく振り返る。目に入ったのは、かつて己のためだけに生きると豪語した男にどこか似た雰囲気を持つ、高級という概念を身に纏ったような男。

「きよ、教頭先生！そんな言い方……………」

早乙女が呼び止めるも、教頭は真司を見下ろしたままに言葉を続ける。

「どうした、答えるよ城戸真司、お前はそんな程度の低いアイドルオタクみたいなヤツだったわけか？え？」

「ち、違う！そんなわけっ！」

教頭のあんまりな言いように立ち上がりながら真司が吠える、それを迎え撃つのは、

「はっ、だろっねえ、お前にそんな捻くれた考え方出来るわけがないし」

訂正、軽く受け止めたのは、それはそれは意地の悪い笑みだった。

「へ？」

「それじゃ、ちゃんと正解を返せた真司くんに、俺が一つご褒美をあげようか」

いきなりの雰囲気の変化に戸惑う二人に見せびらかすように、教頭は手に下げていた鞆から一枚の紙を取り出した。

「ここに、巴の事故の報告書がある」

「はあ！？なんでアンタが持ってたんだよそんなもん！？」

「金持ち舐めんな、とだけ言っところか  
そんなことより、こいつの中身の話だ」

教頭が書類の端を指で弾くと、書類はピンつと背筋を伸ばす。

「事故ったのは5年前、家族で何処かに出かけた帰りにハイウェイ  
を走ってた時らしい」

眉間に、少しの皺がよる。

「巴達の車の前にいたトラックがミスって横転した  
真後ろにいたんだ、当然避けられるはずもなく……」

教頭はそこであえて一度口をつぐんだ。

「：車は当然大破、運転していた父親と助手席にいた母親は、傷の  
具合から見てその時点で即死していたらしい」

「そ、それで、マミちゃんは……！？」

この話は過去のことだ。

その結果は既に自分が知っているものに他ならない。

それでも、身を乗り出さずにはいられなかった。

そんな真司に対し、教頭は無言、そのまま報告書を差し出した。

「え？」

「最後から数えて3行目、読んでみる」

教頭の端的な言葉のままに書類を受け取る。

目が痛くなる活字の群れを飛ばし、目的地へと視線を走らせる。

- - の娘であるバマミには一切の負傷はなく、だが念のため一週間の検査入院を - - -

「……………え？」

「まあ当然、そういう反応になるわな」

教頭は一度深く、息を吐き出した。  
そこから、堰を切って話し始める。

「乗っていた車は廃車が確定して、同乗していた両親は即死、にも



関わらず巴だけは火傷どころかかすり傷一つなかった、さながら『奇跡か魔法でもあった』みたくに、な」

「っ!？」

気がついた。

(まさか、マミちゃんの願いは…!?)

これこそが、欠けてしまっていたピースなのだと。

とんでもないことが起きた、奇跡や魔法でしか説明出来ないようなことが。

ならば話は早い、無駄にひねた推理は必要ない、単純明快だ、ム力つく程に。

その悲劇の場所で、常識では説明不可な『魔法』が『奇跡』を起こした、つまりはそういうことでしかない。

それを理解して新たな疑問が湧き起こる。

起こったのは紛れも無い『奇跡』、だが結果として残ったものは『悲劇』としか形容できない。

『奇跡』も万能でないのか……

(いや、違う)

この問題は、分かることなどできない。

ただ知る者だけが答えに辿り着ける、知識を問うものにすぎない。そして真司は知っていて、きっとその『理由』を、

(マミちゃんは本当に死んでしまう間際だった、そんな状況で、何か考えられる訳ないじゃないか……！)

『死の深さ』を、この世で唯一共感できる人間だった。

死とは絶対なモノである

それが確定された時、人の精神は闇に溺れる。

事実、真司がその命を燃やし尽くしたあの時、あれ程に恩義を感じていた大久保のことを考えられたか？

あれ程に心配していた優衣の行く末を、少しでも案じていたか？

否、そんなことは全く出来なかった。

目の前にいた蓮のことと、ようやく見つけた自分の願いのことぐらいいしか、考える余裕はなかった。

死とは、それほどまでの勢いをもって精神を塗り潰すのだ。

一年の戦いを経た真司でさえそうだったのだ、まだ幼かったマミに、何かを考える余裕などある訳がない。

きっと、その時彼女の精神を埋め尽くしていたものはただ一つ。

生きたいという『<sup>ねが</sup>思い』のみ。

「……シンキングタイムはもう十分か？」

考え続けていた真司に、教頭が声を掛けた。  
返答を待つことなく、言葉を紡ぐ。

「さてと、一つだけ言っとくぞ」

その時真司が見た教頭の表情は、今までに見たことのないような、  
まさしく『教育者』たるそれだった。

「あいつは起こってしまった絶望きせきのせいであたし一人だけで生き延びた  
それをあいつ自身がどう捉えて、今までどういう思いを抱えてきた  
のか、悔しいが俺には分からない」

分からない、それでも、察しはつく。

教頭の表情はそう語っているように、真司には感じられた。

そして、彼自身にもまた、見えたような気がした。

重く、紅に塗れた十字架を、その小さな背中で必死に背負うマミの  
姿が。

「だが、あの時、お前と巴と一緒にマンションから出てくるのを見  
かけた時のあいつの笑顔は……」

・・・間違いなく、心からのモノだった

「それが何を意味するのかは、お前なら分かるはずだと、俺は信じてる

まだ会って一週間だけの間だとしてもな」

## 【改造ページ】

そう締めくくられた途端、真司の心で想いが爆ぜたように舞い上がった。

「俺……、マミちゃんと、話してきました！！」

迷っている道理や理由なんてない。

ただ、己の想いのままに動けばいい。

・・・真司くんは、それで良いんじゃないかな

かつて守りたいと思った少女の言葉、胸にあるその声を聞けばどんな闇の中でも進んで進んで行けると、そう信じて。

遠くなる真司の背中が見えなくなった頃に、教頭はかったるいと言  
う代わりに二度首を鳴らした。

「やれやれ、なんだって俺がこんなにお膳立てしてやんなきゃなん  
ないんだか

悪かったね早乙女ちゃん、急に出しゃばっ……………なんでそんなニヤ  
ニヤしてんの？」

「ふふ、なんでって……………」

肩を竦める教頭へ、早乙女が愉快そうな声をあげる。

「教頭先生、城戸くんの様子がおかしいって朝からずっと気にして  
たの、わたし知ってるんですよ？」

「む……………」

「それに、この資料だってそうです」

言いながら、真司が放り出して行った資料を拾いあげる。

「これ、マミさんが入学してすぐに取り寄せていたものですよね？」

「あらら……、なんとまあよく覚えてるもんだ」

「これを見てた時の教頭先生の表情、なんだかとても印象に残ってたので」

「……ふうん」

どこか気まずげにそっぽを向く教頭に、思わずクスリと笑いが漏れた

「教頭先生つたら、素直じゃないんですね、本当に」

「は？俺が？何を言ってるの早乙女ちゃん、俺ほどに……」

「巴さんのこと、忘れたことなんか一度もないですよね」

「……っ」

教頭が口ごもる。

「入学してきて、事故のこと知った時からずって他の子より気にかけてたのに、前に城戸くんと巴さんの話が出た時は忘れた振りなん

かしちゃって、そんな人が素直だなんてわたし笑っちゃいますよ？」

「……はあ、はいはいその通り、俺の負けだよ  
早乙女ちゃんの言う通り俺は世界で一番の捻くれ者さ」

「もう、そんなないじた言い方しないで下さい」

「まっ、でもさ」

ドシリと、階段に腰掛ける教頭

そこには何時もの気取った様子はなく、だが、何時も以上にスーツが似合って見えた

「こんな捻くれた性格になるような生き方してきたからこそ、見えるものや手の届く場所がある

それで巴とか城戸みたいなガキの手助けが出来るなら、それも案外悪くはないよ

前にも言っただけ俺子供嫌いだから、さっさと一人前の大人になってもらわないと」

そんな生き方だったから浮いた話の一つもなかったけどね、自虐的な内容を何でもない調子で笑いながら教頭は言う。  
それを見た早乙女はというと、

「っ！……！！……！！」

赤くなっていた、ついでもじもじもしていた。

何やら恥じらいのある様子、ただ正直あまり年甲斐はない。

「？、どうしたよ早乙女ちゃん、トイレなら早く行った方がいいよ？」

教頭は鈍感主人公のテンプレートそのまま台詞を吐き出してくる。そこらのツンデレという名の暴力系ヒロインならば、デリカシーがどうと言って殴り飛ばしているところだろうが、早乙女には堪えない。

伊達に歳はくっていないということだ。

「あ……あの……教頭先生………」

「だからどうしたの早乙女ちゃん、なんか変」教頭先生は目玉焼きは完熟ですか！？それとも半熟派ですか！？「……………は？」

意味不明、理解不能。

声を出されるまでもなく、教頭が怪訝としているのが伺えた。

「……………早乙女ちゃん、脈絡なさすぎて意味分かんないよ、なんでいきなり目玉焼き？」



「良いから答えて下さい！……お願い、します」

思い返せば、彼氏にこっぴどく振られた時のやけ酒に、最後まで付き合ってくれたのは彼だけで、

次の日二日酔いで死にそうな状況で、誰もが怪訝な目を向ける中、本気で心配してくれたのも、やはり彼だけ。

「あー、うーん、そうだな……」

「……………」

真つすぐに、彼を見る。

胸が今までになく高鳴っているのが分かる。

気がつけば、その問いは自分の代名詞となっていた。

自覚はない、けれど、そうなるまでに繰り替えされていたということは、きっと自分が何度もその経験をしてきたということなのだろう。

相手の価値観に振り回されて、拳げ句に捨てられるという経験を。

なんにしろ、何度も出された問いだから、

受ける側も求められている答えを分かりきっているようで、噂では学校中に広まっているらしい。

だから、きつと、もしかしたら、気付いてくれて、応えて……

「ってか俺金持ちだから目玉焼きなんて貧乏臭いものは食わな」教頭先生のバカあー!」「うごおっ!?!」

さおとめ の 『乙女の鉄拳』!!

きゆうしよにあたった!!

こっかはばつぐんだ!!

きょうとう は たおれた!

さおとめ は けいけんちを 913 手に入れた!

きょうとう との しょうぶにかつた!

でも めのまえはまつくらになった!

「バカバカバカ!教頭先生のバカああああああっ!!」

もしかしたら先に走って行った真司以上のスピードで、早乙女は昼の街へと消えて行った。まだ仕事残ってるのに。

「わ、訳が、分らない、ん、だ、が……………ガクッ」

きょうとう も めのまえがまつくらになった!

同情は必要ない、乙女（笑）のピュアハートを傷つけた者の当然の末路である。

鈍感とは、すなわち罪なのだ。

冷たい風が吹いて、枯れ草の転がる音が虚しく響いた。校舎内だけだ。

――よくよく考えれば、教頭の言おうとしていたことは自分の求めていた回答だったと彼女が気づくのは、随分先の話であるが、多分それを語る機会はない、多分。

ふと気がつけば、時計は既に帰宅してから半刻以上たっていることを知らせていた。

「……………」

目だけでそれを確認して、それでおしまい。

また視線は、一度も手をつけていない紅茶へと落ちる。

少しの揺らぎもない水面は、暗く落ち込んだ女の顔を映し出す。

それが自分だと気付いたのは、どれほど時間がたってからだろうか。そう思ったが、実際は一瞬であつたらしい。

時計の長針は一つも動いてはいなかったから。

「……ダメね、こんなじゃ」

口では気を取り直したようなことを言ってみる。

だが、目の前の女の表情はまるで変わらない。

一体、何をここまで沈んでいるというのか。

これから帰ってくる彼を何もなかったような笑顔で出迎えて、本当に何もなかったことにすればいい。

それでおしまい、それこそが最良の選択。

わかっているというのに、何がここまでわたしを沈ませるのか。

一体、何が……

「マミさあんっ!!」

「っ!!!?!」

急に空間が開けたための空気のまぜ返し、聞き覚えのある叫び声と、一瞬で意識を引っ張られるに足りすぎるものを一辺に喰らい、顔が跳ね上がる。

そうして目に入っしたのは鹿目さん、いつもはほんわかとした表情は

病にかかったかのように引き攣り、対象的に顔色はザクロのように真っ赤だ。

「……鹿目さん、何があったの？」

どうかしたの？等と聞くのは無駄だ、何かがあったことなど彼女の様子を見れば誰だって分かる。  
そう冷めた考えをしている自分にも、大して何も思いうことなく、

「さ、さやかちゃんの病院に、魔女がつー！」

予想通りと言えばそんな報告を、ショックを受けながら、だがどこか淡々と受け取ったのだった。

## 第一部最終話　それが俺の願いだったんだ（中編）

走る、走る、走る、走る、いつかの繰り返しのうちに、脚の筋肉を張らせ、喉を枯らせて。

強い日差しの子節にはまだ早いというのに指先や顎から流れ落ちつづける汗が、彼の運動量と必死さを痛ましく示していた。

それでも、その足を止めるわけにはいかない。

元々少ない心当たりのある場所は全て廻った、なのに、見つからない。

今すぐに話したいのに、それは叶わない。

「どこにいるんだよ、マミちゃん……………！！」

妙な焦りが、真司の心で燻り続けるのみだった。

まず部屋に戻った、だが誰もいない。

玄関の扉は無用心にも開け放たれ、テーブルには、まだ暖かい飲みかけの紅茶がつい先程まで人がいた証として存在していた。

急いで外に飛び出し、まだ遠くには行っていないはずだと近場から探し回った、だが見つからない。

いつも行くスーパーマーケットや、魔女探索の際のルート、どこを探しても、マミは見つからない。

「まさかまだ学校だったか？ いやでもそれだったら早乙女さんと

かがなんか言ってただろうし……………」

汗は地面に落ちるたび、さながらタイムリミットを刻む時計のよ  
うに音をたてる。

焦燥感を煽らせるその存在を必要以上の力で拭うことで否定し、と  
にかく一度学校まで戻ろうと右足を踏み締める。

（あーあーテストス、ちゃんと繋がってるかい？）

「!？」

途端、足に籠った力は行き場を失った。

「キュウベえ！お、お前一体どこから!？」

（探しても無駄だよ、いま君の近場にはいないから）

確かに真司のいる周囲には隠れられるような植え込みなどはなく、  
いくら小さい体躯のキュウベえと言えど、声が届く範囲に居るなら  
余裕で気づくはず。

だけでも、真司は辺りを見回し続ける。

「じゃあどっから話しかけてんだよ、テレパシーとか言うんじゃないだろな」

（御明察、まあ僕らは『念話』と読んでいるけど）

「……おい、俺そんなのできるなんて初めて知ったぞ」

（聞かれなかったからね）

そういえば、まどかとさやかがたまに言葉を交わすこともなくニコニコと見つめ合っていたことを思い出す。

『これが目と目で通じ合う仲ってヤツか』などと納得していたのだが。

（ちなみに君を客観的に見ると一人で騒いでる変人そのものだから、君も頭の中で話した方がいいよ？）

「へ？」

言われて、周りの喧騒がザワザワと言うよりヒソヒソな感じであることが伝わってきた。

『ママあの人なーに？』

『しっ！見ちゃいけません！』の黄金コンボまで耳に入ってきてやがったのでした。

（ちよっ、そういうのは早く言えよ！！）

（敢えて繰り返そう、聞かれなかったからね）



（ああ…もういい、それより何で急に？なんか用事か？）

（っとそうだった、テヘツ、いけないいけない）

飯喰う時にしか開かない口から舌をペロリと出して、耳から生えた何かの片方を頭頂部にコツンと当てた無駄に可愛いキュウベえの姿が見えた。  
ぶん殴りたくなった。

（よっしゃ早く言え俺の拳が怒りの矛先を決めるその前に）

（地面でも殴ってなよ）

「だらつしやあ！！」

#### 戦績

城戸真司 - アスファル・トノユカ

決まり手：敗者側の右ストレート（自滅）

備考：この一戦は今世紀始まって以来の駄目試合であるともっぱらの――

（なにやってるんだい君？）

「お前がやらせたんだろが……」

悪ノリは用法・容量を守り、節度をもって正しくお使い下さい。

（まあ冗談は置いておいて、用件なんだけど）

（イタい……思ってたよりイタい……）

（実は今僕たちちょっと魔女の結界の中にいるんだよ）

（イタ………は？）

キユウベえは随分重い内容を、随分軽い調子で言い放った。

偵察隊が口笛なんかを吹きながら敵の核保有を伝えてきた気分になせられる。

（おまつ、どういうことだよ！？それに僕『たち』って！！）

（僕とさやかだよ、孵化直前のグリーンフシードが作った結界に巻き込まれてね、まどかもいたけど彼女にはマミを呼びにいつてもらったから

僕らがここにいれば、到着したマミがグリーンフシードを探す目印になれるからね）

（マミちゃんを？……それですれ違いになったのか）

放置された紅茶も、玄関の鍵が開けっぱなしだったのも、理由が

それなら余程急いで出たということに納得できる。  
なんにしろ、マミが何処に向かっているのかわかったのは、状況的に良い言い方ではないが好都合だ。

（俺もすぐに行く、場所教えてくれ）

（ああ……………ううん）

だが、キュウベえは唸るような声を漏らすだけで、明らかに渋っている様子。

（おいどうした、早く教えろって）

（……………城戸真司）

これらの会話は全て念話である。  
よって当然相手は目の前ではなく、どこか遠くにいることになる。  
だというのに、

（やっぱり、君は来ないでもらえるかな？）

あの深紅の目が、強い拒絶の色を宿して自分を睨んでいるように感じてならなかった。

(……お前、こんな時にふざけんなよ)

(ふざけてなんてないさ、そもそも君を呼ぶっていうのもさやかが言い出したことだね

僕としては、君が念話の範囲外に居てくれればいいと願ったほどさ)

(んだよ、それ……)

突如として並び立てられた刺々しい言葉に、出すべき音を見失ってしまう。

だが、今はそんなことをしている暇はない。

(……お前が俺のこと嫌ってるのは、まあ分かる、結果としてお前の仕事を邪魔してるわけだからな  
でも今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ！？さやかちゃんも、お前だって危ないんだぞ！！)

(その点は問題ないよ、ここの魔女はそれなりに強力なようだけど、魔力から見てマミが負ける相手じゃない)

(そういう問題じゃ……)

(そうだよ、そういう問題じゃない  
論点がズレてる、いや、わざとズラしてるのかな?)

(なに?)

（マミの様子がおかしいこと、君だって気づいているんだろう？）

淡々とした、獲物を追い詰めのものにより適した口調は止まることを知らない。

（マミがそうなり始めたのは、明らかに君と接触したあの日からだから、僕としては君にあまりマミと関わってほしくないんだよ）

（……………）

真司が黙ったことで、諦めたと判断したのだろうか。  
キュウベえは小さく息を漏らして、

「……………悪いな、キュウベえ」

（え？）

続けて、珍しくも驚きだけを見せる声を漏らした。

「その話は、もうさっき散々してきたばかりなんだよ、答えだつてもう出した  
だから、それだけ教えとく」

相手に見えるわけもない拳を強く握りしめ、念話ではなく、自身の喉を震わせて言葉を発する。

それでも、キュウベえの頭には同じ言葉が響き続ける。  
すなわち、

「俺はマミちゃんを助ける、どんなことがあっても、どんな風に思われてても……俺が、俺であるかぎりっ!!」

言葉の全てが、心からのものであるということに他ならない。

しばしの間、どちらともが黙り込み、周囲の雑踏さえ無くなったと勘違いしそうなほどに延々と続く。

と、根負けしたかのようにキュウベえからため息が漏れ（念のため言うておくが、念話である）、同様にポツリと言葉も漏らした。

（……見滝原病院）

「え？」

（その自転車置き場だよ、念話が届くような距離ならそう遠くはないはずだ、来るなら早く来てね）

（あつ、ああ分かった！今すぐ行くから待っててくれ！）

（ホントに急いだ方がいいよ？君だってその年で臭いご飯は食べたくないだろうし）

（だから分かってる……って、はい？）

今、最後に謎の変な御言葉が聞こえたような。

（おや、気づいてなかったかな？）

聞き逃したい、全力で気づかなかったことにしたい。  
が、それを許されることはない、現実には絶望的な色を示して目の前でひたすらに踊り続ける。

（いわゆる『お巡りさん』という人たちだね、今君がいる場所に向かっているようだ）

（いや……いやあ、なにも俺目当てって決まった訳じゃ……）

（こんな時間にぶらついてる成人男性、おまけに一々挙動不審、そんな人間がついには虚空に向かって怒鳴り散らしたんだ  
周囲にいる人々は速やかに市民の義務をまっとうするはずだろうね）

（……………）

（さて、距離から考えて接触までおよそ一歩）

真司は全力で駆け出した、一秒でも早くマミと合流するために。  
別に警察が怖かったんじゃない、本当にない、断じてない、絶対に

ない。

ないったらない。

チョコレートやキャンディ、たくさんのお菓子の甘ったるい臭いと、様々な薬品類が放つツンとくる刺激臭。

相対するとさえ言える二つの臭いが溢れているその空間、魔女の結界は、文句なしに異界の名を受けるに値することだろう。

そんな場に、断続的に響く音が二つ。

迷いなく鳴りつづける音と、それに追従している小さな音。

前者はバマミ、グリーンフシードを刺激しないように変身こそしていないが、それでも足取りはいつもと変わらない、変えることはない。もう一つは鹿目まどか、バミの背中だけを見つめて、ただ一心にまっすぐ歩く。

「それにしても、随分と無茶をするものね  
あなたも美樹さんも」

歩きながら、バミは振り返ることなくまどかへと声をかけた。



「う、ごめんなさい……」

「大丈夫、謝る必要はないわ  
今回ののはなかなか冴えた考えよ、鹿目さん」

「は、はい、ありがとうございます」

いつも通り、厳しくも優しい、先輩としての威厳を感じさせる口調。

なのに、まどかはどこか違和感を感じていた。

なにかは分らない、分らないようにしているから。

だが、だからこそそれが強い違和感の原因となっていた。

しばらくして、まどかは意を決して違和感について尋ねようと息を深く吸い込む。

「……あつ、ほむらちゃん？」

息は、予定していた疑問ではなく、突然の来訪者の名前として吐き出された。

トンっ、と音を立てて、もう一人の魔法少女、曉美ほむらがマミとまどかの前に立ち塞がった。

名前を呼ばれたからか一瞬だけまどかに視線を向け、すぐにマミへと移す。

「バマミ、今度の魔女は」

パンッ

ドサッ

たった二つの擬音で、状況は終わりを遂げた。

「え？」

軽い炸裂音がした。  
そしたらほむらが沈んだ。

文に起こしても、たったの二行。  
それでもまどかがこの状況を理解できたのは、もう二つの情報のおかげである。

「言ったわよね？『悪人には容赦しない』って」

マミの手に硝煙をあげているピストルが握られていて、ほむらの右足首から血が流れているという情報の。

「なんで、こんな……マミ、さん？」

その疑問は、行動に対してのものだったのか。  
それとも、目の前に居るのが本当に自分の知る相手なのかという戸惑いだったのか。

「大丈夫よ鹿目さん、麻酔弾だから、大丈夫」

「でも、ほむらちゃん痛がつて……」

「まあ専門外だから多少の痛みはあるでしょうけど、それでも死ぬことなんてないはずよ  
だから、大丈夫」

「で、でも！」

「鹿目さん？」

マミがピストルを倒れ伏すほむらへと放り投げながら、視線だけでまどかへ振り返る。  
なぜだか、まどかはその視線に『射抜かれた』と感じ、ゾクリと震えが走った。

「わたしは『魔法少女』で『正義の味方』よ、だから大丈夫、大丈夫なのよ」

「マミさん……」

マミは投げ捨てたピストルに手を翳すと、ピストルは強く輝き、リボンへと姿を変えてほむらを曝しあげるように拘束。それを施したマミは、一瞥をくれることなく先へと歩きだした。

なんの因果関係もない二とを『だから』と結ぶマミ。

大丈夫、大丈夫としきりに口にする彼女に、まどかは胸にざわつきを覚えた。

嫌悪感や、恐怖の類ではない。

それでも、体は小刻みに震えている。

『彼女を一人にしてはいけない』、そんな考えが胸に根付いていた。だから、

「ま、どか……行っちゃ、ダ………」

「……………ゴメン、ほむらちゃん」

落ちてくる臉に必死で抗い、自分へと見えない手を伸ばしてくるほむらに踵を返してマミの後を追ったのを、責めれる者はそうないだろう。

最深部まで後少し。

そこまでは、ただ無言だった。

一刻も早く美樹さん達の元に駆け付けれるためにも使い魔に見つかってはいけない、という点では妥当な行動だと思う。

そういう意図から話さないだけ、話せないわけじゃない。

「あの、マミさん……」

「なにかしら」

沈黙に耐え兼ねた、というわけでもなさそうな口調で、鹿目さんが声を掛けてきた。

それに返したのはびっくりする程に平淡な声。

一瞬誰の声かと疑ったが、それはまさしくわたしのものだった。

「『契約』とか『願い』のこと、わたしなりに色々考えてみたんです」

幸いにも、鹿目さんは大した反応を見せずに話を続けてくれる。その内容は、今わたしが一番に気にしていること。

「決まりそうなの？」

尚も平淡に響く声で、内心で興奮しながら尋ねる。

「はい、でも、考え方が甘いかもしれないけど  
真司さんの言ってた『割り切ること』とかも、結局まだちゃんと答  
えをだせてないし……………」

「……大丈夫よ、いいから言ってみなさいな」

一瞬、胸が高鳴る。

それをわざと平淡とした声で押し潰す。

「わたし、昔から得意なこととか誰かに自慢出来るようなことと  
か、何もなかったんです

きつとこれからも誰の役にも立てずに迷惑だけをかけ続けて生きて  
いくのになって、不安で、辛くて、悔しくて……………」

不意に言葉が途切れる。

少しだけ聞こえる、息を深く吸う音。

「でも、マミさんや真司さんと会って、二人が誰かのために戦っ  
てることを知って、わたしも同じことが出来るかもしれないって言  
われて、そのことが何よりも嬉しかった

……だから、わたしの『願い』は魔法少女になったらもう叶っちゃ  
うんです

こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって胸を張って生きていける  
それが、わたしにとって、一番の嬉しいこと……………」

ふと、自分の表情が震えていることに気づく。

だけど、それも仕方ない。

たとえ地獄であろうと、ついてきてくれる優しい魔法少女。なかま

わたし正義に憧れてくれて一人にさせない誰か。

ずっと欲していた『モノ』が今まさに、一度に――

「でも……今はなんだか、ちょっとだけ違うんです」

「えっ？」

振り返り、立ち止まる。

「あの時、真司さんが今まで戦ってきたことを話してくれた時わたし、すごく怖かったんです

ずっと笑顔だった真司さんがとても辛そうで、なんだか、どこかに消えちゃいそうで……」

振り返ったことで、鹿目さんと視線がぶつかった。

その視線のあまりの熱さに、喉笛が鳴る。

「……戦いが辛いつてことを、何となくだけど分かったら、真司さんやマミさんがそんな中で苦しんでいるって気づいたら、わたし、思っただんです」

ああ、そうだ。

辛い、苦しい。

一人でずっと戦って、一人ずっと苦しんで、やっと仲間が出来たと思えば、それは『魔法少女』じゃなくて、だから……

- - - あれ？

『魔法少女』は『正義の味方』で、そうだ、だから、苦しくなくて、でも、一人はいや、辛い、嫌だ、怖い、違う、辛い、怖くない、正義の、だから、思ってたない、一人が辛いなんて、思っちゃいけない  
だって、だって？あれ？あれ？

「マミさん」

「っ！？」

鹿目さんはいつの間にか一歩近づき、両手でわたしの手をそっと包んだ。

鹿目さんの手の優しい冷たさで、混乱していた頭が覚めていく。

「わたし、魔法少女になりたいです

魔法少女になって一緒に戦いたい

自分が胸を張られるように、でもそれ以上に、少しでもマミさんと真司さんの辛さや苦しさを一緒に背負ってあげたい



それが――わたしの『願い』です」

……その言葉は、ずっと求めていたもの、聞けばきつと感涙の涙を流すほどに。

なのに、なぜ？

言葉は青龍刀へと姿を変えて、わたしの胸を貫き、心を痛いほどに冷やしていく。

「……………マミさん？」

何か聞こえた気がした。

でも、返している余裕なんてない。

痛い、胸が、痛い、しくしくと、青龍刀だけでなく、無数の針に刺されるように。

なんで？なんでこんなに？こんなの知らない、わからない。

一体どうして、あの人の顔が浮かんでくるの？

なんで、そんなに悲しそうな顔をしているの？

わからない、いや、わかりたくない？、わたし、わたしは……

（まずいよマミ！グリーンフィードが孵化を始めた！早く来て！！）

ドロドロ渦巻く頭に、キュウベえの甲高い声が響く。

考えている暇はないらしい、でも、痛みは消えてくれない。

「マミさん、今の！」

「ええ、急ぐわよ」

孵化間際ならもはや今の姿でいる理由はない。

ソウルジェムからの黄色い光がわたしを包み、魔法少女へと姿を変える。

「伏せていて」

突き出した右腕全体を包むように大きめの砲が装着される。

そして爆音、砕け散る重厚の目の前にある壁。

その先にあるのは、使い魔が多いので避けていたグリーンシードへの最短ルート。

「つう…耳があ……………」

「鹿目さん、わたしがルートを確保するから、それまでここに隠れてて」

「ふえ？ちよつ、マミさ……………」

最後まで聞くことなく穴へと飛び込む、砲を外して代わりに両手にマスキットを握る。

また胸の痛みが増した気がした。

あれだけの爆音だったからか、開いた穴を見ていた使い魔一同は、そこから飛び出したわたしにひどく自然に視線を集めた。

全身が真っ黒、小さな体にナース帽を被って、おあつらえ向きにもダーツの的のような顔をしている。

降り立ちながらその顔の中心を打ち抜くと、さすがにこちらが敵であると理解したらしい。

虫が捻り潰された音をあげて、使い魔全てが突進してくる。

「……邪魔よ」

足に魔力を込め、地面を踏み付ける。

するとわたしの全方位からマスキットが数十本生え出て、突進してきた使い魔にぶつかり、一部を跳ね上げた。

跳ね上がった者は両手の空銃で叩き落とし、ぶつかった者は地面に刺さっている銃もろとも蹴り上げる。

そして近づいて来る者は、空銃を放り捨てて蹴り上げた銃を以って全て撃ち抜いた。

殴打、蹴撃、射撃のオンパレード。

数の有利なんて無意味だと、その証明のごとく使い魔は数を減らしていく。

完全なまでの圧倒、なのにそれでも、胸の痛みは止まらない。

……戦うっていうのはそういうものなんだ  
自分を、ともすれば他の誰かも傷つけてしまう

その通りだ、だからわたしは仲間が欲しい、ただ一人で戦い続けるなんて耐えられない

違う、たとえ同じ魔法少女でも、誰かに頼ってなんかいけない

- - - さやかちゃん達は願いを叶えればいい、だけど戦いは俺が引き受ける、たったそれだけのことだろ？

無理だ、そんなことが出来るのは、していいのは『魔法少女』だけ無理だ、わたしには出来ない、戦いたくない、誰か助けて

- - - 確かに、あいつらの『願い』は誰かのためのものだったと思う

でもきつと、その『願い』はあくまであいつら自身の『願い』だったんだ

そんなことはどうだっていい、魔法少女は正義の味方だ、願いなんて二の次だ

それはとても大事なことで、わたしには出来なかった、だからみんなには……

「うつ、くつ、ううう……」

いたいいたいいたい、むねが、あたまが、こころが、ぜん

ぶが

やめて、おねがい、やめて、このままじゃ、だめ、こわれちゃう  
わたしが、『魔法少女<sup>わたし</sup>』で、いられなくなる……！！

「ティロオっ！！！」

なんだって……

「ステルミニオオオオオオオオオオオツッ！！！」

なんだっていつのよっつ！！！！

「うううやばいやばいやばいやばい」

「……遅いね、マミ」

「ね、ねえ、今マミさん達どの辺りにいるの？」

「マミは一応そろそろ着きそうな場所にいるね、だけど真司は魔力とかが無いからさっぱり分からない」

「そっかあ、うう…早く来てよお……」

さやかが胸に抱えているキュウベえを一掃強く抱きしめる。  
つまり今キュウベえは背中にめっちゃ『押し当てられている』、キュウベえ死ね、朽ち果てるキュウベえ。

グリーンフィードの目印となるために結界に残ったさやかとキュウベえは、今まさに、様々な巨大お菓子の中心、やけに高い足の椅子に佇むグリーンフィードの御前にて、マミ達の到着を待っていた。だが、正義の味方の登場を待つことなく、怪物の卵は今にも孵化しそうに光の点滅を繰り返している。

(……ってーか、わたしこんなとこで何してんだろ?)

ふと、そんなことを思う。

そもそも目印になるのは微弱な魔力反応を持っているキュウベえで、念話も彼を経由しなければ使うことは出来ない。

つまり、今ここに美樹さやかという少女がいなければならない理由は、何一つとしてないのである。

(まあ、体が勝手に動いちゃったのよねー……)

どこかしみじみと、数十分前のことを思い出す。  
病院の駐輪場に突き刺さっているグリーンフィードを見つけて、マミのいつか言っていたことを思いだし、次の瞬間には『あいつ』のことで頭がいっぱいになって。

（ははっ、どんだけ大好きだよ、わたし）

思わず笑いが漏れる。

つまりは、ここにいるのは『あいつ』のため。

実際にためになるのかは知らないが、『あいつ』が心配で仕方なかったというわけだ。

そのせいで死ぬかもしれないというのは、どうにも笑えないが。

（でも、状況としては悪くないのかも）

死へのカウントダウンのように光の点滅は続く。

ママ達が着く前にここから魔女が産まれてくれば、キュウベえ共々死ぬしかない。

だけど、ただ一つだけ生き延びる方法もある。

「大丈夫だよさやか、いざとなれば君が契約すればいい話さ」

キュウベえの脳天気な言葉の通り、今契約すれば魔女と戦うことが出来る。

倒せるかは分からないが、少なくともママが来るまでの時間稼ぎぐらいは可能だろう。

叶えたい『願い』もあれば、まどかとの『約束』もある。

真司が言っていたことがまだキチンと理解できていないのは少しひ

つかかるが、なんにせよ、

「……そうだね、最後の手段としては、ありかも」

今美樹さやかは、踏ん切りをつける何かを欲しているのだ。

「っ！！」

「ん？どったのキュウベえ？急に身構えて」

「グリーンシードの魔力が活性化し始めた……、まずい、来る！  
！」

「ちよっ、言っただそばから！？」

ドクンと、空間が脈打ったのを感じる。

逃げる間も、悲鳴を上げる余裕もなく、遙か高くから降り注いだ光が一人と一匹を包み込む。

やがて取り戻した視界に、それが飛び込んだ。

マントを付けたピンク色の二頭身。

身体に比べてあまりに長さの足りない手足をぷらりと下げ、垂れ気味の黒目だけの眼は何も考えていそうにない。

その風貌は、どこか夢の国のお姫様であるキャラクターにさえ見え  
てくる。

少なくとも、二つのかよわき命を一瞬で刈り取るであろう悪魔に思



えるものではなかった。  
ただ一つ、

「さやか、契約を！さやか！！」

「あ……、……や、あ………！！！」

少女の純な覚悟をへし折るまでに、ドス黒い悪意を除いては。  
もはやさやかの心には親友との約束も少年への恋慕もない。  
全て根こそぎ吹き荒らされてしまった、絶望という暴風に。

「あ………」

目が、合った。

尻餅を付き、歯をカチカチと鳴らしながら手繰りで後ずさる。  
だが、視線は魔女とかちあつたまま動かせない。  
易々と逃げられるものではない。  
絶望からも、魔女からも、迫りくる死からも。  
視線の外せないままに多くの、実際には一瞬の時が流れて、ガクン  
と、突然視線の交わりが解けた。

「……………へっ？」

間抜けな声からも分かるように、さやかから外したわけではない。かといって、魔女も故意にというわけではないらしい。何故なら、落ちていつているからだ。

鎮座していた椅子が突如として傾き、魔女はヒュルリヒュルリと風を切りながら地面へと向かう。

いや、ちがった。

落ち行く魔女を迎えるのは地面ではない、それは先までの緊迫した状況に横槍ならぬ横銃を入れた犯人。心を折られた少女が無意識に助けを請い続けた正義の象徴。

「マミさああああああん!!」

魔法少女、バミミがそこにいた。

二つの瞳を、闇色に淀ませて。

「はあ…はあ…ふい……さ、さやかちゃん!」

「はっ!ま、まどかつ!?!」

自身の横から飛んできた声に、勢いよく立ち上がる。

間もなく視界に飛び込んできたのはまどか。

いつも以上に血色がよく、桃色の頭髪にも負けないほどであった。

彼女は荒れきった息を膝に手について整えると、さやかへと顔をあげた。

「ふう、ふう、けほっ、けほっ、さやかちゃん、大丈夫……じやない？もしかして」

「なっ！……なんで…？」

「だって、真っ青だよ顔色、なにかあったの？」

「べ、別に……ってか顔色だったら、あんただってどうしたのよ息までそんなに切らしてさ」

「それは……」

スツと、まどかは魔女と対峙しているマミへと視線を移した。ちょうど魔女が具合の良い位置まで落ちてきていたらしく、両手で握ったマスキットのフルスイングが魔女を大きく吹き飛ばしていた。

「……なんだか、マミさんの様子がおかしいの」

「は？おかしいったって、むしろ絶好調みたいだけど」

「そうだよ、それにたとえ不調でもマミならあれぐらいの魔女には遅れは取らないさ」

「そっ、かなあ？」

首を傾げ、一瞬それた意識をもう一度マミへと戻す。  
偶然にも、キュウベえにさやかもいっぺんに視線を動かした。  
そして、見えたのは――

マスケットで椅子の足を一本へし折ったことで、そこに座っていた魔女は必然にわたしに向かって落ちてくる。

……考えるな、何も。

魔女を倒す、今はそれだけでいいのだから。  
強く一步踏み込み、マスケットの握り絞る。  
そのまま腰の捻りも加え、

「ふっ……！」

ジャストミート。

銃身は魔女の顔面へと吸い込まれ、柔らかく重い感覚が手に伝わる。  
その重さに相応しい高さへと吹き飛んだ魔女へと向けるようにして、  
新たなマスケットを宙に召喚、数は三丁。

同時に広がる射撃音。

三つの弾丸、当たったのは二つ。

だがそれで十分だ。

着弾の衝撃で落下が始まるまでに若干の隙ができた。

落ちはじめる前に、一気に魔力を練り上げる

――集中しろ。

わたしは魔法少女だ、正義の味『いたい』方だ。  
何も辛『いたい』くなんてなくて、誰か『いたい』に憧れ『いたい』  
られるのは『いたい』当『いたい』然。

だが『いたい』ら間違『いたい』ってるのはあの人で、鹿『いたい』  
目『いたい』さ『いたい』

|       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |
| 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 | 『いたい』 |

黙れ！！

「はあああああ………！」

手の中に産まれるいつもの何倍もの輝き。

やがて輝きは形を成し、身の丈を越える砲へと変わった。

それでも、輝きは収まらない。

見る者の全ての視覚を焼き付くすまでに、暴力的に煌めき続け、砲の姿を変質させる。

やがて出来上がったのは、砲を易く越える超巨砲。

備えつけられた銃口は二つ、いや、二門と言ったほうが正しいだろう。

それほどまでにその砲は巨大だった。

実際、身体力の殆どがそちらへと持っていていかれたのを感じる。

だが、だからどうした。

わたしは魔法少女だ、苦しくなんて、苦しくたって、

「ティロ・ファイナーレ……」

苦しくたって戦わなきゃ、わたしは………！！

「セカンドツッ……！！」

一門目、下部砲口からの小さめの弾丸は確かに魔女へと着弾した。貫通や爆散するわけでもない、だが効果はすぐに現れた。

魔女の体内に留まった弾丸は瞬時にリボンへと姿を変え、表皮を突き破り四方八方の巨大菓子を足場とした蜘蛛の巣状に展開する。

さあ捕まえた、これで終わりだ、正義の一撃を……

途端、魔女の口元より、溢れ出した

「え……………」

あれはなんだろうか、こちらに向かってきている。  
ずいぶんとはやい、まっくらだ。

つきだされた鼻が怖い。

焦点のあわないめが怖い。

ずらりと並んだ牙も、全部、ぜんぶが……………

あつ、そうか

あれは、『死』か

(ひ、き、が、ね、を)

『死』は近い、だから、撃てば当たる。

(うごけ、うごけ、うごけ、うごけうごけうごけうごけうごけ…  
………)

指が、冷たい、それだけ。

(あ)

耳元に響いた破砕音、目の前に広がったガラクタの山、飛び散った金属片の一つが頬を切る。

ティロ・フィナーレ、バマミの代名詞にして魔法少女の証。

幾多もの魔女を屠った巨砲は、菓子のように易く甘ったるく異形の顎に消えた。

何も聞こえない、血の滴る頬にさえ何も感じない。

でも、見える。

パパがいる

笑ってる

ママも

笑ってる

それにわたしも

お弁当を持って



とても楽しそうに  
そして

(あれ……………)

変だな、

おかしいな、

どうして、

今見える景色なのに、

パパとママで一杯のはずなのに、

どうして、

どうしてこんなに、

(あの人の笑顔が、たくさんなんだろう……?)

死が大口を開いた。そして、

## 第一部最終話　それが俺の願いだったんだ（後編）Aパート

走る、何度目だとお叱りを受けるかもしれないが、城戸真司はとにかく走っていた。

周囲には転がっている薬瓶やら食いかけの菓子やは、躊躇なく蹴飛ばし踏み砕く。

身には結界に入る前に纏った龍騎の鎧。

首からかけた手鏡が前後に揺れ、勝負を焦る乗馬師の鞭のように龍騎を叩く。

そんなものに逸せられるまでもなく、龍騎の足は、そこらの竜など寄せつけない速さで動いている。

しかし、その勢いさえも止める代物が龍騎の前に現れた。

「ん……………？」

龍騎は、一瞬それが何か分からなかった。

次に、オブジェなのだと思った。

左右の二カ所ずつから伸びた黄金のリボンが、中心で螺旋を描き、螺旋の中心には長い黒髪の少女が納められている。

少女はあまりに美しく、さながら童話の中の眠り姫のよう。

そして、その眠り姫の顔に気付いた時、龍騎はそれが何かを理解した。

「なっ！　ほ、ほむらちゃん！？」

驚きの中でリボンの一つを掴み、見入る。

黄色の布地を金の刺繍などで豪華に飾り付けている。

それを龍騎は知っていた、見間違うはずもない。

戦いの中で、何度も助けられたものなのだから。

「ん、まど……………」

「おっと」

龍騎が騒ぎ立てたからか、ほむらは目蓋を震わせ、身体をよじり始めた。

龍騎は考えるのをやめて、慌ててバックルからカードを引き抜く。

すぐさま、それをバイザーへと読み込ませた。

< S W O R D   V E N T >

胸元からセイバーを引き抜き、空いている手でほむらを支えると、そのままりボンを一本ずつ切り裂いていく。

早くマミに追いつかなければ、という気持ちも強いが、やはり放つてはおけない。

この判断が正しかったと悟るのは、随分すぐのことである。

「う…んん……………っ…！」

身体をリボンから龍騎へと預け代え終わった時に、ほむらは完全に覚醒した。

「目え覚ましたか、なあ一体なに、いい！？」

バレルロール、機体を樽に見立てて横転を加える操縦技術。戦闘機によって用いられるそれが、龍騎の腕の中で炸裂した。させたのは、無論抱えられていた少女。

龍騎を弾き飛ばすほどの勢いのまま着地。だというのに、よろけることはない。

むしろ、勢いをそのまま脚力へと昇化させて、一気に駆け出した。

「なっ！？ちよっ、ちよっ、ちよおお！？」

龍騎は大慌て。弾き飛ばされた時に、セイバーを落としたことも気づかず、咄嗟にほむらの手を掴む。

「お、落ち着けて！別に誰も取って食おうとか……」

「離してっ！！」

「っ！」

予期せぬ大声に、思わず身じろぎする。

それはほむらも同じだったらしい。  
だが、すかさず自分の黒髪を掻きあげると、冷淡に戻った表情で言葉告げた。

「……………ここで時間を浪費するのは、互いに得策ではないわ  
絶望は、もうすぐそこにまで迫っているでしょうから」

「絶望？いきなり何を……………」

「今起こりえる絶望は……………」

龍騎の戸惑いが収まるのをを、遇えてか、そもそもどうでもいいのか、ほむらは待とうとしない。

「巴マミの死亡、それに伴っての、まどかの契約……………」

「……………しほっ？」

死ぬ？ 誰が？ マミちゃんが？  
明らかに後者より軽く放たれた言葉を、理解はできた。できたからなんだ。納得？ してたまるか。

「なんで…そんなこと分かるんだよ!？」

「話している時間はない、重要なのは、互いの利害が一致してい

るということ」

「なに？」

「貴方は巴マミを死なせたくない、わたしはまどかを契約させた  
くない」

そうでしょうか？とほむらは首を傾げる。

その通りであるため何も言えず、龍騎はただ頷いた。

「いいわ、では急ぎましょう」

「あ、ああ、わかった」

ほむらの言葉のままに、龍騎は走り出した。

が、すぐにほむらが後についてきていないことに気付き、足を止める。

「？ おいほむらちゃん、何をもたもたと……」

振り返り様の目を焼く、紫の光。

眩んだ瞳が次に見たのは、先程までとは違った服装の少女と、銃さ  
ながらに自分へと突き付けられた盾。

「走っ  
ていては間に合わない、だから、今から『跳ぶ』わ」

「と、とぶう？」

「そう、そして、貴方に求めることはただ一つ」

言いながら、ほむらはもう片方の手を盾へと添える。

「目の前に現れた敵を、思うがままにぶん殴りなさい」

ガチリと、何かが噛み合う音が響く。

次の瞬間、そこには誰もいなかった。

- - - -

例えば、交通事故に遭った時。

例えば、不治の病を告げられた時。

人は死と直面した時、見ている光景がゆっくりと流れるそうだ。

それには、『アドレナリン』やら『エンドルフィン』やらの所謂『のーないぶっしっ』なるものが関わっているらしい。

らしい、あくまで『らしい』。

実際そのことについてなんて全然知らないし、これからも知ることなんてないかもって、そう思っていた。

ただ、一つだけ知ったのは、この現象は、死の当人にのみ起こることではないということ。

だって、今まさに、

「うつ……あ……」

死を端から眺めているだけのわたし達にさえ、それが起こっているのだから。

目は見開き、喉は枯れる。

間違いなく、その場がいた全員がその状態。

頭の中では、マミさんを救うための映像が、現れては消え、現れては、消え。

なのに、それを実現することも、させようとさえも出来ない。

勇ましく弓を握るはずだった指がさ迷う、脚がさつきまであった覚悟を笑い飛ばす。

身体はどこを探しても、一片の希望もありはしない。

わたしは、どこまでも、どこまでもどこまでも、ちっぽけで、情けなくて、弱いだけの、わたしのままで。

（ごめんなさい、わたしが、弱虫だから）

だから………

（誰か、マミさんを………）



- - - 助けて

歪む。

時空が、空間が、運命が

現れたのは、目について離れぬ赤と、消えることのない黒。

さあ - - - オンステージ  
開幕だ

「がああああああつ！！！！」

突如として響いた絶叫に、その場にいた全員が一瞬身を竦ませた。  
無論魔女さえも。

その一瞬が命取り、駆け抜ける紅、哀れ魔女の横面に、

「だりやあつ！！！！」

お姫様を救う騎士<sup>シンジ</sup>の拳が、深々と突き刺さった。

――『突き刺さった』のである

貫くことも、まして吹き飛ばすようなことも出来ず、背中に冷たい何かが流れた。

ギョロリと、魔女が龍騎に視線だけを落とす。

必然的に、魔女と目が合う。

と、魔女が身を引いた、正しく言えば、頭だけを。

力を入れている音が聞こえる。

きっと今魔女を真上から見てやれば、巨軀は腕、顔は拳。

「マミちゃん!!」

「っ!？」

迫りくる殴打に、龍騎はかろうじて反応できた。

自分のことなど微塵も考えていない反応だが。

マミと魔女との間に割って入れたことだけでも、龍騎にとっては奇跡だった。

「うぐう!？」

「きゃっ!」

マミを抱え込む形で、背中を撃ち貫かれたの感じる。次の瞬間に身体は宙を舞っていた。

それでも、なんとかして身体を反転させ、受けた痛みとこれから来

る痛みのために歯を食いしばる。

「――っ!!」

間もなく背中に鈍痛が走り、続けて地面に削られた。

覚悟をしても痛いものは痛い。変身も解除され、しばし身を悶えさせる。

そんなことをしている間に、まどかが駆け寄ってきた。

動けるようになったのは、真司の咆哮が良い発破となったのだろう。

「だ、だ、だっ、大丈夫ですか!？」

「ああ…、悪い、マミちゃんを……」

「う、後ろおおお……!!」

「!？」

さやかかの絶叫が、魔女の追撃を知らせた。

相手が倒れたら追撃のチャンス、戦う者であるなら常識だ。

そして、魔女とは戦いが大半を占める存在である。

走り出した牙は止まらない。本能の赴くままに相手を喰らい尽くす。今一度迫る死、絶望的な状況。

「耳と目ふさいで!」

そこに一石を投げ込んだのは、もう一人の乱入者、曉美ほむら。投げ込んだ一石の名は、スタングレネード。

閃光炸裂、爆音招来。

突然のそれに、魔女は堪らず狙いを上へと反らし、上空に避難した。テロリストを鎮圧する用途の兵器が、人知を越えた凶悪犯にも有効であることが証明された瞬間だった。

「まどか、無事！？契約は！？」

「えっ、し、してない、よ？」

「そう……………よかった」

「……………君は、口を開けばまどかの契約のことばかりだね？今はもっと他に気にすべき事があるんじゃないかな？」

「……………」

まどかの安否を確認したほむらに浮かんだのは安堵の表情。だが、キュウベえに声を掛けられると、自分の髪をそつと掻きあげる。

髪がもう一度背中に降りた時、顔色は全て消えうせていた。軽く鼻を鳴らし、真司へと歩み寄る。

彼の腕の中で黙り込んでいるマミや、脇で未だ呆然としているさやかには目もくれない。

「行くわよ城戸真司、目眩ましはいつまでも続かない」

「いや、でも……………さやかちゃん！」

「はい！？え？あ、ああ、なに？」

真司の呼び声に、さやかは大袈裟に体を震わせて応えた。

「ちよつとの間、マミちゃんのこと頼める？」

「う、うん、分かった」

言われ、さやかが視線を落としたマミには、何もなかった。

頬の切り傷から滴る赤い血がアクセントとなり、顔色の青白さをより一層に他者へと印象付ける。

瞳は空っぽで、口は半開き。両方ともに五感を司る器官ではなく、ただの穴であるようにさえ見えた。

つまるところ、命あるモノとは一切思えない有様だったのだ。

「マミちゃん……………」

誰が口にしたのか分からない。しかし、誰であってもおかしくはなかった。

「……………」

「感傷に浸っている時間はない、どのみち魔女を倒さなければ全滅に……………」

「魔女？」

「っ！」

フラリと、マミは立ち上がった。

内股気味でふらつき、一人で立っているとは到底思えない。四肢に糸を繋がれ、上からぶら下げられているかのようで。

「魔女が、いるの…？」

「……………バミ、貴女は必要ないわ

今の貴女が居ても、足手まといにかなりえない」

「なっ！ ほむらちゃんそんな言い…方……………」

ほむらの言葉にまどかが声を上げるが、それが最後まで続くことはなかった。

なぜなら、共感してしまったから。

ほむらの言葉は、今のマミの状態にピッタリと嵌まり過ぎていたのだ。

「足手まとい？わたしが？」

……ふっ、ふふふふ、何を訳の分からない」

周りの思いに気づかず、マミは不敵なように笑う。  
それさえも、あまりに空虚だ。

真司はもはや、見ることにすら辛かった。だが、

「……………ほむらちゃん」

「なに」

「悪いんだけど、ちよつとの間だけ、魔女の相手しててくれないか？」

真司の言葉に、一瞬の思考。

魔女、マミ、まどか、キュウベえへとせわしなく視線を走らせ、最後に真司を見遣る。

舌を打つ音が生々しく響いた。

「……………5分よ、それ以上は待たない」

「ああ、わかった、ありがとう」

真司の礼を最後まで聞くこともなく、ほむらは戦場へと飛び出した。

真司もまた、それを見送るのは一瞬で済まし、マミへと向き直る。

「何処へ行くというの、曉美ほむら、魔女は、わたしが倒すのよ？」

よたよたよたよた。一步、二歩とマミは進む。本来の彼女より、あまりに遅いスピード。

それでも、少女は進むのを止めない。進む先など見えないが、見る必要などないのだとして止まらない。

奈落の底に堕ちるまで、奈落の底に堕ちたとしても。止まらない、止まらない――

「マミちゃん」

「……！」

――止まった

しっかりと握った手、もう放さない。

「放して下さい城戸さん、魔女を倒さないと」

「……マミちゃん」

「なんで邪魔するんですか？やっぱり正義の味方は魔法少女じゃないとダメですね」

「マミちゃん」



「言いましたよね？貴方には分からないって、もう忘れたんですか？だったら何度だって言ってあげます、貴方にわたしのことなんて」

「マミちゃん!!」

「っ」

マミがビクリと震える。ここに来てようやく見せた、人らしい反応。

しかしそれはすぐに消えた、いや、消した。

「……なんなん、ですか？あ、貴方には、わかりっこないって、言ってるでしょ？何度言わせれば……」

「覚えてるよ、あの時マミちゃんに言われたこと、全部」

「だったら！……全部？」

疑問が、口を衝いて出た。

「ああ、全部だ。俺への拒絶も、『一人ぼっちになっちゃっ』って言葉も、全部覚えてる」

「…っ!？」

あの夜の別れの日、マミは確かに拒絶した。だけど、その中に一っだけ紛れていたのだ。

彼女の心の内にある、全ての行動の意味。一人の少女が、叫ぶ声。

「ち、違う…そんな意味じゃ…ない、わたしは、魔法少女だから、だから……！！」

「マミちゃん」

何度目かも分からない呼びかけ。

「俺に散々分からないって言うてるけど、マミちゃんだって、分かっ  
てない……！」

「え？」

予想だにしなかった反論に、視線を上げる。

その視線と、自分の視線とをしっかりと交わせながら、城戸真司は語りだす。

ただ、己の胸の内を。

「俺が！良いお嫁さんになるだろうなとか！センスが良いなとか！勉強も出来てすごいなとか！

それに……一緒にいたいって、そう思ったのは!」

籠った感情により震えた声で、言い紡ぐのは、

「魔法少女なんて関係ない、普通の女の子の、マミちゃん自身のことなんだ!」

「……………っ!」

たった一周間、その間に真司の見つけた、『巴マミ』の凄い所、尊敬する所、そして、好きな所。

「俺だけじゃない、早乙女さんもマミちゃんのことを心配してたし、あの教頭先生だって!」

二人とも魔法少女のことなんて知らない、それでも、マミちゃんのことを凄く大切に思ってるんだよ!」

「……………先生」

マミが呟く、今までより明らかな色の付いた声で。  
瞳もまた空ではなく、ゆらゆらと揺れていた。

「あ、あの……………」

「！」

怖ず怖ずと、まどかが一步前に出た。

「わたしなんか言つのは、おこがましいのかもしれないけど……、  
だけど……」

視線は俯き、声も震えている。それでも、一言一言、マミへと伝えていく。

「わたしも……、もし、魔法少女なんて関係なくマミさんに会ってても！きつと、友達になれたって！そう思います！」

「わっ、わたしもです！マミさん！」

「美樹さん、鹿目さん……」

まどかと、その後続く、さやかという言葉。

揺れる、揺れる、魔法少女と巴マミが。

かつて器に押し込まれた欠片が、ざわめいている。

「なあ、マミちゃん」

「……………」

マミは何も返さない、それでも真司は語る。

ぬるま湯のようで、だけど身体を芯まで温めてくれる、そんな声。

「みんな、マミちゃんのこと的大事で、大好きなんだ

それは、マミちゃんが魔法少女だからとか、正義の味方だからとか、  
そういうのじゃ全然ない」

そつとマミの頭に手を撫でるように置いた。

突然の行動だったが、もう、マミの身体が震えることはなかった。  
だって、

「マミちゃんは一人なんかじゃない

だから、もう戦う必要なんてない、魔法少女でも正義の味方でもな  
くたって良いんだよ……！！」

だってそれは、ずっとずっと、言っただけだった言葉だから。

言われるわけがないと、思っていた言葉なのだから。

「……いいの？」

かつて、始まりの日にも呟かれた言葉が繰り返えさせる。

同じなのは言葉だけ、表情も心も、何もかもがあの時と違って、色

に溢れていて。

「わたし、城戸さんに、酷いこと、たくさん言っただのに？」

「気にしないでいいよ。昔もつと口悪い友達がいて、慣れてるからさ」

「わたしは、鹿目さんや美樹さんを、た、たかいに、巻き込もうと……したのに？」

「確かに仕方ないじゃあすまされないことだけど、でもまだ巻き込んでない、だから、大丈夫だ」

「わ、た……し……」

正義やら、魔法少女やら、ただの少女を包んでいた不必要に刺々しい仮面が取り払われていく。

その先に、顕現するは、彼女をそう足らしめていた、朱色の塊――

「パパと……ママを………見殺しに、したのに………？」

魔法少女も、正義の味方も、ここにはもうそんなものは居はしなかった。

いるのは、幼く無力で、犯した罪に震える、どこまでも普通の少女。孤独に抗い続ける運命など、背負えるわけが有りはしない。だから、真司はそっと抱きしめた。

震える少女を温めるために、

「大丈夫、大丈夫だよ」

魔法でも奇跡でもないけれど、それでも彼女を救えると信じて、呪文を口にする。

「マミちゃんはないんにも悪くない、お母さんとお父さんも怒つてなんかない」

もし怒ってても、その時は俺が一緒に謝ってあげる。そしたら、絶対に二人とも許してくれるさ。だって……家族なんだから」

「.....」  
「.....」

マミの瞳から、透明になった罪がポロポロと溢れ出した。その全てを、真司は己の胸で受け止める。一つたりとして、零すことのないように。

真司の知る『家族』。妹を救うためだけに、世界の全てを歪ませ

た兄のこと。

あの男がしてきたことの全てを、真司が納得出来る日は未来永劫来ないだろう。

それでも、そこにあった想いだけは、全力で肯定しよう。

その愛情は、確かなものであったはずだから。

やがて、マミから零れ落ちたものの全てが、真司の着ているマミの選んだジャージへと染み込んだ時。

真司はゆっくりとマミを体から放し、さやかへと声を掛けた。

「さやかちゃん、今度こそ、マミちゃんを頼む。」

「りよ、了解！」

マミにさやかの元へ行くよう促して、自分は戦地へと駆け出した。その背中を、キュウベえはどこか睨みようにして見つめていた。

「……だ、大丈夫ですか？マミさ……」

さやかがマミへと声をかける。  
だが、表情は見えない。

「……………美樹さん、ちょっと、ごめん」



「へ？うわっ！？」

と、自分を支えようとしていたさやかを振り払い、マミは真司を後を追って走り出した。

突然のことに、誰も何もできなかった。

ただと同時に、誰もが気づいていた。

その足取りはさっきまでのものとあまりに違っていた、ということに。

- - - - -

「待つて」

「！」

とても弱々しい声と震える手に、袖を引っ張られた。

力自体は弱い、振り払ってしまえば、きつと一瞬のこと。

だが、いや、ゆえに、真司はその手を、マミの握る手を払えなかった。

彼女へと向き直り、彼女の向けてくる、未だ潤んだ真っすぐな視線を、同じく真っすぐに見返す。

「大丈夫だってマミちゃん、俺が絶対に守ってやるからさ  
それとも、そんなに俺が戦うのって不安か？」

安心させるよう、少しおどけた口調で真司は言う。

なのに、マミは握る力を強めるばかり。それでもやはり弱々しいが。

「……不安です、それも凄く」

「うおっ！？ け、結構ストレートに来るなあ……」

「だって、戦いつてそういうものなんですよ？

とても痛くて、辛くて、苦しくて………死んじゃうかも、しれない」

マミの体が、また震えた。

自分が語っている苦痛の中に、後輩を巻き込もうとした自分の業にか。

それとも、これから目の当たりにしてしまうかもしれない、最悪の結末にか。

「……分かってる、それでも俺は戦うよ、戦わなきゃいけない」

「どうして！？ 貴方はわたしなんかと違うのに！ そんな、戦わなきゃいけない、理由なんて………！！」

「確かに、理由はないのかもしれない、でも、譲れないものはあるから」

「え？」

真司は空いている方の手で、変身が解けた時に落ちっぱなしだったカードデッキを拾い上げた。

真司の胸の中で、無双龍が咆哮をあげる。

「初めて会った日に、マミちゃん言ってたよな？」

『命を賭けるに値する願い、そこにある思いだけは、誰にも否定出来ない』って」

確かに言った。

ただ、まどか達を迷わせる真司を黙らせるためだけに言った、重みも何もない言葉。

「俺にとっては、これがそうなんだよ」

言いながら、真司は少しだけ笑った。

『自分だけが戦う』、そう口にした時と同じように、軽い感じで。

あの場にいた全員あの時は、随分軽々しく言うものだな、と少なからず思っていた。

だけど、それは違っていたのだと気づく。

軽いんじゃない、逆だ。重過ぎるのだ。

全てを押し潰す重圧となるほどの言葉を、平気で軽く背負い込めてしまうほどに、

「『戦いを止めたい』、『戦いの中で、誰かが死ぬなんてことのないようにしたい』  
それが、俺の『願い』だったんだ」

彼の願いが、覚悟が、重いのだ。

「そんな、ために、戦い続けるの？ 続け、られるっていうの……？」

「確かに、端から聞けば馬鹿らしいって思うかもしれない。だけど俺は、悩んで、戦って、決めた」

どこかの世界では、『人類の平和と未来を守る者』  
どこかの世界では、『異形の証を仮面で隠して戦う者』  
そして、城戸真司の世界では……

「終わりのない戦いだろうと、揺るぎのない願いで戦い続ける……  
『仮面ライダー』になるって、そう決めたんだ」

……… ああ、敵わない

巴マミは視界が白く染まる程にそう思った。  
自分もまた、『わたしは魔法少女だ』と叫び続けてきた。何度も何度も、周りと自分に言い聞かせるために。

対して、真司の叫びには、何もない。

自分を誇示するのでも、暗示にしているわけでもない。

余計な意味の含まない、あまりに純然とした雄叫び。

それが、こつも型に嵌まって、どこまでも響き渡るのだ。

それこそが、城戸真司という存在が、同時に完全な『仮面ライダー』  
という存在である証拠。

そうして沸き上がったのは『憧れ』という、抱いて欲しかったはず  
のそれ。

それでも、嫉妬やらの不純なモノは一切混じらなかった。

きつとそれはもう一つ、沸き上がった……というのは、適切では  
ないか。

もう一つの、浮き上がってきた、今までずっと沈めていて、何なの  
かさえ確かめなかった、想いのおかげ。

「…それじゃ、今度こそ俺は……」

真司はそう言うも、マミの手依然として彼の袖を握っている。

正直くどいと思ったようで、次に上がった声は僅かながら苛立ちを  
含んでいた。

「ああもう！まだ何かあんの……」

「ええ、あるわ」

「へっ？」

信じられないような、力強い声。つい押し黙らされてしまう。

「貴方の言った願いの中、絶対に無視してはいけない、大きな大きな矛盾がある」

「む、矛盾……？」

「誰も戦いで死ななくて良いように、自分が戦い続ける………気づかないはずがないわ、こんな悲しい矛盾」

今、マミは無表情だった。

しかし真司は気づく。それはこれまでの殺風景な表情ではなく、様々な色が混ざり合った果ての無色という色なのだ。

「誰かを守って、誰かの代わりに戦う、わたしには出来ないくらい痛い願いだって思うけど……でも………」

「だったら、一体貴方は誰が守るの？」

「っ、それは……自分の身くらい、自分で………」

「それをしきれないのが、戦いでしょう?」

真司はつい視線を反らしてしまうが、ママはもう片方の手にも手を伸ばし、彼の持つデッキごとそれを包み込んだ。

両親が死んで間もなく、『今君が生きているのは、きっとお父さんとお母さんが守ってくれたんだ。だから君は精一杯に生きるんだ』、そんなことを言った人がいた。

当時の幼い彼女は、全てのついでにそれも否定した。

だけど、今はその言葉を咀嚼して、そしてもう一度否定しよう。

言葉そのものでなく、言葉の本質、在り方を、巴ママは認めない。

「わたしは……今さら言ったとしても、都合の良いヤツだって、説得力なんてないって、そう思うでしょうけど……」

舌の根も渴かぬ内に、という言葉の通り。あれ程に利己的な言葉を並べ立てた口で、何を語ろうと通じるものではない。

されど、同時にこんな言葉もある。曰く、『目は口以上にモノを語る』。

「わたしは、貴方のようにになりたい

誰かを守るって、心の底から胸を張って、本気で言えるように  
今度こそ、大切な人を守るわたしになりたい」

「それが、わたしがたった今、改めて見つけた、わたしの『願い』  
……………」

マミの瞳は、確かな光を称え、真つすぐと見据えていた。  
秋山蓮、手塚海之、そして、今の城戸真司と同じように。

「それともう一つ、その『大切な人』の中にはね」

スツと、マミの表情から余計な色が抜けていく。

最後に残った色を、真司はよく知っていた。

一緒にご飯を食べて、一緒に学校に行って、一緒に服を選んで。その時の彼女が、見せてくれた色。

如何なる場所でも柔らかく揺れる彼女の美しい髪と同じ、輝けるまでの金色で――

「貴方も、真司さんも、入っているの」

――すなわち、『笑顔』。

「……俺の願いは、戦いの中で誰も死なせないことだ」

「わたしの願いは、みんなを、そして貴方を守ること、それを誇れる自分になること」

「なんか、お互いに噛み合ってるようで、噛み合っていない願いだな」



「ふふっ、そうね、でも一つだけ、一緒に叶えられる方法がある」

笑顔のままで、マミは取り出した。  
澱み一つなく輝いたソウルジェムを。

「わたしが真司さんを守る。真司さんがわたしを守る。そうすれば、二人とも生き残れるって思わない？」

「……………はあ、まったく、敵わないなあ、マミちゃんには」

そうですか？、なんて胸を張るマミに、つい苦笑してしまいながら、彼女を見つめ直した。

……………本当に、敵わない

だって、自分でも驚く程に、嬉しかったのだから。  
誰かと願いを共にすることが、とても、とても、とても……

「それじゃ、そろそろ」

マミが笑う。それだけで、真司の表情も自然と緩む。  
これからの戦いを前にして、負けないと、そして負けられないという想いが身体に満ち溢れる。

「ああ……いこうか、マミちゃん」

「はい、真司さん」

瞬間、互いの左手に握る力が向かい合い、交錯。

ソウルジェムに写った真司にVバックルが装着され、現実反映する。

どちらともなく、示しを合わせたような同じタイミングで、正面へ向き直る。

視線は戦場、願いは二つ、想いは一つ

真司は右手を左上、マミはジェムごと両手を正面に、全く同時に突き出して、

轟き、響くは、あの言葉……!!

「「変身っ!!」」

黄金の光が、二人を包み込んだ。



## 第一部最終話　それが俺の願いだったんだ（後編）Bパート

じり貧、というのが、その戦場に最もお似合いな言葉であつた。

「――！」

アンバランスにお菓子の山へ着地しながら、ほむらは舌を打った――  
――つもりになった。

実際は口の中はとつくに渴ききり、いくら舌を擦らせたところで音など立たない。精々歯に擦れて血が流れるぐらいだ。

戦闘が始まって、魔女が謎の爆発を起こしたのが数十度、受けた弾丸は数百にまで上る。

それでも魔女は倒れない。コミカルな、しかし醜悪な形相を面に張り付け、ケタケタと笑いをあげる姿は、子供の頃見た悪夢そのもののようにも思えた。

お菓子の魔女『シャルロット』

その性質は執着

本当に欲しい物に限って手に入らない

だから彼女はヤケクソになり、他の全てを欲しがりだした

お菓子も玩具も他人の命も、全部全部ぜえーんぶ

口内に溜まった血を雑に吐き出し、両方の手に握られたマシンガンからすぐさま弾をばらまく。

その勢いや豪雨の如く

とは言っても、結局は一点集中。

自由に飛び回る魔女を相手にしては容易く避けられるのが必至。

ほむら自身それを分かっているが、引き金を引く指から力を抜くことはしない、できない。

しかし、マシンガンは無情にも、カチリと渴いた音で己の力が尽きたことを知らせた。

「っ！」

待つてました！ 魔女の目がそう叫ぶ。

背骨どころか常識の存在さえ感じさせない角度に身体をうねらせて、ほむらへと突進する。

ガパリと開いた大口から覗く、獲物の首を容赦なく噛みちぎる鋭牙。それに一瞬歪んで映った自分の表情を、ほむらはキッと引き締めた。そうして次の行動に移る。

回避？否

防御？否

迎撃？イエス！

腰は落として足は肩幅。右手に備えられたラウンドシールド、それにある窪みをシャルロットへと突き付ける。

シャルロットの大口が、今まで以上の最高潮に開ききる。

さらに真剣に、強く表情を引き締めて、

ガクンっ、という漫画チックな擬音が見えて、片膝を突く形で見事

に崩れ落ちた。

(しまっ………)

運が悪かったとか、そういうものでもなんでもない。完全にほむらの失態、今の自分のパラメータを見誤ってしまった。

右足をマミに撃ち抜かれ、そんな状態で行った多少では済まない『無茶』。

身体は既にボロボロだったのだ。

(5分も『待』たないじゃなく、5分も『保』たない……だったか………！?)

反撃になど転ずるべきではなかった。

素直に時間を稼ぐべきだった。

今さら何を思おうと、何かもがとろ過ぎる。

後悔は後に立つのみ。立たせた本人は消え失せるのみ。巨大な牙に飲み込まれて………

「はっ!!」

「どりゃあっ!!」

二つ重なった威勢の良い声と共に入った横蹴り、もとい、横槍が、シャルロツテを一気に吹き飛ばした。今度こそ、突き刺さったわけ

でもなく。

それをやった赤い方は着地と同時に大袈裟なガッツポーズを決めて、もう一人の黄色の方は、

「大丈夫かしら？ 曉美さん」

有り得ない、信じられない、そう思わせる優しい表情で、そんな言葉を宣ったのだ。

「……………邪魔だと言ったわバミミ、貴女なんて必要ない」

「そう？ でもそっちも满身創痕みたいだし、出来たら下がって鹿目さん達を守るのに回ってほしいんだけど……………」

「ついさっき死にかけたのをもう忘れた？ 正義の味方ごっこはホントに首を断ち切られない限り止めないつもり？」

攻撃的な視線と言葉に、マミが少しだけたじろぐ。

それに気づいた龍騎が歩み寄ろうとするが、マミはそれを手で制した。自分で話す事を決めた目は、ほむらをたじろがせ返す程に力強かった。

「あんなことのすぐ後だもの、信用なんてしてもらえないわとは思ってないわ」

「……………」

「でも、わたしは本当に貴女にも死んで欲しくないの  
正義の味方だからとか、魔法少女だからとか、そういうのではなく、  
わたし自身の想いとして」

「……………」

ほむらは相変わらずの仏頂面で、マミの言葉を受け止めた。

憎々しいという思いが微塵も隠されず燃える瞳を、刺し貫き殺さ  
んばかりにマミへと向ける。

炎の熱さに冷や汗を垂らしながらも、マミはその瞳を見つめ続けた。  
やがて、炎は彼女の目蓋で覆い隠されると、その持ち主も一緒に消  
え去った。

「消えた……………」

「とりあえず、ここは任せてくれるみたいね」

頬を引き攣らせて笑みを作ったマミの顎先から、ポタリと一つ、冷  
や汗が落ちた。

龍騎がそんな彼女の肩に、そつと手を置く。

それと同時に、莫大な破碎音が上がった。

二人同時に視線を移す。

身を起こしたのは――他の可能性などあるわけもないが――ついでさ  
つき蹴り飛ばしてからずつと地に伏せっていた魔女、シャルロッテ。



よほど蹴りの威力が強かったのか、コミカルな顔面に一部ヒビが入っている。

それと、もう一つ、

「笑ってるわね」

「ああ、半端なく楽しそうだな」

目は焦点を外れ、口元からは涎がダラダラ。

シャルロットは完全に『ハイ』になっていた。

魔女に人の精神状態がそのまま当て嵌まるのならば、だが。

もしかすると、魔女なりの歓迎の挨拶という可能性も、何京何塚分の一つの確率で有り得なくもない。

といっても、それはそれでご勘弁願いたいところである。

「ところで真司さん、今回も相手は飛んでるけど、やっぱり剣一貫で張り付いてみるの？」

「い、いや、あれはやっぱ無理があつたっていうか」

気まぐげに、龍騎は頭を軽く掻いた。

その様が妙に型に嵌まってしまっていたのだ、マミはついクスリと笑いを漏らす。

それにより気まぐさがさらに増して、大袈裟な咳ばらいでその場をごまかした。

「い、いや！でも大丈夫！一応まだ手はあるから！」

「そうなの？だったら……………」

空気を引き裂く、本来微小であるはずの音が爆発を起こす。

黒い蛇が、呪詛の笑いをばらまきながら宙へと飛び上がったのだ。

「…………お手並み、見せてもらおうかな？」

「オッケー…………任しとけ」

デッキからカードを引き抜く。

描かれているのは、真司を運命に巻き込むまでに長い身体を持った龍。

相棒とはきつと呼べないけれど、それでもずっと共に戦ってきたという奇妙な相手。

その関係に最も当て嵌まる言葉は、きつと…………

「行くぞ、戦友」

<ADVENT>

胸の鏡から飛び出した巨龍の首元に、迷うことなく飛び乗って。

「っしゃあ!!」

【ガオオオオオオオオ - - - - -ン!!】

人と龍とが織り成す響きを、開戦のドラとして打ち鳴らした。

「もう……あれだって十分に無茶じゃない」

やれやれ、とは眩かないまでも、肩を竦めずにはいられない。

ああ、まったく……

「本当に、目の放せない人よね」

呆れ顔を少しだけ赤らめて、あらゆる意味でそう思った。

ちなみに

「お邪魔するわ」

「うおっ！転校生！？あんだどっから出てきた！？」

「キュッぱい！？」

「ああ！キュウベえが踏み潰されちゃった！」

「ちよっ、転校生！早く足上げて！」

「ごめんなさい、今足痛いから動かしたくないの」

「キュウううううう！！！」

「キュウベえ死んじやうよほむらちゃあん！！」

外野ではシリアスも糞もなかったのであった。

- - -

何度も響く耳障りな衝撃音。空気の流れが荒れ狂い、そこらにある巨大な菓子を削って行く。残るのは粗雑で悪趣味なオブジェのみ。そんな空間を作り上げながら、二つの巨躯が空にて踊る。

黒い魔女、シャルロッテ

紅い龍と騎士、ドラグレッダーと龍騎。

その戦いは熾烈の一言。数え切れない程に打ち合い、その度にどちらかの身体に傷が増える。

しかし、同時にやや一方的でもあった。

ドラグレッダーの牙と爪、そして龍騎の握るドラグセイバー！。

対してシャルロッテは牙一つ、単純に考えて手数は倍近く負けている。

それだけじゃない。隙を見つけて一気に龍へとかじりつこうとする  
と、その瞬間シャルロッテの鼻先を弾丸が擦る。

バマミの援護射撃だ。彼女は止まることなく結界内を飛び回って、  
絶妙な場所とタイミングの発砲でシャルロッテの勢いを削ぎ落とし、  
動きを制限する。

この戦い、龍騎とバミが完全に流れを掴んでいた。

――掴んでは、いた。

たった一つの、しかし絶対的な事実が、戦局をまるで分からなくしていた。

「くっそ！またか!？」

ズルリと、シャルロッテの口から、新たなシャルロッテが這い出した。

これが勝てない理由、所謂『無限再生』。

どれだけ剣を振るおうと、ドラグレッダーが引き裂こうと、やがて  
その傷は消え去ってしまう。

必然的に、傷の数はドラグレッダーの方が多くなっていった。

このままでは結局じり貧、最終的にこちらが倒れて終わるだろう。  
ほむらと交代した意味がまったくくない。

こうなれば、

「一か八か……いや、零か百かだ!」

叫び、新たにカードを引き抜く。  
何を引いたのか。何をするつもりなのか。ドラグレッダーは見事に察してくれたようで、身を翻してシャルロッテから距離をとった。しかしシャルロッテもまた、その隙を見逃さない。牙を向きだし、一気に追撃を掛け、

「させない！」

その顎下に、マミが展開したマスケット群からの無数の弾丸が炸裂した。

巨大化も何もさせていないそれらでは、一瞬意識を逸らすのが精一杯。

だがそれでいい、その一瞬が必要だったのだ。

「さあてと！」

シャルロッテと十分な距離を取ると、セイバーを右手に逆手で持ち替えて、引き抜いていたカードをバイザーに読ませる。

< STRIKE VENT >

胸の鏡から飛び出した龍手甲、ドラグクローが左手に収まると、同時にその手を深く引き絞った。

それを合図に、ドラグレッダーがシャルロッテへと猛進する。シャルロッテは面を食らってしまった。

愚直な突撃だ。冷静な戦士ならば十分に迎え撃てる。

だが、シャルロッテは所詮魔女、知能は獣畜生と大差ない。

故に、反射的な怯みを見せた。戦いにおいて、一番見せてはいけないものを。

加速、加速、加速

速度は際限なく上がり続ける。

龍騎自身、低い姿勢でドラグレッダーの角を、セイバーを放り捨てて空いた手で掴み、ようやく吹き飛ばされずに済んでいる状態だ。

『速』さを『加』えると書いて『加速』、しかし実際に加えられるのはスピードだけではない。

風を切り裂くほどの勢い。

速度と比例し上がる威力。

風を感じることで得る精神の高ぶり。

それら全てが加わって――

「速さ×熱さ×根性」破壊力だ！こいつならあああああつー！」

通りすぎり際の零距离で、シャルロッテの顔面に、昇龍突破が炸裂した。

巻き起こる爆炎に、シャルロッテの巨軀全てが飲み込まれていく。

「やった！」

マミが高い声をあげ、小さいガッツポーズを取った。

まどかやさやかも表情を安堵に緩ませ、キュウべえさえ軽く息を吐き、龍騎に至ってはもう表現しようもない。

……気づいていたのは、一人と一頭だけ

「油断しないで！」

「え？うおわっ！？」

ほむらの叫びが響いたと思えば、ドラグレッダーがさらに加速する。何故と、そう思う暇もなく、

「っおお！？」

今度は急停止、慣性に逆らえず前へと飛び出して、宙に放り出されてしまった。

不様にも手足を振り回しながら、肌で空気の緊迫を悟る。

誰だっけ知っているように、一応生物であるドラグレッダーには緊急停止用のブレーキなんて物はない。

だから、こんな止まり方をするわけがない。



謎に頭の中を支配される。

空中を縦に一回転して、視界も回転すると、ようやく謎は消えた。黒く塗り潰されて。

「……………うそだろ？」

未だ立ち込める爆煙の中から、一筋、どす黒い蛇が飛び出して、ドラグレッダーの尾にかぶりついていたのだ。  
歪んだ笑み。暗い威圧。孕んでいるのは、間違いなく憎悪。

「っ！、間に合え！！」

マミが落ちていく龍騎にマスケットをブーメランのように投げつけた。

ちょうど龍騎の真下でそれは光を放つと、光が四方八方に伸びていきネットとなつて龍騎を受け止めた。  
直ぐさまマミもネットへと跳び移る。

「大丈夫！？怪我はない！？」

「あ、ああ…俺は……」

【ガオオオ………】

「「！！」」

力無い鳴き声に続いて、空間全てが揺れる。  
ドラグレッダーが、敗北を知らぬ紅の龍が、大地に叩きつけられた音だった。無双の折れた音だった。

【ガ、グ、ウウウウウウウ………】

常に勇ましく吠えていたドラグレッダーからそんな低い唸り声を聞いたのは、龍騎にとって初めてのことである。

それほどまでにドラグレッダーとは強大なモンスターであり、シャルロッテが如何に規格外なのかを龍騎へと思い知らせた。

それでも、ドラグレッダーは諦めない。

金色の目をぎらつかせ、シャルロッテへと挑みにかかる。

無双龍の名は、伊達ではない。

（城戸真司、バマリ）

「！ 曉美さん？」

突如届いた念話に、マリは念話と気づかず、声を出して応えてしまった。

（奴の再生能力は常軌を逸している、生半可な攻撃では通用しない）

「生半可？あれが！？」

シャルロツテへの警戒は緩めないが、龍騎はつい叫んでしまった。  
ドラグレッダーの紅蓮弾を最大の威力でぶつける技、それが昇龍突破。

その威力はモンスターどころか、並のライダーでさえも消滅させる  
ことが出来る。

さらにさっき放ったのは、今まで以上に勢いを付けた、言うなれば  
『強化型昇龍突破』と言っても過言ではないものだった。  
それを上回る威力を誇る一撃と言えば、

「あのキック、だけ……よね？」

最後の切り札、ファイナルベント、『ドラゴンライダーキック』に  
他ならない。

（……いや、もう一つだけある）

この状況を変えられる、最強の勝負札が。  
烈火を纏い、守りたいものの全てを『生存』させ得る黄金の翼。  
様々な意味で共に戦い続けたと言える友人との、奇妙な友情の証。  
胸に熱い炎を抱き、龍騎はデッキに手を伸ばす。

（……………あれ……？）

伸ばしたけれど、届かなかった。

（な、なんでだよ？なんで……震えてんだよ、俺の腕！！）

いつもなら迷いなくカードを引き抜いてきた左手が、『あの』カードを使うところをイメージすると、途端に言うことを聞かなくなってしまった。

訳が、意味が分からない。

こんなことは、今まで一度としてなかったというのに。

（城戸真司、何をボーツとしているの）

「っ！」

混乱一色に染まりかけた心が、ほむらからの念話で現実に戻された。

……もういい、使えないものにこだわっていても仕方がない。

無駄に時間を消費すれば、それだけシャルロツテを引き付けてくれているドラグレッダーに負担がかかる。

万が一ドラグレッダーがやられてしまえば、龍騎は一気に戦力外となる。それだけは避けねばならない。

（理想としては、巴マミの最大砲撃と城戸真司の切り札の同時発動だけだ）

「……無理、だろうな、素直に受けてくれるわけがないし」

「それにあれほどのパワーだもの、わたしの一度に放出可能な魔力を全てリボンに注がなければ、拘束は不可能でしょうね……」

最良の案は不可能となった。では妥協案を探さないとならない。といっても、実質二択のようなものだから、迷う余地などまるでない。

「……じゃあ、まず俺が囷になって」

「その隙に、わたしが魔女を拘束」

（そして城戸真司の最大の一撃を叩きこむ）

以上が、作戦とギリギリ言えるかどうか行動の一覧であった。

（本当に……上手くいくの？）

自分のすべき行動を何度か反芻している内、不意にそんな不安がマミの心に入り込んだ。

もし、あの一撃さえも通用しなければ。

もし、自分が魔女を拘束しきれず攻撃を躲されてしまえば。

もう打つ手はなくなる。あの魔女は決して自分達を逃がすことなく、血祭りにあげることだろう。

今まで壊れていたことで感じないつもりでいた恐怖を、ストレートに感じてしまう。

身が竦み上がり、息は僅かながら乱れ、

「ガオー」

「きゃあ!？」

目は丸くなった。これだけは内なる理由ではなく、完全な外側からの刺激によって。

はしたなく驚きの声をあげるのはマミらしくないと思うかもしれないが、いきなり強面な龍の手甲が目の前に現れたら、女の子なら誰だって驚く。

「ヤアマミちゃん、ボクノナマエハリユウベエ!」

「……どう見たって真司さんじゃない」

ドラグクロー改め『リュウベエ』は、随分と気持ち悪く高い声をしていた。

さらに、彼がしゃべると（仮面で見えないが）龍騎の口元もモゴモ

ゴと動いている。

「すみません、さすがに今そういうノリは……………」

「マミちゃん、マミちゃんハ『ネガイ』ヲミツケタンダロウ?」

「え?」

「ダツタラ……………」

ずっと、とリュウベエがマミへと身体を（実際は腕だけでも）乗り出した。

無機質なのに『力強い目だ』などと思ってしまっていた。

「こんなところで、止まってやるわけにはいかないよな」

「!」

「それでもって、それは俺もおんなじだ」

もうリュウベエはマミの目には入っていない。

少し上気した肌の少女の視線を、青年、城戸真司は捉えて止まない。

「生き延びよう、マミちゃん、最後まで諦めることなく」

「二人で、願いへと進むために」

・・・これは、一体どういうことなのだろう。

ついさっき気づいたばかりなのに、改めて、さらに強く、思わせてくれるだなんて。

だけど、自分ばかりがそうなのも悔しいので、少し憎まれ口を叩いてみたり。

「真司さん、声普通に戻ってるわよ？」

「え？あつ、しまった……………あーもういいや、それじゃあほい、マミちゃん」

龍騎は、ドラグクローをマミに差し出した。  
つい流れで受け止めてしまう。

「……………いや、ほいと渡されましても、こんなものをどうしろって？」

「お守りとかそんな感じで」

「それにしても大きすぎ……………」

（あなたたち、いつまでモタモタしてるつもり？）

「っと、ゴメンほむらちゃん、それじゃあ行くか！」



マミの引き止める間もなく、真司はシャルロッテの前に飛び出す。少し名残惜しく思いながらも、マミは戦いに向けて気を引き締め直した。

「……あつ、これ口動くんた」

しょうもないことに気付いたりもしていたが。

- - -

無数の紅蓮が、紅い巨躯が、どす黒い悪夢が、空間全てを飛び回る。『大怪獣頂上決戦』とでも銘打ってショーにしてやれば、とんでもない集客率を誇ることになるだろう。

ただ見る前に『わたしは死んでも構いません』と一筆書いてもらう必要があるが。

ドラグレッダーはシャルロッテ相手にそれなりに善戦していた。しかし、所詮そんな程度。

ドラグフレイムをばらまいて寄せつけないようにすることで、決定打を受けていないだけ。

いくらこちらのフレイムが直撃しても、牙や爪で引き裂いても、一瞬で無傷の個体として復活だ。

ワンサイドゲームですらない。そもそも勝負として成り立っていないのだから。

【グウウウウウ………】

それでも、ドラグレッダーの目は確かに勝利を見つめ続ける。  
無双は力だけの称号ではない、折れない魂の称号だ。

「ドラグレッダー、一回戻れ！」

【！】

徹底抗戦の覚悟を固めるドラグレッダーに、契約主からの呼びが掛かった。  
いつか喰らう予定の相手だが、契約している以上逆らえない。仕方なく、彼の傍らに舞い降りた。

ドラグレッダーを追っていたシャルロッテの視線は、当然に龍騎を捕らえる。

そうして見えた龍騎は一応拳を構えてはいたが、そんなモノが無意味なのは誰の目からも明らかで。ようするに、ノーガードとなんら変わらない。

獣の脳みそでもそれが自身への愚弄に等しい行為だと気づいたのか、シャルロッテは結界中に気味の悪い咆哮を響かせた。

心の弱い者が間近で聞けば、それだけで命を落としかねない。事実、さやかは腰を抜かしかけた。

それを受けてなお、龍騎はシャルロッテとまっすぐに対峙し続ける。咆哮の響きが消えるより早く、シャルロッテが動いた。

一直線で龍騎に向かい、大口を開いて、

「今だマミちゃん!!」

「はいっ!」

視界の端に何かが映ったと思えばすぐに、巨大な銃がシャルロッテを囲む。その数十二丁、さながら魔法陣の如く。マミは龍騎の隣に着地すると、クローを握っていない腕を怯んだシャルロッテへと突き付けて、

「縛れ!!」

勇ましく、力強く、堂々たる銃士として、命じた。

終わりを下す、その第一手を。

銃が爆ぜる。発砲ではない、銃自体が爆ぜて魔力へと変換される。続けてリボンへと再変換、濁流のごとき勢いでシャルロッテを縛り上げた。

再生によって脱出されないよう、顔面は嚴重に地面に張り付けた状態にする。

「真司さん!」

「ああっ!!」

力の源たるデッキから、最後の力を引き抜いた。  
右手に宿した紅龍にその力を注ぐ。悪夢を終わらせるために、未来

へと進むために。

結ばれた契約に応じ、機械の龍が咆哮を上げる。

絶対無敵の咆哮を。

無双を意味する咆哮を。

## <FINAL VENT>

「はああああっ！！」

両手を揃え、右腰、正面の順に滑らせる。正面に突き出された手は、  
いなか嘶く龍を形作る。

龍を宿した右腕は、護るべきものを護る盾のように。

武器を握るための左腕は、未来を切り開く矛のように。

そのままの構えで、腰を落とす。

それは無意味な舞踊ではない。

龍と心を通わせ、龍の力をその身へと宿すためのもの。

創痕に塗れた龍が、力を振り絞り龍騎の周囲を旋回する。  
それによって、無双の力が紅い光となり龍騎へと纏わる。

その紅い力が最高潮の輝きに達した時。

「はっ！！」

天高く、飛び上がった、

ドラグレッダーを引き連れ、狂った世界を見下ろす場所に。

身を捻らせて、高度を上昇させる。

そうすることで龍から宿した力を練り上げ、更なる威力へと昇化させていく。

その周りを龍が舞い、放つは人龍一体の――

『闇在れ』と賢者は言った。

それはつまり、こう意味だったのかもしれない。

バチンっ、と、何かが弾けた。

シャルロッテの尾の周辺のリボンが、引きちぎられた音だった。

先に言った通り、再生を防ぐために頭部を強く拘束しているため、そこから最も遠い尻尾辺りは比較的緩くなってしまうたのだらう。

マミは一瞬焦るが、頭を地面に張り付けているのでシャルロッテは動きようがない。だから一切問題はない。

だけど、

シャルロツテが暴れさせる尻尾の先に、巨大なキャンディーがあった。

尻尾にぶつかったキャンディーは、正面に吹っ飛んだ。

キャンディーの飛ぶ先には、

「なっ!?!」

「っ!」

「そんな!?!」

ドラグレッダーが、飛翔しているところだった――

【グオオッ!?!】

堕ちる。堕ちて行く。そして崩れる。

今まであらゆる敵を撃破してきた、最終の名に相応しい必殺が。間抜けにも宙で一人舞い続ける騎士を残して。

予想を超え過ぎた事態に、誰もが思考を停止させてしまう。  
その『誰も』には当然龍騎、そして巴マミも含まれてしまっていた。

「っ！しまっ……」

彼女自身すぐに気づいたが、時すでに遅すぎた。

魔力で編み上げられた美しいリボンが、ミチミチと嫌な音をたてながらちぎれていく。

汚らしい布切れに成り果てたりボンを下に、魔女シャルロッテが、完全に拘束から解放された。もはや、止まらない。

更なる絶望に、心の全てが砕かれる。

膝をつくさやか、震えるまどか、俯くほむら、目を逸らすキュウベえ。

そんな人間共の姿を見て、空中に佇む馬鹿を喰らおうと迫るシャルロッテの表情は、嘲笑うように歪んでいた。

これこそが揺るがぬ答えだと。

絶望こそが全ての終点だと。

希望などどこにもないのだと。

夢は潰されるものなのだと……

本当に、そうか？

「―――まだよ、まだいける！」

「ああ、まだ終わっちゃいない！！」

マミが叫び、龍騎が応える。

そこには迷いも戸惑いも疑いもない。  
そこには覚悟と信頼と願いがある。

何かをやる気らしいが、関係のないことだ。

その何かが完遂する前に騎士は魔女の胃袋に収まる。  
そんな距離で、そんなスピードで、

【ガオンッ！！】



そんなシャルロッテの鼻っ柱に、火炎弾がぶつかった。  
一体誰が、などとはもはや愚問だろう。

無双龍による、意地の一矢だ。

身体を粒子と化していくなか、ドラグレッダーの双眼で光が瞬く。  
『ざまあみろ』、そう言わんばかりに。

顔面を焼かれ、シャルロッテが止まる。

一瞬の停止。それは永遠の停止へと繋がる伏線。

一瞬の内に、マミが飛び上がった。

右手に龍を、心には願いを抱いて。

手甲に、ドラグクローに、残る魔力の全てを注ぎこむ。

龍騎に、影が重なった。

その影は『龍』。されど無双龍ではない。騎士の力に少女の魔法と  
想いを詰め込んだ、黄金に輝く魔力の龍だ。

マミの身の丈を優に越えた龍の開いた顎から覗くは、白銀の巨砲。  
今までのそれと違い少し汚れているが、それでも、いや、故にもう  
二度と、碎けることのない力。

魔龍が唸りを上げる。

徐々に唸りを大きくし、

それに呼応し魔力が輝く、強く強く。全ての闇をも、振り払うまで  
に。

マミの力を背中に感じ、龍騎は思いきり右足を突き出した。

『ティロ・ファイナーレ』、  
『ドラゴンライダーキック』、  
もはやそのどちらでもない。  
騎士と少女、二つの願いを一つに重ね、『龍』の力が『終わり』を  
告げる  
狂った歌劇の終幕を――

願いは潰える？絶望が全て？それこそが真理？

では、今絶望に立ち向かっている者はなんだ。

胸に熱い願いを宿しているのは誰だ。

心から叶えたいと思える願いを見つけたのは誰だ。

片や『仮面ライダー』

己の願いを追いつづけ、戦い続ける不屈の戦士。

片や『魔法少女』

全てに希望を振り撒く、奇跡と魔法の体言者。

願いある限り、果てなき希望をその胸に、命のままに前へと進む。

ならば、ならば！ならばっ！！

蹴り碎けぬものなど、撃ち碎けぬものなど――――あり  
はしないっ――！！

「――『ドラグ・ファイナーレ』 エエエツ!!!!!!」

「だあああああああああつつつ!!!!!!」

マミの操る魔龍から撃ち放たれた黄金の魔力を全身に浴びて、龍騎がシャルロッテへと強襲する。

その姿、まさしく黄龍。闇を切り裂き天を翔け、全ての絶望を払いのける。

圧倒的な力を前に、シャルロッテは動くことさえ許されない。

そして、シャルロッテの顔面に、深々と『突き刺さった』。

『突き刺さった』のだ

つい先の、始まりを告げた拳のように。

絶望は、繰り返す――――などということは、ありえない！

「あああああああああああああああああ……！」

仮面ライダーは止まらない。

叶えたい願いが、護るべき者が、共に存りたい人が、そしてその全ての願いが、

仮面ライダーを、龍騎を、城戸真司を、太陽の消えうせた闇の中であろつとも、まっすぐ前へと走らせ続ける。

その勢いは、シャルロットさえも巻き込んで、ただひたすらに突き進む。

それを見た者は知るだろう。

これこそが『Alive a life（生きている命）』。

これこそが『仮面ライダー』

生命の力の権化。少女と騎士の想いの結晶。

あえてもう一度繰り返そう

願いある限り、果てなき希望をその胸に、命のままに戦い続ける。

その力を、『生きる』ということをし、止められるものなど……

- -

-  
-  
-  
-  
-  
-  
ありはしないのだとっ！！

完全消滅。再生不可能。  
今ここに、勝負は決した。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

「う、うん、そう、そうだよさやかちゃん……」

戦いの喧騒は鳴りを潜め、彼女達を包むのは穏やかな静寂。立っているのは、一匹を除き全てが人間。

すなわち……

「……勝ったあああああ――――！！！！」

闇が晴れて、燃えるような夕焼けの下で、少女達のファンファーレが鳴り響いた。

「いよっしゃ！終わった終わったあ！」

場所は病院の屋上。一体いつの間に移動したのやら、結界というのも謎だらけである。

両手を有らん限りに延ばして、龍騎の叫びが木霊する。己の勝利を証明する叫びだ。

その拍子に変身も解け、元の城戸真司の姿に戻った。そしてそのまま、

「あつ、もう無理」

糸の切れた人形よろしく、背中から仰向けに倒れ混んだ。綺麗な『バタリ』という、ベタこの上ない音を響かせて。

「し、真司さん！？ちょっと大丈夫！？」

「あー、無理だ、なんかもう全身が脱力しきっちゃってて」

心配して駆け寄ってくるマミに、龍騎に変身していた男と同じとは思えない気の抜けた声で返す。

鏡の中から聞こえた唸り声は、呆れ返ったものだったかもしれない。

「もう、ほら、手を貸すからちゃんと……………」

フラリ、という音のない擬音が、その場の全員に確かに聞こえた。

『フラリ』、この擬音から連想する出来事は、そう多くないだろう。今回起きたのはそのスタンダード。正直これだけなら特筆するほどのことでもない。

ただ、今の状況をザッと確認してみよう。

1・仰向けに倒れてる真司

2・マミは真司を助け起こそうと、ちょうど彼の足元（というか股下）で、彼に向かった状態で前に屈んだ

3・そんな状況で、前によろけた

すなわち……………

「えっ」

「……………ほう」

「……………」

「ワオ、マミさんったら大胆」

さやか of 言ったことが全て。もうわかった人もいるだろう。  
それでも遇えて言葉としよう。  
何故って？そりゃあんだ、こんな状況を腹ん中にしまっとなんて  
無理な話さ。

まあともかく、今の巴マミの状態は……………

城戸真司の胸に真つ赤な顔を埋めた、完全に『愛しの彼を押し倒し  
ちゃった』状態なのだあ！！

「きゃっ！？えっ？えっ？ちよっ！？ちが、ちが、ちがちが違うの  
違うの違うんだってあつても温かくて落ち着いて汗の匂いもなんだ  
かってこれはそのあつとえつと、しっ、真司さああ……………ん！  
！」

「ああ…うん、大丈夫だよ、なんともない、俺はなんともないから。  
そう、なんともないんだ」



ちなみに、胸もめちゃくちゃ押し当てられている。  
当ててんのよフィーバーである。故意だけど。

「絶対なんともあんじゃないアレ、真司のドラグレッダーがファイナルベントだよ後にシュートベントだよ」

「さやかちゃん何にも見えないよー、なんで目隠しするのー？」

「まどかにはまだ早い！まどかにはまだ早い！！」

「ええー」

「わけがわからないよ」

「……………バミミ」

唯一微動だにしなかったほむらが、若干気怠げに声を投げかけた。  
この状態でも気にせず声を掛けられる。暁美ほむら、中々の猛者である。

「なななななにかしらアカミさん！」

「…………受け取りなさい」

名前の間違いも、目を細めるだけで特に触れることなく、マミと真司へ何かを投げた。

それは黒色で、尖った装飾のついた、

「これって……グリーフシード!?!」

「魔力からして、さっきの魔女の……………」

「使いなさい、貴女のソウルジェムはもう限界間近のはずよ」

「えっ?」

言われてソウルジェムを取り出すと、なるほど確かに、もはや元の色が分からないほどに濁ってしまっていた。

急ぎグリーフシードを使おうとするが、途中ではっとその手を止めて、躊躇いがちな目ではむらを見遣る。

何を言わんとしているのか察したのだろう。

ほむらは、舌打ちのようなため息のような、そんな音を発すると、自分のソウルジェムに懷から取り出したグリーフシードを押し当てた。

「理解した? わたしはグリーフシードのストックを十分に持っている少なくとも目の前で飢えた相手に恵める程度には」

随分と嫌みたらしい物言いだった。

それにさやかが声を上げる。

といっても抗議のものではなく、純粋な疑問。

「あれ？でもあんたって、グリーンシード欲しさにまどかを契約させなかったんじゃないの？」

「？ 何をわけの……………」

不本意だ、と言いたげに眉をしかめたほむらだったが、ふっと、キウベえへと視線を向けた。  
キウベえは空を眺めていたので、視線は交わらない。  
ほむらは憎々しい内情を隠すことなく、二の句を口にした。

「………… 他人の言うことを鵜呑みにするな」。もはや常識であると思えるのだけど」

「むっ、なんだなんだ？馬鹿にしてんのかそれ」

「ええ、大いに」

怒り心頭のさやかに、面倒だとはかりにほむらはさっさと背を向けると、病院内へと続く扉へ歩いて行く。

ドアノブに手を掛けると、そこで一度振り返った。

「鹿目まどか」

「は、はいっ！」

大変元気のよろしい声で返す。  
ちなみにまださやかが目隠しは健在である。

「まだ魔法少女になる気は？」

「っ、それは……」

まどかが口ごもり、（隠されている）視線を落とす。  
その表情には、夕闇が映し出す以上の影が差し込んでいた。  
それを見てほむらは軽く鼻を鳴らすと、まどかから視線を外してド  
アノブを捻り。

「そして、バマミ」

今度はもう振り返らない

「不本意だけれど、また会いましょう。生き残ってしまった以上は  
ね」

言っでドアを開け放つと、中へと滑り込む。  
律儀にもキッチンとドアを閉めて……

「ほむらちゃん！」

ほんの少しの隙間を残して、動きが止まった。

「その、あの時は、見捨てて行つてごめんなさい、それと………」

まどかが数瞬、視線を迷わせる。

（端からは見えないが）その動作から感じられるのは、戸惑いというよりも、『気恥ずかしさ』。

やがて、さやかに当てられている手をそつと外して、真つすぐな視線で、

「『助けにきてくれて』、ありがとう！」

「っ」

一瞬、ドアが、ほむらがまだノブを握っているであろうそれが震えた。

だけど、それは本当に一瞬。

ほんの少しの間の後、ガチャンと完全に閉じられた。

「まったく、まどか、何もあんなヤツに礼言つてやることなかったんじゃない？」

「でも、わたしが言いたかったから……」

「ふーん、まあ良いけど」

チラリと、視線だけを真司達に向けると、未だに立ち上がっていない。

さやかはどこか楽しそうに、「ふーん」という物を知ったような声を出すと、まどかの手を取った。

「ねえ、恭介の様子見に行くから、まどかも一緒に行こうよ」

「え？」

「あいつもたまにはわたし以外のクラスメイトの顔見れたら嬉しいだろうからさ」

ほら、ついでにアンタも来て」

「何故だい？、別に僕が行くような必要は……わかった、わかったから耳から手を離してくれ」

左手にまどかの手を取って、右手でキュウベえの両耳をわし掴んで、文句を言われる暇も与えずにガシガシ進む。

そのまま、彼女としては不本意だろうが、ほむらの後続くようにドアの中へと入った。

その間際にとても小さく呟いたマミへのエールは、果たして聞こえていたのだろうか。

「…………あれ？もしかして俺達追いてかれた？」

「そ、そうみたいね…」

「えー…みんなして薄情だなあオイ……」

寂しいやらなにやら、諸々含んだため息を吐いてみる。

当然ながら、何一つとして状況は変わらない。

そんな状況だが、何か救いがあるとすれば、仰向けで空を見上げる形になっているために見えるのが、堪らなく美しい夕焼けであることと、

「マミちゃん、ソウルジェムの濁りは取れたけど、身体は動くか？」

「えっ？えっ……と、ごめんなさい、まだ……」

「そっか…なら、仕方ないか」

彼女も一緒である、ということだろうか。

羞恥からか、顔を真っ赤にしているマミを見ると、なんだか無性に頭を撫でて、俗っぽく言う『いい子いい子』してあげたくなる。

真司は当然娘など持ったことがないが、この気持ちが所謂『父性愛』なのだろうと思った。

というより、理性が無意識にそう思わせた。主に歳の差的な理由で。

「ん？マミちゃん、ちょっとこっち向いて」

「え？…って、ひゃあっ！？」

マミから素っ頓狂な声が上がる。

真司がマミの頬に触れたせいだ。

既に限界だと思われるに顔はさらに赤くなり、頭はパンク寸前。

（待つて待つて待つてまだはやいまだはやいまだはやいまだはやいまだはやいまだはやいまだはやいまだはやいまだはやい！！！！）

「やっぱり、頬っぺた切れちゃってるじゃんか」

「真司さんこういうのはまずはAから…って、え？」

「ほら、ここのところ」

真司が言いながら触れた場所に、チクリと痛みが走る。

そこがティロ・フィナーレ・サカンドの残骸で切れた場所だと気づくと同時に、自分の誤解にも気づいた。

というか普通に考えてこの態勢からBをするのは少々キツイ。そしていきなりCに手を出すほど、真司はケダモノではない。むしろ紳士だ。変態という名のではないぞ。



「ああもつ、女の子が顔に傷なんか作っちゃって」

「ごめんなさい、でもこれぐらいなら」

「ちよつと待って、確かちよつと早乙女先生に貰った絆創膏が……あつたあつた」

「いや、だから……」

魔力を用いれば、これぐらいの傷は一瞬で癒える。そう言おうとしたけれど、止めた。

「……それじゃ、お願いしようかな」

今ここに居るのは、魔法少女であり、同時にただの女の子なのだから。  
少しぐらいなら、構わない、はずだから。

「んう……」

「！」

マミはそつと目を閉じた。

ただ絆創膏を貼って貰うのを待ってるだけ。

真司だってそれぐらいは分かっているけれど、何故だか唇を尖らせ

ているように錯覚してしまう。  
さらには編集部メンバーのはやし立てるような声まで聞こえてきて  
いるような気も。

（おーけーおーけー、ベリークールで行こうぜ城戸真司）

頭の中でそう唱える。

もはや何キャラか分からなくなってきた。

「は、はいつ、これでよし！」

見事邪念を振り切り、ほっぺに絆創膏を張るという超S級の任務を、  
城戸真司は見事に果たして見せたのだった。

「……………」

貼って貰った絆創膏に手を触れる。

真司が先生から貰って、貼ってくれた絆創膏。

それを温かく感じるのは、顔に血が上っているせいだけではない。  
マミは強くそう思った。

と、そんな折に、

「……くぁ……………」

小さな、可愛らしい欠伸が漏れた

「？、どうかしたか？」

「いや、なんだか、急に眠く……………」

『急に』と言いながらも、理由はなんとなく分かっている。  
それでも、口にはしない。

だって恥ずかしいじゃないか。

『ここがとても安心できるから』、なんて。

「…………ごめん、なさい…………ちよつと、ちよつとだけ……………」

「…ああ、いいよ」

「…ありが……………」

不意に言葉が途切れると、しばらく後、小さな寝息だけが、響くようになつていた。

真司は、起こさない程度に小さく息を漏らすと、遥か夕焼けを眺める。

そんなことをしていたら、彼もまた……………

――

「さーて、マミさん達はどうなってるかなーっと」

「う、うん……」

「ん？どうしたまどか、元氣ないぞー」

「いや…えっと」

「まどか、君はさやか of 行動に何か言いたいんじゃないかい？  
僕としても何故『上条くん』のお見舞いに行こうと言っていたのに、  
途中で引き換えして売店で時間を潰すことになったか、不思議で仕  
方が……」

「キユウベえ！」

「……べつつに大したことじゃないって！この時間は、恭介はリハ  
ビリしてるってのを忘れちゃってさ！  
今更それ言い出すのはちよっと恥ずかしかっただけ！」

「さやかちゃん……」

「大丈夫だよまどか、本当に、それだけだからさ」

「……………うん」

そんな風な会話をしながら、さやか達は屋上に戻ってきた。

さやかは万が一を考えて、ドアに耳を当てた。

猫が喧嘩するような声は聞こえてこない。どうやら問題ないようだ。まどかとキュウベえは突然の行動に疑問符を浮かべるが、これを怠ってその『万が一』に遭遇すると、互いに非常に気まずい空気が流れることを、さやかは少し違う経験から知っていた。

「さて……」

改めてドアノブを握り、一気に開け放つ。

病院の薬臭さとは無縁な爽やかな空気が、まどか達を感覚的に歓迎した。

そして、視覚的に歓迎したのは、

「むっ」

「ふーむ、何と言つか、『仲がよろしいことで』、って感じ？」

さやかの言葉そのままに、仲良く寝息を響き合わせている真司とマミ。

夕焼けに照らせている二人は、有名な絵画とは違うけれど、だからこそ絵になるワンシーン。

「で、どうしましょつかねえ」

「……もう少し、このままでいいんじゃないかな？」

言いながら、まどかは自分に笑みが浮かんでいることに気づいた。それほどまでに、心を温かくしてくれるほどに、その光景は、

「とっても、幸せそうだから……」

シャルロッテ・・・完全敗北

巴マミ・・・生存

運命は、変わった

## 第一部最終話　それが俺の願いだったんだ（後編）Bパート（後書き）

第一部最終章全編終了

久方ぶりの後書きです

まず第一に、ここまで読んで頂いた読者様に心からお礼を申し上げます  
たいと思います

本当にありがとうございました

書きたいことが多すぎてまさかのパート分割になっしまいました、  
最終章の後編、いかがでしたか？

いくらなんでも冗長過ぎたかも知れませんが、わたしの未熟故です、  
申し訳ない

ですが、少しでも面白いと感じて頂けていたら幸いです

どうやらわたしは、『年下女 年上男』だけでなく、『年上男 年  
下女』の構図で、「あれ？この子可愛い…」って待て待て！犯罪だぞ  
俺え！？」的な葛藤も好きだったようです

それでは、次は『エピソード』にてお会いしましょう  
次回も見えてね！！

……………関係ないけれどオースの最終回にもフォーゼの第一回にも  
間に合わなかった……

## エピソード 孤独（いま）の先の二人（みらい）

カチャカチャ、ジュージュー、そんな鼻歌。

某マンションの一室にして巴マミの自宅では、妙に美味しそうなメロディーが奏でられていた。

その一角を担うは、我らがヒロイン巴マミ。

ガラスのテーブルに、白いティーカップを並べていく。

テーブルの真ん中には、これまた白い色のポットが置かれていた。紅茶の入れ方にもいくつか種類があり、その中でスタンダードかつ本格的と言われているのが淹茶式だ。マミが入れる時もこの方法を用いる。

というより、マミは母親に教えてもらったこの入れ方しか知らなかったし、知識を深めようと思うこともなかった。だが、今は新しく覚えるのも悪くないかと、そう思い直している。それで彼や後輩たちが喜んでくれるなら、と。

（それにしても……）

ポットに触れて温度を確かめながら、思いを馳せるは昨日の出来事。

色々と、考えるべきことはある。

だけど、魔法少女である前の、一人の乙女としては……

（あれって、プロポーズ……に、なるの？）



何となくそのことが引つ掛かっていて、昨日はベッドに入りながら悶々としてしまった。

それでもあまり遅くならない内に寝付けたのは幸いだったろう。深く隈を刻んだ顔を引つ提げて平気でいるほどに女を捨てた覚えはない。

そんなことを考えていると、来客を告げるインターホンが耳に届いた。

「思ってたよりちょっと早いな」、なんて思いながら立ち上がって玄関に向かう。

応答用のパネルは無視して、ドアの鍵を開けた。

「ちーっすマミさん！みんなのさやかちゃんが遊びに来ましたよー！」

「いや、招待されたんだからその言い方はなんか……」

ドアの先に待っていたのは、勇ましいVサインを掲げたさやかと、そんな彼女に圧されているまどか。

「元気一杯でいいじゃない、歓迎するわ、美樹さん、鹿目さん」

それと、もう一人。

「もちろん曉美さんもね」

「……………」

まどかとさやかの中に、脇をガッチリ掴まれた状態のほむらは、不愉快の権化の如く眉間に皺を刻みこんでいた。

-  
-  
-  
-  
-

「どうぞ座って、今紅茶を入れるから」

「は「はいつす!」」

座りながらのさやかのハツラツとした返事は、一緒に言った箸のまどかのものも掻き消してしまうほどだった。  
一度言ったことを繰り返すのは気恥ずかしかったようで、言い直すことなくまどかも腰を下ろした。

「曉美さん、貴女も」

「お断りするわ」

ほむらだけは、座ることなくマミ達を見下ろしている。

ガラス玉を思わせる瞳だ。

マミは困ったように眉を八の字にしながら、ティーカップ全てに紅茶を入れ終えた。

甘すぎない紅茶の香りが、部屋を漂う。

「おいこら転校生、マミさんのご厚意を無駄にするっての？」

「来たくて来たわけじゃないし、むしろ来たくなんてなかった」

彼女がもう少し柄の悪い人間だったなら、間違いなくその言葉は痰と共に吐き出されていたことだろう。

スカートからスラリと伸びるほむらの足が、絶え間無く床を叩いている。

その音がいつ玄関へと向かう足音になるか、まどかは気が気でなかった。

「時間が惜しい、一度だけ聞いわ、何が目的？」

「そ、そんな言い方しなくたって……………」

「……………」

ほむらの口は一文字に固く結ばれ、まどかの窘めにも開くことはない。

重苦しい雰囲気は空気を沈め始め、ひど過ぎる閉塞感にさやかは限界を感じていた。

かといって状況を変える一手を打つことはおるか、考えつくことさえ出来ず、胸元のリボンを緩めて得る仮初めの開放感でごまかすしかなかった。

「……貴女を呼んだのは、話が、したかったの、貴女と」

「わたしが話すことなんてなにもない」

取り付く島もない。それどころか、取り付こうとした傍から狙い撃ちにされる。ほむらの言葉はまさに弾丸だった。

「それなら聞くだけでいい、だから………」

「……………」ちっ

二三秒たつぷりと間をとった後、ほむらは最早癖であるかのように舌を打った。

相変わらず座りはしないが、マミに向けられている視線は話を促すようなものとなっていた。

その視線と自分のを交わせながら、マミは『話』を口にする。

「わたし、貴女に謝りたいの」

「謝る、何を？」

「わたしとキュウベえが、貴女にしてきたことの全部を」

ほむらが目を細めた。

「許されると?」

「……………キュウベえも、貴女に酷いことをしたんだろうって思うけど  
わたしが貴女に言ってきたこと、やってきたこと、全部がとても酷いことだっていうのは分かっているけど……………」

まどかとさやかはハッと気づいた。

マミの瞳は、いつものような戦士や先輩としてのそれではなくなっていたのだ。

潤み、震え、しかし視線は真つすぐとして外さない。

その様子は、謝罪どころか『懺悔』と言って然るべきであろう雰囲気  
を漂わせていた。

ほむらも少し遅れて気づいたようで、目が柄にもなく真円になっている。

「許してほしい、だなんて言えないのはわかってる、でも、せめて、わたしに、償いを……………」

ほむらは何も言うことはない。変わらず口を閉ざし続ける。

だが、彼女の瞳が、顔色が、心に与えられた何らかの衝撃の大き

さを、見るものに強く知らしめた。

「どうして……」

唇を震えながら少しだけ開いては、何も告げることなくまた閉じる。

迷うようなその動きが、果たしてどれ程の間続いただろう。

永遠に続くかと思われた静寂から響いたのは、静寂と変わらないま  
でに冷たい硝子によく似た声。

聞き取れなかった言葉を誰かが、聞き直そうと――

「どうして今更っ――！謝るのよっ――！！」

硝子は、砕け弾けた。

マミへと詰め寄り、胸倉を掴む。持ち上げる力は、到底少女の細腕  
から出ているとは思えない。

「っ！？」

「ちょっ、転」

「貴女の！お前のせいで！わたしとあの子が！！どれだけ……どれだけ苦しんだとオッ！！」

怒りさえ超えた憤怒、悲しみまで超えた悲哀、それらをも上回る何か。

血反吐もろともに吐き出された言葉は、想像を絶するまでに赤黒く。

「許し！？償い！？だったら死んでよ！！今！すぐ！ここで！わたしに……わたしに……！！」

色ばかりが濃くて、他の全てが塗り潰されても、その上から何度も紅を、何度も黒を、何度も何度も、何度も何度も何度も、何度も何度も何度も何度も何度も……

……だからこそ

「……なんで、それなのに……なんでよう……なんで、なんで今更……」

赤にも黒にも塗れていなく、どこまでも澄んだ色が、際立ってそこに在る。

どちらかが本物で、どちらかが仮面。

見ればそう分かったつもりになって、ただどやはり分からない。

正反対な筈なのに、どちらもがどちらにもに馴染んでしまった、醜い

癒着。

だから、誰も触れない。  
遠近さえも狂ってしまって、自分が手を伸ばしているのが、弱々しい猫なのか、刺々しいナイフなのか、分からなくなるから。

「……………暁美さん」

「っ」

それでも、マミは立ち上がり、ほむらと同じ視線に立って、抱き留める。

「本当にごめんなさい……………貴女を、こんなに……………苦しめてしまっていたなんて」

「……………や……………あ……………」

「わたしは、死ねない、だけど、だけど、本当に……………」

涙の滲んだ声が、ほむらに染み込んでいく。

最奥に閉じ込めていた筈の何かが、ドクンと脈打ち、厚い塗装がポロポロ剥がれる。

その先に、白い……………

トンツ、と、ほむらの小さな手がマミを突き飛ばした。



「うつ……うつ……」

溢れだしそうになった慟哭<sup>うめ</sup>を、喉で絞め潰し、歯で噛み潰し。乱れながらも真つすぐに落ちる黒髪を、縋るように握りしめる。いや、その様相はともかくとして、事実ほむらは縋り付いていた。

「暁美さん……」

「……ごめんなさい、今日は、失礼するわ」

喉のさらに奥から絞り出された言葉は、引き絞り過ぎた拳げ句に、小刻みに震えてしまっている。

「ほむらちゃん!」

「ちよつ、待ちなよ転校生!」

呼び止められる声から、逃げる。

目を閉じて、耳を塞いで、心も必死に隠そうとして、玄関まで走り抜ける。

前なんて見ずに……

「さあさあ皆様！、真司くんのご馳走が出来上がりまし」

だから、ぬつと出て来た真司に気づくわけもなく真つ正面からぶち当たる。

本来なら『パフン』と可愛い音になるだけですみそつなものながら、そこは『魔法少女』であるわけで。

「え」

「あ」

「げ」

「なつ、ちよおおおおおおお！？」

跳んだ、というより、飛んだ。

シリアスからの急転直下に響く間抜けなBGMをバックにし、真司と持っていた皿とそれに乗っていた何かがスローモーションでフライアウェイ。

『のーないまやく』さん、早くもまさかの再登場でござるの巻。

色々と果然、というか『はあ！？』となっている間だって、止まらないものは止まらない。

このままでは生ゴミと燃えないゴミと萌えないゴミとが、撒き散ら

かることになってしまふ。

……だけど、僕たちにはいつだって『ヒーロー』がいる

「とうあつー!!」

怪人飛蝗男……ではなく、怪人ウナギネコことキュウベえちやんが、バツクより勇ましく飛び上がった。

第一に皿の確保、続けて落ちかけている何らかに先回って素早くお皿でキャッチング。

そして華麗に綺麗に見事に着地。

文句つかずの10点満点。

巻き起こった拍手の嵐（一人分）。

「あいだあつー!？」

「ああ！真司さん!？」

萌えないゴミは落ちました。

無様に貴様に情けなく。

文句さえなくオールスルー。

巻き起こった心配の嵐（一人分）。

「あ、頭打ったあ……」

「ええ！ い、今冷やすモノを！」

「いや、大丈夫、目眩とかはしないから……」

「……………」

目の前で繰り広げられやがった茶番のおかげで、ほむらの頭は随分と覚めていた。

先までの醜態を悔いるように一つ溜息をつく、そのまま真司らの脇を通り抜け。

「か、かくほー！」

「っ！？」

る前に、ガツシりと、まどかに右腕を掴まれた。

ほんの少しだけギョツとして、無言で引きはがそうとしたほむらだったが、思った以上に力が強く離せない。

「むう！ あれはまさしく『女神抱擁』！」

「知っているのかいさやか？」

「うむ、あの抱擁は一見腕の力だけで押さえているように見えるけど、実は背筋力もフルに使って自分の身体に押さえつけているのだ」

「へえ」

「ただその構えからわたしやマミさんではどうしても胸が邪魔になつてしまふ、だからまどかのような胸の小さな者にしか使うことの出来ない秘技であり……」

「さやかちゃんそれ以上言つと怒るよ!？」

「すみませんちつぱいまどかさん」

「ちつぱいつて言うなー!」

確かにまどかは『ちつちやい』やも知れん。

だが、我々は声を大にし、全世界へと高らかに言い伝えよう。

それが、それこそが良い(・・)んじゃないか、と。

それはさておき、覚めるどころか冷めてきたほむら。被り直した鉄面皮で、まどかを見下ろす。

「離してもらえる? 鹿目まどか」

「うつ……やだ」

「何故?」

「な、なんでもっ」

「……………」

ほむらの視線を、まどかは上目遣いでなんとか受け止めた。  
何故と問われても、実際まどかは返せる言葉を持ち合わせてはいなかった。

ただ、『何となく』、それ以上のものがない。

それなのに、ほむらを引き止めている腕の力は増すばかり。

おまけに、そうしている自分に対して、大した不審感が湧いてくることさえしなかった。

「……さつさと、帰りたいのだけど」

「帰る……？ 一体、何処に帰るって言うのかなあ？」

「！」

聞く者によれば即刻通報モノの言葉を発したのは、我らが主人公  
(笑) 城戸真司。

その後頭部にはそれはそれは立派なコブをこさえられていた。最早漫画レベルである。

「ほーむらちゃん？、家の中で走り回ったらダメじゃなか」

「……………」

「黙ってなくって、ちゃんと『ごめんなさい』くらい……………」

「ちよっ、ちよい待ち！」

至って普通にほむらを叱る真司へと、さやかの待ったが飛んだ。

「ん？なにさやかちゃん？悪いんだけどちょっと後で」

「いやいやいや、なんであなたはナチュラルにお叱りタイム入るうとしてんのよ？ 他に突っ込むところあんでしょが！」

おそらく、先にあつたほむらの激昂やらなにやらのこと。  
展開の急激転換があつても、先のシリアスが無くなるわけではない、というかわけがない、なので皆様ご安心を。

「？ え？ なんかあつたのか？」

「いや、なんかつて……マジで言つてらっしゃる？」

このタイミングでこの反応、空気を呼んでいるか、それとも逆に全く読めていないか。

そう判断するのが妥当であろう。  
が、

「？？？？」

本気だった。ガチだった。マジだった。  
紛わず、揺るがず、一切気づいていやがらなかったのをごさいますとさ。

「さて、城戸真司が色々アレだと言うことは置いておいて」

「ちよっ！馬鹿にすんなよ！？」

「誰かこの皿を机に置いてくれないかい？そろそろ耳がつりそうなんだ」

「……無視がよくそう」

「そっぴゃ結局何なのよコレは」

キウウベえさんのナイススルーにより傷付いた真司と、それを慰めるマミを横目に、唯一手の空いていたさやかが皿に手をかけて、

「……………は？」

揺らぎのない水面に投じられた一石のように、その言葉はなぜだかとても良く部屋全体に響き渡って、皆の視線を一つに集めた。

「お料理がどうかしたのさやかちゃん……………って、この匂いは……………」



ほむらの腕にしがみついたままに、まどかは漂っている匂いに眉を少ししかめた。

別に妙な感じであつたり、嫌いなわけではない。むしろとても美味しそうであるのだが、問題なのはそこではなくて、

「……ねえ、真司」

「な、なんだよ、変に改まっちゃって」

「今まで結構言ってきたし、もう繰り返すこともないと思ったけど、やっぱりもっかい言わせてもらっわ」

さやかの視線は針のごとく鋭く、氷柱のように冷たい。

まどかは何も言えない風ながら、やはりさやか同様の冷たさをたたえている。ただし位置はほむらの傍らで。

ほむらは通常運行。デフォルトで冷たい瞳のままに、女神抱擁を抜ける方法を探しているご様子。

マミさん一人流れが分ならず、何事なのかとオロオロわたわた。

そんな若干の混沌を内包した空間で、美樹さやかが告げるのは、限りなさすぎて一般論。

「女子が中心の集まりで出るのが『餃子』とかぜつつつつつたいに馬鹿でしょあんだ!？」

全国幾億の乙女共が力強く頷く姿が目映った気がした、さやかちゃんなのでした。

「えっ！？えー……でも味には自信が………」

「ウマイマズイの問題じゃなくって！集まって餃子突いてる美少女って何よそのシニールな絵面！？」

「それに制服とかに臭い付いちゃうかも、ねえほむらちゃん」

「……臭いが付く以前にあなたに引ッ付かれてる状況なのだけど」

「あら、暁美さんってば地味に美味しいことを」

「……………」

腕に伝わり続ける温もりを、心の奥のみで心地好いと感じながら、ほむらは部屋の中を見渡す。

さやかを見て顔をしかめて、キュウベえを見てもつと歪む。真司とマミを流し見て緩み、最後にまどかを見下ろすと、瞳の何処かが、揺らいだ気がして、

「……………」

大した苦を見せずに、ほむらの腕がスルリと抜けた。

それが当然だと言わんばかりのほむらに、まどかは驚きの表情を隠せず、

「あつ……」

続いてその表情は、切ないように、迷うように。

そんなものに目を暮れることなく、ほむらはまどかの隣を通り抜けた。

『家の奥側にいる』、まどかの隣を。

「……え？」

「あら、どうかした？ 鹿目まどか」

あまりに自然にそうしたものだから、一瞬だけ誰も気づかずに、その内にテーブルの片隅に腰を下ろして、

「一緒に食べては、いけなかった？」

そう言いながら浮かんだほむらの微笑は、まどかだけに見えたものだった。

「あれ？いつの間に座ったの転校生？」

「ついさっき」

さやかに対しては、淡々とした事務的な言葉で返す。

「暁美さん……………」

そんな彼女に、マミの声がかかる。

何を言いたいのかは大体わかっていたから、こちらも淡々と。

「巴マミ、さっきまでの話は、出来れば忘れてちょうだい  
貴女の贖罪なんて、わたしは必要も興味もないから」

優しいのか、冷たいのか、何とも言えない言葉。  
それでも、マミは頷いた。

「……………わかった。でも、いつか、ずっと先でも構わないから、  
もう一度お話ししましょう？」

「……………考えておくわ」

一連のやり取りを見ても、何が何やらさっぱりなのが城戸真司。ハブである。蛇ではない。

「そういや、結局俺何があつたのか知らないんだよな」

「僕は聞こえてたけど、特別に教えてあげても」

「はいはい男衆は空気を読む！つてか餃子そのまんま食わせる気かあんたら！何かないの？」

「あつ悪い、タレ取ってくる」

「じゃあぼくは耳を洗つてこようかな、餃子の『タネ』を混ぜさせられていたせいで気持ちが悪い」

「え、キュ、キュウベえが、練つたの？」

サラリとした衝撃発言は、まどかを固めるには十分なものであったらしい。

「まあね、ああ心配せずとも毛とかは入ってないから僕をそこらの犬猫と同じだと思っていたとしたら、失礼な話さ」

「そうね、犬猫に失礼だわ」

「ほむらちゃん!？」

「やれやれ、君ならそう言うと思ってはいたよ

「こつも嫌われている理由とか、色々聞きたいところだけど」

「キユウベえっ」

「わかつているさマミ、また次の機会に、だろう？  
それじゃあ洗ってくるよ」

「ふん……」

「はいお待たせー、真司くん特製餃子ダレですよっ」と

そうこうしている間に、真司がご到着。

「特製？、無駄にこってんな」

「真司さんってお料理できたのね」

「まあね、レパートリはそんなにないけど」

ニコやかな会話に、まどかがふと何かに気付いたような声を挟んだ。

「あれ、そういえば、いつの間かマミさん真司さんのこと名前で

呼んでるんですね」

「ああ！それわたしも気になってた！しかも敬語も無くなってるし！」

「え？ あ、いや、これは、その……えへへ」

「えっなにその笑顔マジかよどちくしょうわたしのまどかとマミさん両手に花計画がああ……」

「さ、さやかちゃ」

「おのれ真司い！お前のせいでわたしの計画も破壊されてしまった！！」

「うおっ？！」

「悪は潰えた、というべきかしら」

「ほむらちゃん地味にヒドイよそれ」

「ずるいずるいー！わたしも名前呼びが良ーいー！！」

子供かよと突っ込みたくなるじたばたさやかちゃん。実際子供だけども。

なんにしろ、そこまで頼まれればマミとしても悪い気はしない。でもやっぱり、頬は赤らんでしまい、遠慮がちな上目遣いで、

「え、えーっと、じゃあ、さやかさん、と、まどかさん……で、  
いいの、かしら？」

だが、『それ』がいい（本日二度目）

「……こいつあやばい、やばいぜまどか、思った以上に破壊力あるんだぜこれ」

「は、破壊力？」

無論、物理的な意味ではなく『ハートを狙い撃ち』的な意味で、  
わけが分からない素振りのまどかだが、その実ドキはムネムネしっ  
ぱなしだった。

真司もまた、急に外を眺めて居もしない野鳥の数を数えだす。  
唯一の例外はほむらで、見向きさえせずに真司と一緒に持ってきた  
小皿を各人へと回していく。キュウベエの分を『うっかり』失念し  
てしまうのも忘れない。

「それと……ほむらさん？」

「！？」

その無関心が、一つの言葉で一瞬にして剥ぎ取られた。  
吃驚である。声こそ漏らさなかったが、誰もがそうだと理解した。



「あ、もしかして、嫌だった？」

「……いえ、好きに呼べばいいわ」

ほむらはふいっと、真司と同じ方へ顔を向けた。やはり野鳥の姿はない。

しばらくの間、何かを数えあぐねているような口の動きをして、やがて閉じて、何かが数巡したのちに、

「……………巴さん」

「!？」

その言葉がほむらの最後の言葉に続くものだと、マミは理解するのに数秒を要した。

「ほ、ほむらちゃん、今のって」

「……………忘れなさい」

「て、転校生のデレ頂きましたあ!!」

「忘れろと言ってるでしょう」

「うんうん、やっぱりみんな仲良くが一番だな！」

「城戸真司……」

必死の言い繕いに、誰も耳を貸そうとしない。  
馬鹿な真似をした、思わずほむらは額に手を当てた。

「ほむらさん」

「ん？」

マミに声をかけられ、視線だけを向ける。

「えっと、これからよろしくね」

そうして見えたマミは、綺麗な笑顔。  
今置いてある手をどければ、直視もできはしないだろうほどの輝き。  
だが、それでも、ほむらは手を下ろした。

「……………邪魔はしないでね」

「ええ！」

満面の笑みのマミと、仏頂面のほむら。

ニヤニヤと二人を見守る真司には、対極の表情であるそれら二つが、とても似通っているように思えたのだった。

「さあてそれじゃ、冷めないうちに食べようぜ」

「でもキユウベえがまだ……」

「呼んだかいまどか？」

「どわあ！？いつの間にいたのよあんた！」

「今来たところだよ」

「……………」

「それじゃ、みんなそろったことだし」

マミが手を合わせた。

他の全員も、キユウベえまでが耳から生えている何かを合わせて、

……いただきます！

ごく普通の家庭の、ごく普通の幸せの証。  
そんな号令が、マミの家に溢れたのだった。

- - - - -

その夜、場所は変わらずマミ宅にて。

真司はリビングで牛乳片手にくつろいでいた。

その身体からは湯気が上がっており、彼が風呂から上がってすぐであることを示している。

真司が入っていた風呂に、今は交代でマミが入っている。

年頃の少女は壮年の男性の後の入浴に嫌悪感を抱くというが、マミは別段どうこうと騒ぎはしなかった。

ありがたい反面、その無防備さに軽い不安も覚えてしまう。

これもまた父性が、などと思いながら牛乳に口をつけた。

家電の駆動音が聞こえるぐらいの静けさの中、真司はふと今日の出来事を反芻し始めた。

始めは正直自分以外の全員が恐る恐る箸を動かしていたが、さやかが一口した後の『うまい！？』が響いてからは、もはや争奪戦と化していた。

ほむらからの評価は一貫して『まあまあ』だったが、これからの目標が出来たと思えばむしろ良いことだ。

（それに、それ以上に）

まどかが笑顔で、さやかが笑顔で、マミが笑顔で、それに、ほむらもきつと。

互いにいがみ合っていた筈の仲が、ああやって同じテーブルを囲むことが出来る。

（そうだよ、戦う必要なんで、殺し合う必要なんで、何処にもないんだ）

力と願いを持ったものはぶつかり合う、それがライダーバトルの原則で、真司の目の前にずっと広がり続けていた世界だった。

だが、彼女たちは違う。

根本の願いが別であっても、話し合い、歩み寄り、力を合わせるこ  
とが出来る。

真司は、『元の世界』では有り得なかったそれが、『この世界』で  
手に出来ることが堪らなく嬉しく――

（ん？）

そう考えた瞬間、閉まりきった筈のリビングを、風の通り抜ける音  
がした。

真司は首を傾げる。きつとどうでもいいことであろうが、何か気  
になった。

しかしその探求へと遣ろうとした意識は、ドアが開いた音へと持つ  
てかれてしまった。

反射的に振り返って、

「っ!？」

すぐさまに戻る。

やっちまったという罪悪感と、インモラルな興奮が心の内を跳ねた。

ドアを開けたのは、風呂場から戻ったマミであつた。それは二人しかいない此处では当然のことで、騒ぐほどではない。

ただ、その格好は、二十歳を超える真司にとってさえも少々刺激的だつたのだ。

シンプルな、黄色いチェック柄のボタン止めパジャマ。

一般的なそれに漏れずゆつたりとした調子の服だが、胸の部分だけパツパツと張り、内にある二つの存在を強く主張している。

日中はロールされている金髪は下ろされ、腰近くまで柔らかなウエーブを描く。

湯上がり故のほんのりと赤らんだ肌も相まって、少女らしさを残しながらも熱を帯びた色気を纏っていた。

「真司さん？」

なんでもない内容の声が、マミが発しているというだけで、脳内で麻薬に変換される。訳が分からなすぎる現象だ、父性はどうした父性は。

「な！、なに？」

雷親父の拳骨で注射針をへし折って、何とか普通の言葉を返す。

「その、わたしの部屋、来てもらえないかな？」

何故麻薬取引はなくならないのだろう、そんなことが気になって仕方がなくなってくる。

雷親父の右手は使い物にならないまでに赤黒くなっていた。

「な、な、なんで？」

「それは……行つてから話すわ」

真司はもはや何も言わない。一つ頷いて見せると、牛乳を一気に飲み干した。

胃に流れ落ちた冷たさは、もはや何の意味もなさかった。

- - - -

今になって思いだせば、真司は一度もマミの自室をそれとして見たことがなかったのだ。

目にただけなら、あの別れの日と、つい前日にマミを探し回った時が当て嵌まる。

しかしその時に目が追っていたのはマミであり、部屋やその様子は関心の外に有った。

だから、気づくことができなかったんだ。

「マミちゃん、これは……………」

「ええ、そう」

マミがカーペットの敷かれた床に正座した。年頃の少女にしては慣れた動き。隣に真司も続く。

二人の前には、仏壇があった。

仏壇に置かれた一つの写真にうつる二つの顔を、蝋燭でゆらゆら香る火が照らしだす。

金色の髪をした柔和な笑みの美しい女性と、厳格そうな顔付きの中に優しさを湛えた男性。

女性の方は得に、マミと似通った顔付きをしている。

「わたしの、パパとママ」

マミの声が、静かに震えた。

「わたしの大切な人たちで、わたしが……………死なせてしまった人たち」

「マミちゃん、それは！」



「違う」という二の句を発しようとした口は、マミに当てられた人差し指によって静止させられた。

真っすぐに見つめてくる真司に、マミはニッコリと笑いかける。

「ありがとう。あなたのその言葉は、本当に嬉しかったし、本当に救われた」

でも、とマミは続ける。

真司は先とは掛け離れた理由で何も言わなかった。

マミの笑顔は、何処か辛そうでありながら、紛れなく笑顔だったのだ。

「……………わたしは、助けられなかった  
助けられた筈なのに、助けられなかった」

きつと、口ずさむのも辛い詩。

一節一節が心を突き刺し、血を流させる。

「それは、魔法少女のわたしじゃなくて、わたしがわたしとして、  
受け止めなきゃいけないこと」

それでもマミは歌いつづける。

詩を深く深く、己に染み込ませていくために。  
覚悟をより強く、己の身へと突き刺すために。

シン、と、何もない空間が流れた。純然として、汚れない。  
故にか、マミが落とした一滴は、辺りに良く響いた。

「……ごめんなさい」

漏れだしたものは、凜として揺るぎなくそこに在りながら、あまりにか細い淡さ。

「助けられなくてごめんなさい。逃げてしまつて、ごめんなさい。  
弱い、わたし、で、ごめんなさい………」

ぼつり、ぼつり、カーペットが、濡れていく。

5年前のあの時からずっと溜まり続けてきたのだ。  
眼を溶かしてしまいそうなほどの熱さで、留めなく溢れ続けて。  
それでも、心は真つすぐに、失った両親を見つめて。

「もう、忘れないから」

「パパとママの思い出も、わたしの罪も、全部一緒に生きるから」  
「もう、無くさないから」

「大切な人の手を、絶対離したりしないから」  
「だから、だから………」

そこからは、もう、音にもならない。

ただ、想いだけ。ただ、少女だけ。

ずっと着込んでいた見映えばかりよい鎧の重さで何とか立っていた身体は、今にも倒れてしまいそうに思えてしまつて。

真司は、その隣に寄り添い続けた。

マミもまた、真司へと身体を預ける。

互いの重さを感じ合い、互いの熱を分かち合う。

気付けば、涙は止まっていた。

（ねえ、真司さん）

温もりを感じながら、マミは想う。

（わたし、誰かにパパとママに会ってもらったのって、貴方が初めてなのよ？）

今、言葉を紡ぐのは、なんだか無粋に思えてしまうから。  
ただただ、想い続ける。

（……わたしは、絶対に貴方を守る。）

（過ちを繰り返さないために、もうあんな思いをしないために）

（でも……）

キュッと、真司の手を握る。  
さらなる熱を求めるように。

（わたし、まだまだ、弱い子だから）

（どうか、わたしの隣にいてください）

（たとえ抱いている想いが、わたしと同じじゃなくてもかまわないから、それでも、いいから、そうすれば、わたし……………）

（もう、なんにも、怖くなんてないから……………）

静かな時間が流れる。

これからも、流れ続ける時間が、少女だけの場所だった部屋で。  
そこで二人を見守って、写真の中の両親は、柔らかな笑顔を送り続けた。

夜明けは遠い。

それでも、彼と彼女は迷わずに進める。  
繋がった手が、互いを導いてくれるから。  
いつまでも、どこまでも  
ずっと、二人は……………。

- - -そして、誰もいなくなった

少女を一人、置き去りにして

少女を、たった一人残して

少女だけが、生き延びて

少女以外が、いなくなった

でも、それでも - - -

- - -彼は、いなくならない

## エピローグ 孤独（いま）の先の二人（みらい）（後書き）

ラストシーンの、最後のフレーズ

あれには、前にも使った『そして誰もいなくなった』と『10人のインディアン』以外に元ネタが存在します

その元ネタ自体が『そして誰も』を弄ったものなんです

分かる方はいらっしゃるでしょうか？ヒントは『は希望の虹』

分かった人は僕と握手！

マミさんが改心したからといって、安心するのは些か早計

今回の彼女で分かった通り、基本的にメインキャラは何かしら独自解釈という名の独自設定が加えられています

原作ファンの方には、非常に申し訳ない

ただ、もうマミさん以上のキャラ崩壊はない……はずです、きっと！

4月に始まり、はやくも半年が経過して10月

ライダー×魔法少女第一部、これにて閉幕

これまでを総括した感想なんかを貰えると嬉しいなー、なんて、調子に乗ったことも考えちゃってます

まあ、今になって読み返すと、かなり矛盾してる部分を見つけてしまいましたが

特にマミさんの負の部分は、かなり七転八倒四苦八苦しながら、咄嗟の思いつきにも助けられたりして完成したため、ある場面での心理描写が完全な矛盾となってしまったことに後から気づき、一人で悶絶したりもしていました

さて、今後は幾つか外伝的なものを挟んでから、第二部へと進んで行きたいと思います

前回の後書きでも言いましたが、わたしの思いは尽きないがゆえ、

もう一度言わせていただきます

お気に入り登録を下さった皆様、評価をつけて下さった皆様、感想を書いて下さった皆様、連載初期よりいつもたくさん感想を書いて下さる『ゲーム厨』様、そしてここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます  
今後どうか一つよろしく願います

それでは、次章も見てくださいね！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1209s/>

---

仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか 孤独<いま>を変えるは龍の騎士

2011年10月9日07時41分発行